



未来日記



なお

1話：「出会い」

カチカチッ。

ディスプレイを見ながら、自分のブログを開く。

誰も見る事が出来ない、非公開のブログ。

ここには、俺の全てがかかっている。

そして、左手には彼女から受け取った手紙。

これと照らしあわす為、振り返るのだ。

俺は何処からずれていたのか。

何処から傷つけていたのか。

もう一度確認するために。

そして、次の一步を見つけるために。

今、見直さないといけない。

自分の歩んできた道を。

彼女から受け取った1枚目の手紙を握り締め。

出逢った頃のブログを読み返した。

4月6日、始業式。

俺は、高校生2年になり新たなクラスへ足を踏み入れた。

ガヤガヤしていると思って入ったのだが、

まったくの裏目。

1年の時と同じだったであろうメンバーが

こっそり話をしている位で、

他のメンバーは静かに座っていたり寝ていたり。

なんか、居心地わりい・・・

そういや、俺と同じクラスになったツレいたっけな・・・

自分のクラス確認しただけで、他のヤツをチェックするの忘れてたぜ。

自分の席に向かう中、知ってるヤツがいないか見渡す。

「おっ」

俺の声に反応したように、ツレの福岡（ふくおか）と目が合った。

「よっ！成瀬（なるせ）。今年も宜しくな」

そう言って軽く手を上げ、合図する。

俺は自分の席に向かわず、福岡の机で立ち止まり。

「おう。今年こそは、勝ち越してやるからな！」

強く福岡の顔に指さし、忠告した。

俺達の間では、毎日昼になったら購買担当を決める事になっている。

ジャンケンで勝負して、負けたほうが二人分の飯を買ってくるんだ。

俺は1年の時、概ね2/3の確率で負けており、

ジャンケン弱魔王の称号が命名された。

だが今年は違う。

春休みにネットで調べたんだが、間をおかないジャンケンをすると、

高確率でグーチョキパーの単純な動作を出す人が多いという情報を得た。

今年はこれで勝ってみせる。

完璧な作戦すぎて我ながら誇らしい。

「今年も、パシリに使わせてもらうぜっ」

そうにやにやしながら福岡は笑う。

何か俺、子ども扱い。

この笑顔、やたらむかつくぜ。

だが、この笑顔に何人の女が騙されたことか。

悔しい話だが、こいつはめっちゃ格好いい。

「顔」だけが売りで、女と遊んでやがる。

キーンコーンカーンコーン……

8時30分のチャイムが鳴る。

「ふん、まあみてろ」

俺は捨て台詞を残し、自分の席へ座る。

この学校は体育館がないため、始業式と言っても

館内放送で行われる。

新しくなった40代位の男担任もクラスに入ってきて、

簡単な自己紹介を黒板に書き始めた。

三越泰三（みつこしたいぞう）という名前らしい。

「先生を怒らせると痛いぞお。ハメをはずさず、しっかり勉強するように！」

担任のオヤジギャグに全米が引いた。

冷たい空気の中、遠慮なく自分の自己紹介を話しているが、

耳が腐りそうなので寝る事にした。

……

トントン。

肩を叩かれて、ふと目を覚ます。

眠い中、ゆっくり顔を上げる。

俺の席から前は、さっきまであった机がなく、

ガランとしていた。

周りを見渡すと、どうやら掃除しているようだ。

「掃除するので、机後ろに下げてほしいんですけど」

ほうきを持ったセミロング位の可愛い子が、俺に机を下げろという用件で起こしたらしい。

「ああ、悪いな」

ずずっと、軽く机を引き、5cm位机を下げる。

そして俺はまた寝ようとする姿を見て。

「あの、後ろに下げてほしいんですけど」

また俺に向かって命令してきた。

「ああ、下げたよ。見てなかった？」

「え・・・今の下げたんですか？」

「ああ。見たろ？机を後ろに下げたぞ」

ちょっと困ったような顔をして、悩みこむ。

数秒して、パッと目が開き、何か名案が浮かんだようだ。

「今の、200倍位下げてもらえますか？」

「は??」

200倍？

意味わからん。

こいつあほちゃうか？

「200倍ってどんなもん？」

「えっと、、、あそこの机位です」

そういつて後ろの机を指差す。

振り返って距離を見るが、

どう見ても2メートル位しか距離はない。

200倍も移動したら机と机がフュージョンしちまう。

そう考えると少し自分の中でウケてしまった。

それを隠そうとちょっとニヤニヤしてしまう。

「わかったわかった。下げるよ。すまん」

こいつのあほっぷりに負け、いそいそと机を下げる。

なんか、おもしろいクラスに入ったもんだな。

皆は掃除してるが、寝ていた俺にはどこの担当かわからん。

「ねえねえ、掃除って何時まで？」

さっきのあほっぷりな子に聞く。

「えっと、あと10分位です」

「そっか。サンキュ」

俺はその場を離れ、他のクラスにどの知り合いがいるのが見て回る事にした。

どうやら結構バラバラな所に点在しているようだ。

見かける度に掃除の邪魔をし、一声自分のクラスが何処か教える。

ついでに階段の通路を渡った奥にあるトイレへ行こうと向かったが。

何処かのありきたりな出会いの風景のように、
階段の通路で誰かと正面衝突をした。

ゴチッ！

肩と肩がぶつかったあと、ノンストップで頭が飛んで来た。
見事に俺の耳付近にクリーンヒットし、耳がキーンとなる。

「つつー！いってえなー！何処みとんじゃい！」

頭突きをもろに食らった耳を押さえながら、
犯人ににらみを掛けた。

「あたー。。。ごめんなさい！」

頭を押さえながら、懸命にいたそうなそぶりをし、
目を瞑りながら俺に謝る女の子がいた。

よく見たら、1年の時同じクラスだった中山千里（なかやまちさと）じゃないか。

「千里ー！お前が犯人かよ！」

千里は頭をさすりながら、片目を開けて俺を確認する。

「あ、光一（こういち）くん。ごめんねー。」

「ったくー。お前、前方不注意すぎなんだって。何処目つけて歩いてんだよ！」

「ここ・・・」

千里は自分の目を指さしながら、涙ぐんでいる。

よほど痛かったらしい。

俺もまだ耳がキーンと鳴っていて、痛恨のダメージを受けたんだが。

「それは仮の目だろ？本当は後ろについてんじゃねーのか？」

「仮の目ってどう言うことよ～。ここにちゃんと2個あるんだから！」

両手の人差し指で両方の目を指差す。

「後ろに5個位ついてんだろ？ちょっと後ろ向いてみい？」

「またー！ついてないんだからね！ばか！」

そう言いのこし、自分のクラスへ歩き出した。

そんな後ろ姿を見て。

「やっぱ後ろに5個ついてんじゃん」

そう言われた千里は猛スピードで振り返り。

「ついてせんよーだっ！」

今時流行りもしないあっかんべーをしながら遠ざかる。
が。

「ぎゃっ！」

俺にあっかんべーしてて前方見てなかったがために、
また違う人とぶつかってやがる。

「あたー。。。ごめんなさいー！」

あいつの行動は永久ループだろうか。

また声かけると2度ある事は3度あるになりそうなので

やめておく事にし、トイレへ向かった。

気分すっきり膀胱すっきりになり、自分のクラスへ戻る。

廊下を掃除していたヤツもほとんどが教室にはいったようで、
数人ちらほらいる位だった。

クラスに入ると。

「あー！光くん！」

千里が俺を指さしていた。

なんだ、千里も同じクラスだったのか。

千里の前に歩み寄る。

「千里も同じクラスだったのか。さっきは気づかなかったぞ」

千里の前の席に誰も座っていなかったので、

勝手にイスを拝借し、反対向きに座る。

「そうだよ。一緒のクラスだよ。ずっと寝てたでしょー」

「いや、瞑想してたんだよ。集中して先生の話聞かないとダメだろ？」

「えー！じゃあ、先生何話してた？」

「自己紹介に始業式。だろ？」

「んー・・・まあ、そうだけど。。本当に起きてたの？」

「もちろんさ。俺が始業式早々寝るわけないだろ？」

「寝ると思う」

「即答かよっ」

「もちろん」

「瞑想だぜ？」

「よだれたらしてたけど？」

「えっ！まじ？」

「ほらー！寝てたんじゃん！」

「あ、しもた。。千里トラップにひっかかった」

「トラップとか言わない！もう！」

他愛のない会話が弾んでいる中、担任が教室に入ってくる。

俺は自分の席へ戻る。

明日からの時間割りが書き出され、それをメモする。

今週の授業は午前中だけか。

ジャンケンできねーじゃん。

そう思いつつ、無事高校2年1日目の学校は終わった。

福岡と少し話した後、帰宅するために1Fの下駄箱へ向かう。

すると、机を200倍下げろとか言ってきた子が

自分の下駄箱から靴を取り出してる姿があった。

「よっ、さっきは起こしてくれてサンキューな」

俺は気軽に声をかえる。

向こうも俺に気づいたようで。

「いえ、こちらこそお休みの中起こしてごめんね」

少しは気をつかっていたようだ。

「いや、あれ瞑想したから。集中し過ぎて気づかなかったんだ」

「え？瞑想って、俺に打たれる瞑想の瞑想ですか？」

「そそ、頭の中で俺に打たれてたんだよ。」

俺は自分の下駄箱から靴を取り出し、靴を下ろす。

「痛かったですか？」

「ん？ああ、もうなれっこさ。200年は俺の修行受けてるからね」

わざと200という数字を強調して言って見る。

「え！今、何歳ですか？」

こいつ、本気で質問してんのか？

このままだとボケ殺しじゃないか。

俺は靴を履きながら。

「今216歳でね、200年ばかり留年したのさ」

「え———！本気で言ってます？」

「嘘にきまってんじゃん！ってかつっこめよ！」

完全にボケ殺しだった。

こいつ天然なのか？

「ですよー。びっくりしちゃいました」

そういいながら止まっていた手が動きはじめ、

彼女も靴を履く。

俺は校門を軽く指さし、一緒に歩き始める。

「お前って天然だよなー。よく生きてこれたな」

「天然ですか？普通ですよ？」

「ああ、天然なヤツほど普通っていうんだよ」

「そうなんですかあ。でも普通ですよ？」

「ああ、だから天然なヤツほど普通って言うんだよ」

「そうですかあ。普通なんですけど・・・」

「だから、普通と言うやつが天然なの！」

「え——。それは困っちゃいますねえ。普通がいいです」

もういい。

どうしてこんなに女は永久ループを好むのか。

ようわからん。

「お前さ、名前なんていうの？」

話題を変えに入る。

「私は美恵（みえ）って言います」

「へえー。上の名前は？」

「だから、美恵です」

「へえー。じゃあ、下の名前は？」

「下の名前も美恵です」

「え？もしかして、美恵 美恵っていう名前なの？」

「はい・・・よく、同じ質問されるんです」

「まじかよ！ すご一名前だな。わかりやすい！」

「覚えてもらうにはもってこいなんですけど、
上も下も同じだけに、ちょっと説明が大変なんです」

「そりゃそうだろうなあー。俺もびっくりしたぜ。

世の中そんな名前もあるのねー！」

「うんうん。あなたは、名前何ていうんですか？」

「俺？俺は、成瀬光一。光一でいいよ」

「光一くんですかー。堂〇光一みたいな名前で格好いいですねー」

「だろ？ダンサー光一って呼んでくれていいぜ」

「じゃあ、光一くんで」

「あ、そう？じゃあそれでいいや」

軽く流されたな。

こいつ、回避能力はそれなりにあるらしい。

「あ、わたしの家こっちなので」

美恵が立ち止まり、後ろの方角を指さす。

「え？通り越したってこと？」

「はい。つい話してる間に、過ぎちゃったみたいです」

「そかそか、そりゃすまんかったな。気をつけて帰れよ」

「はい。それではまた明日」

深く礼をし、逆の道を歩いていく。

俺は軽く手を上げ、バイバイをする。

なんか、あいつやっぱアホだよな。

そしてボケ殺し。

とみせかけといてうまい回避。

なかなか曲者だな。

俺はそう感じつつ、自分の帰路を歩くのであった。

俺はこの日のブログを読み終え、

彼女の手紙に振り返る。

「光一くんと出逢ったあの始業式。

先生の話も聞かず、ずっと寝てたよね。
瞑想とか言って騙されちゃったけど、
そんな愛嬌が私には新鮮に見えた。

下駄箱の前で、声掛けてくれたよね。
自分の名前を言うのが恥ずかしかったけど、
すごって褒めてくれた。

ダンサー光一くん。

光一くんは。

私が出会った中で、一番印象に残る人だったよ。」

こいつ。

あの時の事なんか。

俺、あんまり覚えてなかったのに。

女って、よく覚えてるよな。

こんな女だったなんて。

当時ミトコンドリアの大きさも感じ取れなかった。

本当に。

つよいよな。

美恵。。。。

2話：「家庭の事情」

4月10日、金曜日。

短縮授業も今日が最後。

やっと来週からジャンケン勝負が出来る。

相変わらず授業は真剣に聞かないといけないと思い、
瞑想を続けている。

あまりにも瞑想に集中している為、
ノートは人のを写させてもらっている。

「よっ、また貸してくれや」

千里に声を掛け、いつものように今日あった授業のノートを要求する。

1年の時から毎日借りているだけあり、要領もいい。

千里は今日書き残した内容の部分だけバインダーからはずし、
ルーズリーフを差し出してくる。

「はい。今日の分」

「サンキュー」

ルーズリーフに受け取り、カバンへしまう。

「あ、今日世界史宿題出てるから月曜には返してね」

「OK。そんじゃ火曜宿題写させてもらうな」

「またあー。たまには自分でやったら？」

千里は首をかしげて口をとがらせながら少し頬を膨らませる。

すかさず人差し指で膨らんだ頬をぷにっと押した。

プッ。

押された圧力によって口から空気がこぼれた。

唇の摩擦により小さな音が出る。

「ちょっとー。何してんのよ！」

俺の人差し指を握り離し、ちょっと怒ってる。

「やってほしいから膨らませたんだろ？」

「なんでやさあ！ちょっと光一くんもやってみてよ」

「あほか。俺がやっても可愛くないだろ？」

千里がするから意味があるんじゃないか」

「またあ。そうってすぐごまかすでしょー」

「へいへい。あまりの可愛さにつつつきたくなっただね。

ってことで帰るわ。じゃあな」

そう言って軽く手を振り、教室を出る。

千里も軽く手を振って俺を見送った。

下駄箱に向かうと、自分の靴を取り出そうとしている美恵が立っていた。

背後から近づき、こちらに気がつきそうにないので、

肩をポンと叩いてみる。

「よっ」

叩かれると過敏に反応し、体を逃がそうとした。

ガターーーン！

「わあああ！っつー」

美恵は開いた下駄箱の扉にもう片方の肩をぶつけ、

278ポイントの痛恨の一撃を食らった。

下駄箱もがたーん！と音がなり、かなりの衝撃だったことがわかる。

ちなみに美恵のHPはいくつあるのか分からないので、

278ポイントの辛さは想像におまかせする。

と思ってる間に、美恵はぶつけた肩をもう片方の手で押さえ、

座り込んでしまった。

「わりい。そこまで感激してくれると思わなかったからさ。

大丈夫か？」

また触ると今度は前転宙返りで過剰反応される危険性もあるので、

あえて触れないでおく。

美恵は俺の問いかけに答える程余裕がないらしく、

小さな苦痛の音が聞こえてくる。

触れる事は自己暗示で禁止しているので、

隣まで寄り添い、座って顔色を伺う。

美恵は目をつむって痛みに耐えてるようだ。

「保健室、行くか？」

美恵は声を出さず、顔を横に振った。

「そっか。ごめんな」

どうしたら良いのかわからない。

とりあえず、このまま立ち去るわけにもいかないの、

美恵が何らかの反応するまで待つことにした。

しばらくして、痛みが落ち着いてきたのか、

目を開けてこちらを向いた。

「もう、大丈夫です。ありがとう」

ゆっくりと立ち上がり、軽く深呼吸しているようだ。

「よかった。家まで送っていくよ」

自分の靴を取り出し、先に履き、カバンを持ってやると

言わんばかりに手を差し出す。

美恵はその行動に気づいたのか、カバンを差し出してくれた。

俺はそのカバンを受け取り、美恵の行動を見守る。

「この前の所まででいいですよ。私の家、遠いので」

そういいながら靴に履きかえる。

「この前の所って、行きすぎだったんだろ？」

「電車通学？」

「うん」

「じゃあ駅まで送っていくよ。それなら良いよね？」

美恵は顔を縦に下ろし、二人並んで校門を出る。

「肩、まだ痛い？」

「うーん。ちょっと痛いけど、もう大丈夫ですよ」

「そっか、ごめんな。今度から気をつけるよ」

「ううん。私がびっくりしちやっただけなので、

光くんは悪くないですよ」

「そっか」

美恵の顔を見て様子を伺いながら話していた。

風に乗ってさらさらと波打つ髪。

揺れた髪から甘い良い匂いが俺の鼻の下を通る。

「ん？」

さっきは見えなかったが、後ろの首の下あたりに

青タンのようなものが見えた。

「首の後ろの青タン、さっきぶつけたやつか？」

気になって聞いてみる。

「え？多分、そうだと思います。でも大丈夫なので

心配しなくても良いですよ」

「そかそか。って、本当にごめんね。青タンまで作らせちゃって」

「いえいえ。ご心配おかけしてすいません」

そう言いながら、美恵は肩をもう一度なでる。

なでた反動で、制服が少しずれ、さっきの青タンが見えた。

ようにみえたが。

いや、あるんだけど。

その横にもないか？

「あれ？ちょっと、首見せてもらって良い？」

気になって聞いて見る。

「え？もう大丈夫なので。このままにしておいて下さい。

また意識しちゃうと痛くなっちゃうので」

ちょっと同様なような声で言われた。

「そっか」

意識させるなど言われたので、

これ以上この話にするのはやめる事にする。

だが、しかし・・・

そう思っているうちに、駅に到着する。

美恵は改札前で立ち止まり。

「送ってくれて有難うございました。

もう大分ましになったので、大丈夫です」

少し笑顔で、俺にお礼を言った。

「うん。気をつけて帰れよ」

そう言って預かっていたカバンを返す。

「それでは、有難うございました。また、月曜日」

「ああ。じゃあな」

軽く手を振り、美恵が見えなくなるまでそこで見送った。

俺は自分の家へと歩き出す。

しかし、さっきの青タン。

最初はぶつけた時に出来たって言ってたけど。

明らかに首の後ろとか当たってないよな。

それに、その横にも青タンっぽいのがあったし。

痛そうにしていたのは肩の端あたりだった。

ぶつけた場所と違うよな。

首の後ろって言ったのに、そうだと思うっていうのは

どう言うことなんだ？

喧嘩でもしたんだろうか。

まあこれ以上考えてもわからんし、考えるのはやめておこう。

そんな事を考えながら家についた。

「おきゃー！」

玄関で妹と遭遇する。

妹の名前は愛美（まなみ）。

ちょっとオテンバでいたずら好きな妹だ。

「苦しゅーない。ちこーよれ」

「近寄ったら何かくれる？」

「俺の靴磨きさせてやる」

「ぶーー！そんなのいらない！逃げろ～」

ダダダッ。

妹は逃げだした。

「メタルスラ○ムめ」

靴を脱ぎ、リビングに向かう。

回りを見る限り、親はいない。

「おい、愛美。おかんは何処いった？」

隣の部屋に少し大きなボリュームで問いかける。

「今日は仕事だからラーメンでも作って食えろって言ってたよー」

「そかそか」

ラーメン箱をあさり、今日の気分の味を取り出す。

「じゃーん！とんこつら～めん」

ドラえもんが四次元ポケットから出すように言うてみる。

まあ、いつもとんこつラーメンだが、そこはツッコミなしだ。

湯を注ぎ、着替えに部屋へ戻ろうとするが。

トゥルルルル。

電話かい！

仕方なく電話にでる。

「三河屋ですー」

「私、成瀬光一君の担任をしております、三越と申します」

うほ。

担任からかい。

「うちは三河屋ですー」

「成瀬君のお宅で宜しいでしょうか？」

「うちは三河屋ですー」

「さようございましたか。かけ間違えました。申し訳ございません。

失礼いたします」

ツーツー。

切れた。

何で担任からかかってくるんや？

俺なんかやったっけ？

トゥルルルル。

また電話が鳴る。

きっと担任だな。

「もしもし、成瀬です」

「私、成瀬光一君の担任をしております、三越と申します。

お父様かお母様、ご在宅でしょうか」

「どちらも月へ出張中です」

「・・・さようございますか。この声は、光一君ですか？」

「いえ、違います」

「それでは、ご兄弟の方でしょうか？」

「名乗るほどの者ではございません」

「・・・さようございますか。では、お父様かお母様、

何時ごろにお戻りになられますでしょうか」

「月にいるのでわかりません。聞いて来て下さい」

「・・・また、改めでお電話いたします」

「もうしないでください」

ガチャン。

ふう、乗り切ったぜ。

相変わらず完璧な演技だった。

我ながら惚れてしまうぜ。

トゥルルルル。

またまた電話が鳴る。

また担任か？

「サザエでございます☆」

「おーサザエ、俺だよ」

「なんだ、福岡じゃないか」

「相変わらず変な電話の取り方だな。

それより、今から遊びにいかねーか？」

「ん、何処行くんだ？」

「カラオケさ。男1女2で、もう一人

男呼べっていうから成瀬どうかなーと思って」

「苦しゅーない。いってやるぞよ」

「そかそか。じゃあ○○駅で待ってるからさ。

何時ごろ付く？」

「30分位だな」

「OK。じゃあ30分後に天女の下で」

「ういーっす」

ガチャン。

暇な1日が楽しい1日になりそうだな。

ちなみに、天女というのは駅の改札出た所に

天女の銅像が上から吊るされてる場所だ。

ワイヤー2本で吊るされてるだけだから、

前の1本が切れると見事に天女のチョップが上から降ってくる

仕組みになっている。

まだチョップ食らったヤツはいないがな。

俺は自分の部屋に戻り、着替えをしてさっそうと出かけた。

・・・

到着駅に付き、天女の下へ向かう。

福岡+2名が既に待っていた。

軽く手をあげ、挨拶する。

「お待たせ、可愛い子達よ」

福岡はあえて無視し、女性2人に声をかける。

「おー、イケメン〜」

「ありあり。そういう君達もあの天女のように輝いてるぜ」

「ほんと？褒められてるのか微妙な所だけど、とりあえずありがと〜」

ありきたり？な挨拶をかわし、カラオケへと向かった。

道中、見た事あるような後ろ姿を発見した。

さらさらとした髪でロングな女性。

あれって、美恵な気がする。

家この付近なのか。

私服可愛いな。

やっぱ純白っていいよな、春だし。

「ねえ、きいてる？」

顔をのぞかせて問いかけてくる福岡の友達。

すっかり美恵風なひとに釘付けになってしまった。

「あ、すまん。聞いてなかった。なにになに？」

「もー。それでね〜・・・」

また楽しそうに話します。

こいつ、人生楽しそうだな。

いや、女ってこんなもんか。

その後、俺は福岡と愉快的仲間達に連れられ、

楽しくカラオケをした。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、気が付けばもう18時を過ぎていた。

駅前で愉快的仲間達とは解散した。

福岡の友達だったので、得に連絡方法を聞くことなく、

普通に楽しんだ。

あ、そういや月刊誌が今日発売だっけか。

俺は改札の前でみんなを見送り、背を向けて本屋へ向かう。

ここの本屋はかなりでかくて、

何でもそろってるから都合がいいのだ。

中に入り、目的の月刊誌を手にレジへ向かう。

「あれ？」

「いらっしゃいま・・・」

レジの店員は美恵だった。

なんだ、バイトしてたのか。

「美恵じゃないか。こんな所でバイトしてたのな」

「うん。こんな所で会うなんて、びっくりしちゃいました」

「家この近所なの？」

「自宅はすぐそこなんです」

「へえ〜」

美恵はバーコードをスキャンし。

「390円になります」

俺は財布から小銭をあさり、ぴったりの額を支払った。

「お釣りはくれてやるぞ」

「有難うございます。って、・・・丁度ですね」

「うむ。ところで、何時までこのバイトしてんの？」

美恵は購入物を袋に入れ、俺に手渡す。

「あと、10分くらいですね」

俺はカバンに本を入れる。

「そっかそっか。良かったら、バイト終わってから

茶しばきにいかね？あと10分みたいだし」

「すみません、門限があるので。また今度でいいですか？」

「ああ、門限か。んじゃ、また誘うよ」

「折角誘って下さったのにすみません」

「いいよいいよ。じゃあまたな」

そうやって、本屋を後にした。

自宅に戻り、リビングへ向かう。

親も帰ってきているようで、晩飯が並んでいる。

俺の席には・・・

「おい、愛美。ちょっとこい」

「ん？何〜？」

愛美が近寄ってくる。

「これはどういうことだ？」

俺の席にあるブツを指さす。

「これ？ご飯だよ」

「ほう。これがご飯か。伸び伸びだな」

その正体は。

昼にお湯いれてそのまま放置されてたラーメンだった。

「いい感じに増量してるでしょ？お買い得」

「なんでやねん！」

パチコーン！

軽く愛美の頭を横からスライスするようにはたいた。

「痛〜〜い！ひどいよー！」

頭を抱えて痛がる愛美。

「お前がくえ————！！！」

「やだあ~~~~！！！」

そんな会話が飛び交う。
今日のなおの家であった。

俺はこの日のブログを読み終え、
彼女の手紙に振り返る。

「光一君に声掛けられた時、
びっくりして下駄箱にぶつけちゃったよね。
あの時、心配してずっと待っててくれた光一君が、
少し嬉しく思えた。
その後もすごく心配してくれて。
あの時はまだ、光一君を信用しきれていなかったから
本当の事、いえなかったけど。」

あの時、あれだけ心配してくれてなかったら。
その後はなかったと思う。
それ位。
私の中では印象が大きかったよ。」

そうだよな。
俺と美恵。
あの時のきっかけがなかったら。
今の俺もなかったかもしれない。

3話：「男性の好み」

4月13日、月曜日。

今日から6時間授業が始まる。

集中力を切らさぬよう、瞑想をしないとな。

そしてだ。

ついに、福岡へジャンケンを試すときが来た。

この週末、必死に今までの福岡が出した手を思い出してみると。

結果、最初はチョキ、その次にグーが多い事が判明。

つまり、一発目がグーで、もしあいこだった場合はチョキを出せば勝てるのだ。

完璧なシナリオ過ぎる。

俺はわくわくしながら学校へ向かった。

教室のドアを大きく開き。

「ちいっす！」

今日も気合を入れて挨拶する。

まあ、誰やねんみたいな顔で見てくるやつが多いが、気にしない。

俺は千里の前へ直行し、借りていたルーズリーフを差し出す。

「おはよ。いつもサンキューな。そして今日も頼むぜ」

千里はルーズリーフを受け取り。

「おはよお。今日から6時間授業なんだし、午後だけでもまじめに書いたら？」

「ふっ。俺はいつも真面目さ。ただな、瞑想してて暇がないんだよ」

「またあー。よく1日中瞑想できるよね。悪い意味で関心しちゃう」

ぷっとニヤニヤしながらそういわれた。

「そうだろうそうだろう。だから、毎日よろしくな」

俺はあえてそのまま返す。

「あ、そうだ、光一くん」

「ん。なんだ？」

「たまには、私のお願いも聞いてもらえない？」

千里は両手をあわせ、お祈りのようなポーズを取る。

「お願い？高く付くぜ？」

「えー。あのね、友達にプレゼント渡したいんだけど、

男の子の好きなものってよくわからなくて」

「それは何か？俺様を買い物に付き合わせたいって事か？」

千里は笑顔になり。

「うんうん！出来ればアドバイスほしいなーって思っで。

いいでしょ？たまには私のお願い聞いてくれてもー」

「うーむ・・・女の買い物はなげーからやだよ」

「今回は女の買い物じゃないよ？男性にあげるプレゼントだもん」

「ふーん。で、それは何処の誰に上げる物なのかね？」

俺はニヨニヨしながら質問する。

「先輩だよ。もうすぐ誕生日だから、

部活のみんなが合わせて買おうって話になったの」

誕生日か。

そういや俺の誕生日も来月（5月）の11日だな。

「へえー。じゃあ部活のみんなで話し合っただけじゃいいじゃん」

「それがね、男の子がほしがるものって意外と出てこなくて。

そこで、光一くんの出番ってわけ」

「はあー。俺先輩の代わりかよー。めんどいな」

「そういわずにね？いいでしょ？」

「だが断る！」

「またー。じゃあ、お願いも聞いてくれなかったら

もうノート見せてあげないよーだ」

こいつ。

駆け引きがうまくなってきたな。。。

「まじかよー！なにそれ、強制すぎね？」

「おねがぁーい。ついてきてえ？」

瞳をうるうるとさせながら、

両手の平を合わせて顔を近づけてくる。

「ちょっ。ドアップやめてくれ。

俺じゃなくて福岡つれていけよー」

「だめだよー。福岡君お金持ちだから

価値観があわないよー」

「はあ。まったく。じゃあ10分だからな。それ以上は付き合わん」

「えー。10分じゃお店全然回れないじゃんー」

「何件回るつもりだよ！やっぱり俺を連れまわす気満々じゃねーか」

「じゃあ、行く時までいいの考えといて？」

「はあー。ため息しかでねーわ。で、先輩って誰よ？」

「3年生の野口先輩だよ。知ってる？」

「ああ、身長高いバスケ部のキャプテンだろ」

「そそっ」話が早いねー☆」

「わーったわーった。考えとくよ。で、いついくわけ？」

「今週末とかどうかな？」

「あん？俺様の週末をつぶす気か？」

「だってー。今週から6時間授業だし、私部活かるから行く暇ないもんー」

そう言われれば確かに。

こいつ、平日はバスケット部に通えばなしだもんな。

「わかったわかった。じゃあ今週の土曜でいいか？」

「うんうん。よろしくね☆」

「はいはい。。。だが断る」

「じゃあノートなしね」

「・・・」

千里はルーズリーフをひらひらさせ、交換条件を強制してくる。

くそう。弱み握られたな。

「わーったよ！ちっ」

「わーい☆」

両手を挙げて本気でよろこんでやがる。

くそ、笑顔が微妙に可愛いじゃねえか。

「んじゃ、土曜な」

「うんうん」楽しみにしてるよー」

なんかけったくそ悪いが、ノートを人質にとられてしまっは困る。

次回からは行ってやったと言う弱みで断る事にしよう。

俺はしぶしぶと自分の席へ立ち去った。

ん？

美恵の席はがらんとしている。

今日は美恵休みか。

そういや先週も結構休んでたよな。

病気がちなのもしれん。

バイトしすぎで疲れたか？

そんな事を考えている間にチャイムはなり、

俺の瞑想時間が始まった。

あっという間に午前は終わり、

ついに福岡と対決する日がやってきた。

俺はすぐに福岡の席へかけより、人差し指で福岡を指し示す。

「福岡よ。ついに俺の時代がやってきた。

もがき苦しむがいい」

福岡はそんな俺を見ても冷静で。

「はいはい。んじゃ、2年一発目のジャンケンといきますか！」

「望むところだ！」

よし！

福岡はチョキを出す！

そして俺はグーだ！

「ジャン、ケン！ポン！！」

勢いよく俺はグーを出した。

さあ、福岡は！

「あいこか」

だが！ここまでは作戦通り。

グーかチョキを出す確率が高いのだ。

しかし！

次は必ず福岡はパーを出す！

これが俺の研究結果だ！

「あいっこで！！ショ！！！」

風をも見方にする如く、高速に俺はチョキを出した！

そして、もちろん福岡は！！

「お前はパーだー！！！！」

勝ち誇った笑みで福岡の手を見る。

「お前の頭がパーだよ」

「なっ！！！！なんだとー！！！！」

福岡がまさかのグー！

そんなバカな・・・

俺の研究が・・・

「ば・・・ばかな・・・こんなはずじゃ・・・」

俺はしばらく動くことが出来ない。

アストロ○の呪文にかけられたようだった。

「バカはお前だって。さあ、行ってこい。俺、焼きソバパンとミルクコーヒーな」

フリーズした俺のチョキの手に、小銭がおかれた。

俺の研究成果は、初日にあっさり否定されてしまうのであった。

その後、俺は高確率で負けていたことは、

言うまでもない。

4月18日、土曜日。

今日は千里の買い物に付き合う日だ。

男の先輩に誕生日プレゼントを渡したらしく、

俺がモルモットに選ばれたのだ。

1年友達しているが、実は二人でどこか行った事はない。

学校の帰りを一緒にした事ある位で、1日という

プライベートな付き合いは今日で初めてなのだ。

周りからみればこれはデートと呼ばれる分類なのかもしれんが、

俺はあくまでも買い物に付き合うだけ。

デートなんかじゃないぞ？

待ち合わせした13時ちょっと前に、待ち合わせ場所で千里を待つ。

鳩が俺の近くでエサをむしゃぶる。

この付近では駅前でエサを巻く人を良く見かける。

そのせいか、鳩は人間をあまり恐れる事無く、

近くまでよってくる。

ぼーっと鳩を見ていると、なんだか背後に殺気を感じた。

ふと振り返ってみると。

ぷにっ。

誰かの指が俺の頬を突き刺す。

「あははっ！ひっかかったー！」

押される圧力を跳ね返し振り向くと、

成功を自ら祝福するかのように、笑顔で俺を見ていた。

「お前なあ。いきなり仕掛けるか普通？」

「だってー。この前光一くんにやられたもん。お返しだよ〜」

そう言ってぷにぷにと俺の頬をつつく。

こいつ。

ちょっとむかつく（笑）

「さ、帰ろうかな。俺の出番は終わった事だし」

俺は駅に向かおうと歩き出す。

「ちょっとー。まってまって！」

後ろから千里が俺の手を両手でつかんできた。

仕方なく振り向き。

「何？俺の出番はこれで終わりだろ？帰るぞ」

「出番は今からだよ〜。そんなムスっとした顔しないの〜」

「誰がこうさせたと思ってるんだ？俺はのほほんとう鳩見てたのに」

「ふふっ。可愛いー。って、怒ってる？」

「うむ」

「どれ位？」

首を傾げて俺を見つめてくる。

こういう細かい素振りが、ぶりっ子だよな。。。

「千里の頭が吹き飛ぶ位」

「なにそれー。全然わからないんだけどおー」

「じゃあ、桃を縦に包丁で切ったら桃太郎にささってた位」

「痛そう〜。って、死んじゃうじゃん！」

「それ位精神的苦痛を味わったと言うことだ」

「でも本当はもう結構どうでも良かったりするでしょ？」

「全然。千里が土下座して謝ったら許してやっても良いぞ」

「えー。じゃあ光一くんもこの前やったから先に土下座して？」

「謝る有効期限は10分なんでな、もうあれは時効だ」

「じゃあ光一くんの場合は有効期限1分だから、私はもう時効でしょ？」

「俺にやった場合の有効期限は1年だぜ」

「ちょっと長過ぎだよー。せこいよー」

「ボーイファーストって聞いた事あるだろ？男の方が有利なんだよ」

「それレディーファーストでしょ〜。もう良いから早く行こ？」

「なんだ、話のすり替えか？」

「ごめんってばあ。ね、行こ？」

両手で捕らえられていた俺の手を笑顔でぐいぐい引っ張る。

引っ張られる力に抵抗することもなく、二人は歩き出す。

俺が歩き出すと、千里はそのまま片手を離し、

自然に手をつなぐ形となった。

なんだこれ。

どっからどう見てもカップルに見えてしまうじゃないか。

「ねえ千里、何で手離さないわけ？」

「あっ。光一くん！」

「ん？どうした？」

「道路側歩いてくれて有難う♪さすが、優しい〜」

「え・・・ああ。そうだな。」

何かうまい事かわされたな。

そんな事言われた直ぐ後に、手離せとか言いにくい。

こいつ、常習犯か？

何となく目的先がわからぬまま歩く。

千里はうまい具合に俺を誘導し、目的地へ進んでいるようだった。

「なあ、何処行く気？」

「んとね、もうちょっと先に伊勢〇っていう百貨店があってね。

そこで見てもらおうかなーと思って」

どうやら百貨店に向かっているらしい。

確かに、百貨店なら色々商品はそろってるし、

選ぶのは丁度いい。

「なるほど。で、予算はどんなもんなん？」

「1人1000円ずつ出し合って、10人位で買う予定だから、

1万円位かなー」

「1万円か。結構良い物買えそうだな」

「でしょー。光一くんはピッタリそうなの考えてくれた？」

「うーん。それが、名前位を知ってる程度で、
私生活とか趣味など、まったく知らんからなあ」
「そっかあ。まあ、そうだよね。同じ部活じゃないと、
話す機会なんてないもんね」
「うむ。千里はあの先輩の私生活とか、何が好きとか
知らんの？」
「んーとねー。趣味はバスケって言ってたよ」
「そりゃそうだろう。バスケ部なんだから」
「あ、そうだよね～。えーっとねー。この前、
遠征試合に行った時、すごいオシャレな私服だったよ～」
「へえー。シャレっ気があるのな。確かに、
あの人身長高いし、どんな服でも似合いそうだな」
「うんうんー。格好良いだけじゃなくて、後輩にも優しくて
みんなから憧れの先輩って言われてるよ」
「千里も憧れてるの？」
「うーん。私は、良い先輩だなーって思うよ」
「ふーん。まあ、ガミガミ切れて来る先輩に比べちゃ、
優しいほうが良いもんな」

「そうだねー、あっ。ついたよ」
気が付けば、百貨店の前だった。
俺達は案内板を見ながら行き先を考える。
そういえば、シャレっ気が良いって言ってたな。
「なあ千里、アクセサリーなんかどうだ？
伊勢^oだし、結構あると思うぜ」
「アクセサリーかあ。いいかもね」
「うむ。あの人って、ピアスしてたっけ？」
「んーん。してないね」
「そか。じゃあ、ネックとかどうだ？
これから夏で薄着だし、結構使い道あると思うぞ」
「うんうん。いいかもー」
案内板の1Fを指さし、千里はうんうんとうなづく。
二人は各店見渡しながら歩く。
「ねね、そういえば、光くんもアクセサリー付けたりするの？」
「俺か？うーん。たまにするけど、あんまりもってないからな」
「そうなんだ。どんなのが好き？」
「んと、スカルとかクロス系じゃなければ」
「へえー。ちょっと意外ー」

「そか？何かな、あれ系好きじゃないんだよ」

「そっかあ。光くんなら、お誕生日何もらうと嬉しい？」

「んー。なんだろ？プレスとかちょっとほしいかも」

「どんなのどんなの？」

「えっと」

ガラスショーケースを眺め、よさそうなのを探す。

「ああ、こんなの」

俺は1つのプレスを指差した。

千里はまじまじと覗き込む。

「こういうのかあ」

色々な角度で千里は覗き込む。

ようやく繋がれていた手が離れた。

俺は先輩にあいそうなネックを捜す。

こうしてみると、俺もほしくなってくるな。

レパートリー少ないからな。。。

「なあ、千里。これなんか良いんじゃないか？」

「ん、どれどれ」

千里が覗いてくる。

と、同時に俺の腕に手を通してきた。

こいつ。。。

「わあ。似合いそうだねー」

「うん。金額的にも丁度良い位のものだし、

これにしようぜ」

「うんうん。じゃあこれを候補に話あってみるよー」

「おうおう。んじゃ帰るか」

その場を離れようとするが。

そうはさせまいと強く腕をつかむ。

「ねね、時間もあまったし、ちょっとペットショップみてみない？」

「え？何見んの？」

「今年はやりのうさぎちゃん〜。お鼻ヒクヒクで可愛いんだよ〜」

「ウサギか。たしかに可愛いな」

「でしょ？ちょっと見に行こ？」

そう言って俺の腕を引っ張る。

こいつ。

今日なんかやたら強引だな。

これが本性なのか？

そのまま引っ張られながら、ペットショップへ向かった。

なんか俺、やられっぱなし（笑）

歩いてる間も千里は腕を放さない。

「なあ、千里。今日ずっと腕放さないつもりか？」

「え？ダメ？」

「いや、ダメってわけじゃないけど。

俺達カップルに見られるぞ？」

「嫌？」

「ん・・・お前は嫌じゃないの？」

「私は、光一くんとかうしときたい」

「え？何で？」

「光一くん。暖かいから」

うーん。

どうすりゃいいんだ俺？

「ねね、ここだよ」

目の前のペットショップを指さす。

千里は俺の腕をひっぱり、中に入る。

室内には犬やネコ、ウサギや鳥といった

数多くの種類がいた。

俺達はウサギを探し、その前に向かう。

可愛いウサギ達が沢山鼻をヒクヒクしてる。

「ねね、光一くん。このネザーランドドワーフ、すごく可愛くない？」

「ああ。白のヤツが一番可愛いな」

「だよねー！私も白が一番可愛いと思った！」

千里は円満の笑みでウサギを見つめる。

その横顔が何だか、いつもより少し可愛く見えた。

こんな一面も持ってるんだな。

そう思った。

その後カフェに寄り、他愛のない話で盛り上がった。

数時間で帰る予定が、いつの間にか夕暮れに。

「そろそろ、帰るか」

「うん。そうだね。今日は、ありがとね」

「ああ」

俺と千里は、駅の乗り場で別れ、帰路に就く。

電車に揺られながら、ポケベルのメロディが鳴る。

手に取り出し、内容を確認する。

「アリガト。タノシカッタ。チサト」

あいつ。

駅の乗り場にある公衆電話から打ってきたのかよ。

ほんと。

マメなヤツだな。

だが。

そういう千里の一面は。

俺は好きだな。

4話：「帰りたくない」

4月20日 月曜日。

また新しい1週間が始まる。

今日もいつもの様に教室のドアを大きく開き。

「ちいっす！」

気合を入れて挨拶する。

「おはよー」

最近は返事を返してくれる生徒も増え、

寂しい思いはしなくなりつつある。

いつもの様に千里へ借りていたルーズリーフを返す。

千里は受け取り笑顔で話しだす。

「土曜日はありがとね。色々参考になったよ」

「ああ、良い物見つかって良かったな」

「うんうん、これも光一くんのおかげだよー」

「うむ。俺の受講料は高くつくぜ」

「ええー。そんなの聞いてないよ〜！」

「暗黙の了解だろ？俺はそのつもりだったんだが？」

「光一くん、私をいじめて楽しい？」

「もちろん、すげー楽しいぞ」

「あうー。先生に言いつけてやるー」

「勝手に言ってる。じゃあな」

すねてる千里を放置し、自分の席へと向かい着席する。

今日は珍しく美恵の姿が目に入った。

俺はすかさず声を掛ける。

「よっ美恵、おはよ」

「あ、おはようございます。光一君」

俺の方に振り向き、返事をする。

学校に来てる時は、そんな体弱そうな顔じゃないんだけどな。

「今日は久しぶりに登校したのな」

「はい。先週はあまり来れませんでした」

「体調悪いの？大丈夫か？」

「元々よく休むので。心配おかけしてすみません」

「いや、謝る所じゃないし。しかしまあ、大変だな」

「そうですね。でも、もう慣れっ子です」

「そかそか。でも、体調悪いのにバイトしてて平気なのか？」

「んー。私生活とはあまり関係なく体調が悪くなるので」

「そっか。あんまり無理しないようにな」

「はい。ありがとうございます」

よく見ると腕に大きいバンソーコーが張ってある。

「なんだ、腕も怪我したのか？」

バンソーコーが張ってある所を指差す。

すると美恵がその場所を隠すように手を添える。

「ドジっちゃって。低血圧なので、良く転んだりするんです」

「低血圧なのか。そりゃ朝特に大変だな」

「そうなんです。ご心配おかけしてすみません」

「いや、ここでも謝る所じゃないし。あんまり無理すんなよな」

「お気使い、ありがとうございます。」

光一君も、怪我にはご注意下さいね」

「ああ、サンキュ」

キーンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴り、かったるい授業が始まった。

そして俺はいつもの如く、瞑想に入る・・・

時間が立つのは早いもので、あっという間に放課後だ。

もちろん、昼のジャンケンと言うまでもなく勝てなかったわけだが。

「さて、帰るか」

カバンを持ち、いつものように千里から今日の分の

ノート借りて、教室を出ようとする。

そんな様子を、福岡が背後から話しかけてくる。

「お前去年も帰宅部だったよな。今年は部活入んねーの？」

「ああ。家でノート写したり、色々忙しいんだよ」

「じゃあ授業中書けば良いのに」

「授業中は集中して聞かないといけないだろ？」

ノート取ってる暇ないんだよ」

「寝てるだけじゃん」

「わかってねえなあ。瞑想だよ、め・い・そ・う」

「瞑想という名の睡眠だろ？」

「NONO。瞑想という名の瞑想だ」

「はいはい。ところでさ、今日部活なくて暇なんだけど、

これからカラオケいかね？」

「カラオケか。いいな。行くか」

「おう。んじゃ行こうぜ」

福岡もカバンを手にし、二人で教室を出る。

下駄箱へ向かう途中、福岡の友達らしき女の子が話しかけてくる。

「あ、良平（りょうへい）くん。今日は部活ないの？」

「うん。今日は休みなんだ。だから今から成瀬とカラオケ行こうとね」

「え～良いな！ねね、私も行きたい！」

「ん、成瀬。一緒に行って良い？」

福岡が俺に問いかけてくる。

「ああ、俺は別にかまわんよ」

「そっか、良かったな真紀（まき）。成瀬良いってさ」

「わーい！じゃあカバン取ってくるから、ちょっとまってて！」

「オッケー」

真紀ちゃんは急いで自分の教室へ走って行った。

「相変わらず福岡は女のツレ多いよな」

「そうか？お前と違って部活してるからな」

「部活してたら増えるもんなのか？」

「帰宅部より断然出会いがあると思うが？」

「そっか。そう言われて見ればそうだな」

「おう。そういや、前から聞こうと思ってたんだけどさ」

「ん？何だ？」

「千里と成瀬って付き合ってるの？」

ぶっ。

俺達ってそんな目で見られてるのか。

「は？何でそうなるわけ？」

「いや、いつもノート借りたり楽しそうにしゃべったりしてんじゃん」

「たったそれだけで付き合ってるとか良く発想出来るよな。

俺がそうだとしたら、お前何人彼女いるんだよ」

「俺は今4人かな。あと3人募集中だ」

「はっ？まじで4人おるんかよ。よくばれねーな。

それにあと3人ってどう言う事だ？」

「ばれねーさ。俺は元々女友達多いからな。

あと3人って言うのは、7人いれば毎日違う彼女と遊べるだろ？」

「はあー。いつかお前刺されるぞ」

「どっちかっつーと、刺す方だけだな」

「あほ。5回位死んどけ」

「そういうお前はどなわけ？付き合ってるんじゃないの？」

「だから、そういう関係じゃねーよ」

「でもさ、土曜デートしてたんだろ？」

「はっ？デートじゃねえし。ってか何で知ってるの？」

「お前の声でかいからな。デートの約束してる所丸聞こえだったぜ？」

「俺がしようと言ったわけじゃねーし。聞いてたなら知ってるだろ？」

俺は千里の先輩に上げるプレゼント選びに付き合っただけだぜ？」

「ふーん。でもきっちり手つないだりして歩いてたんじゃねーの？」

「あれは俺が繋いで行った訳じゃねーよ」

「え？なんだ。やることやってんじゃんか。やっぱデートじゃん」

「いやいや、まてまて。千里から勝手に腕つかんできたり

手握ってきたりしてそうなのだけだって」

「でも振りほどいたりお前はしなかったんだろ？」

「ああ。まあそれはな。でも俺は嫌な意思を伝えようとしたぜ？」

「伝えようとしただけで伝えてねーんじゃん」

「だってさ、千里そのままつないどきたいとか言うから、言いにくいじゃん」

「何それ。脈ありじゃん。千里やっぱお前の事好きなんじゃん」

「は？何でそうなるわけよ」

「お前あほか？好きでもない相手にわざわざ手つなぎに行ったりしねーよ」

「え。そうなんか」

「お前こそ5回死んどいた方がいいんじゃない？千里ちゃん可愛そ〜。

こんな鈍感な男を好きになるなんて」

「うーむ・・・お前に言われると妙に説得力あるな」

「お前と違って鈍感じゃないからね。俺なら即ゲットだけどな。

千里可愛いし、優しいじゃん」

「ふーむ」

やっぱりあの行動は俺が好きっていうサインだったのか。

今まで友達としてしか意識してなかったな。

俺がそう考えてる間に、カバンを持った真紀ちゃんが近寄ってきた。

「おまたせー！」

真紀ちゃんが俺達と合流する。

「おう、んじゃ行こうぜ成瀬」

「あ、ああ。行こうか」

そうして、俺達はカラオケへ向かった。

相変わらず福岡の熱唱ぶりはすごい。

ビブラートもしっかり出来てるし、

バンドのボーカルというポジションにいてもおかしくない。

真紀ちゃんも綺麗な声で歌う。

俺は新しい新曲を練習しまくったせいで、

音程が一部ずれていたが気にしない。

楽しいひと時も直ぐに過ぎ、

3時間程熱唱した後、解散の時を迎えた。

「いや〜久々にカラオケ楽しかったよ！」

福岡が伸びをしながら語る。

「うんうん。楽しかったー！」

真紀ちゃんも楽しかったようだ。

「んじゃ、解散しますか」

俺が解散を告げる。

「おう。そんじゃみんな、また明日な」

軽く手を上げ、その場でみんなと別れた。

俺は歌って腹減ったので、近所のたこ焼き屋により、

6個入りのメンタイたこ焼きを買った。

そのまま持って帰らずに近場で食おうと、

近所にある公園に立ち寄る。

公園のブランコに、見た事あるような姿を発見した。

良く見てみると、そこには美恵の姿があった。

俺は美恵に歩み寄る。

下を向いて、ブランコをこぐ事なく、両手で鎖を握っている。

何だか、寂しそうな顔をしていた。

近寄った俺には、まったく気づいていない。

俺はそのまま隣のブランコに腰掛け、

そっと話しかけた。

「たこ焼き。一緒に食わね？」

美恵は俺の声に反応し、こちらを向く。

「あ……。光一君」

「メンタイ味なんだけどさ、美恵好き？」

「うん……。好き」

「そかそか。そりゃ良かった」

袋紙を空け、たこ焼きを取り出す。

1つ爪楊枝に刺し、美恵へ差し出す。

美恵はゆっくりとした動きで受け取り、

そのまま口へ運んだ。

もぐもぐと頬張り、ゆっくり喉が揺れた。

「おいしい」

「だろ？ここのたこ焼き美味いんだよ」

「うん。ありがとう」

そう言って、また下を向く。

すげー暗い表情。

「なあ。こんな所で、どうしたんだ？」

俺はたこ焼きを頬張りながら問掛ける。

美恵は、少し間をあけた後、そっと口を開く。

「今日はバイトお休みなので。気分転換です」

「へえー。気分転換なわりには、

すっげーへこんでるように見えるけど？」

「・・・」

また美恵は黙り込んでしまう。

そんな中、また爪楊枝でたこ焼きを刺し、

そっと美恵に差し出した。

美恵は下を向いたまま、顔を横に小さく振る。

仕方なく、そのまま俺の口へたこ焼きをほりこんだ。

もぐもぐと頬張った後、ごくりと飲み込む。

そして俺は、口を開く。

「ねえ、家に帰りたくないとか？」

「・・・」

美恵は何も反応しない。

「何か悩み事あるなら、俺聞くんよ」

「・・・」

まいったな。

この空気なんとかならんかな。

残りのたこ焼きを頬張りながら、どうしようか考えていると。

そっと美恵の口が開いた。

「わたし・・・」

「ん？」

「・・・」

また黙り込んでしまう。

そのまま問いかける事なく、たこ焼きを頬張りながら

次の言葉を待つ。

かなりの間の後、再び美恵は語り始めた。

「わたし・・・帰りたくないんです」

「どして？」

「・・・」

また黙り込んでしまった。

何だこの無限ループは。

美恵の表情を見ると、やはり深刻そうだ。

たこ焼きも食べ切ってしまい、

紙袋を丸めてゴミ箱へポイっと投げつける。

ストンとうまい事ゴールインした。

話が進みそうにないので、長期戦を申し込む。

「帰りたくなるまで、俺で良ければ側にいてあげるよ」

そう、俺は言い放った。

美恵はゆっくり顔を動かし、俺の方を見つめる。

「光一君は、帰らなくて良いんですか？」

「ああ、俺には門限とかないし」

「そうですか」

美恵の視線が下を向く。

俺はすかさず追撃を掛ける。

「俺で良ければ、何でも相談乗るよ。

もし悩み事でへこんでるんだったら、

一人で悩まないで、何でも相談して」

「・・・」

しばらく、間があき。

「私の悩みは、時間が解決してくれるので大丈夫・・・」

言葉を最後まで言う前に、恵美の瞳から涙がこぼれ落ちた。

たまらなくなっただのか、美恵は顔を両手で塞ぐ。

「時間が解決する前に美恵がダメになっちゃうぞ？

何悩んでるのかわからんが、もう限界なんじゃないか？」

美恵は俺の言葉に反応する事が出来ず、

顔をふさいだまま小さく泣き声が聞こえる。

これ以上は話せる状態じゃないと察したので、

落ち着くのを待つことにした。

・・・

20分以上は待ただろうか。

俺は何も言わず、ただ横のブランコに座って

恵美の様子を見守った。

ようやく、泣き声も聞こえなくなり。

ヒクヒク言いながら、小さな吐息が聞こえる。

「・・・光一君」

ようやく、美恵からまともな声が聞こえた。

「ん？どうした？」

俺は自称精一杯の優しそうな声で反応した。

「今、何時ですか」

俺は公園の中央にある大きな時計を見て、時刻を告げる。

「今7時50分だな」

「そうですか・・・」

恵美は自分の瞳をぬぐい、覆い隠されていた両手が

顔から離れる。

「門限があるので、もう帰りますね」

そう小さく俺に告げ、ゆっくりと立つ。

俺もブランコから立ち上がり、声を掛ける。

「ああ。わかった。大丈夫か？」

「うん。横にいてくれてありがとう。

少し、落ち着きました」

そう言い、うるうるした瞳を俺の方へ向けてくる。

「そっか。そりゃよかった。

俺で良ければ、何でも言ってこいよ」

「はい。ありがとうございます」

「良かったら、家まで送ろうか？」

美恵は、顔を横にふり。

「もう、大丈夫です」

「・・・そっか。じゃあ、また明日学校でな」

「はい・・・」

そう言い残し。

小さな歩幅で、ゆっくりと公園を後にした。

俺はそのまま送ることも出来ず。

ただ、姿が見えなくなるまで後姿を見送った。

美恵。

一体、何があったんだろう。

出口が見えない疑問を胸に、俺も自宅へと向かった。

俺はこの日のブログを読み終え、

彼女の手紙に振り返る。

「私が公園で時間が過ぎるのを待ってた時。

光一君が私を見つけてくれて、

たこ焼きをご馳走してくれたよね。

その後も、ずっと側でいてくれて、

本当に嬉しかった。

あの時、光一君が言ってくれたように。

私は、もう限界に来ていた。

どうしようもない、気持ちがいっぱいで。

時間が解決してくれると思っていた。

でも。

時間より、私のショックの方が。

先に限界が来ちゃったよ」

え。。

俺は、同じ文面を何回も読み直す。

これって。。。

もしかして。。。

5話「2回目のデート」

5月1日、金曜日。

美恵はあれから学校に来ていない。

担任いわく、いつものように、

体調不良という理由だそうだ。

こんな調子で良く2年に上がったもんだ。

俺は美恵の席を眺めながらそう考えていた。

ぼーっとしてる俺の肩に誰かが手をポンと置く。

「よっ、成瀬。また黄昏中か？」

振り返ってみると、そこには福岡が立っていた。

「黄昏中だと？どういう目線でみたらそう見えるんだ？」

「何だ、自覚症状なしかよ。じゃあ、俺が何で黄昏てるか当ててやる」

「ほう、俺の行動を読むとな？」

福岡は俺の前の席の椅子に反対向きにすわり、俺を見詰める。

「ずばり。。。成瀬が今考えていたことは・・・」

「おう。何だ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

俺の目をじっと見て様子を伺っているようだ。

「何だ、流行の焦らし作戦か？」

待ちきれずに俺から問いかける。

「実はな・・・」

「お、おう。実は？」

「こういう焦らし、やってみたかったんだ」

「は？」

やっぱりそうか。

今人気なクイズ番組のあの焦らしをやってたわけだな。

「ファイナルアンサー？」

「俺何も答えてないんだが？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・ファイナルアンサー」

「・・・・・・・・」

「はよ言え！焦らし面倒くさいわ！」

俺は福岡の頭をスパーンと叩く。

叩かれた福岡はびくとも動かず、そっと口を開く。

「お前は今、ずばり美恵の事を考えてたろ」

「ほう。その根拠は？」

「最近美恵が来ていない時、美恵の席ばかり見てるからな。

千里が成瀬を好いてくれてるのに何て残虐な男だ。

浮気だよ、う・わ・き」

「なんでそうなるねん。俺と千里は別に付き合ってるわけでも

なんでもないぞ？」

「そうだな。だが、好きにならないと付き合うこともないだろ？」

「そりゃそうだな」

「成瀬と千里は今、友達と恋人の境界線で立っているのだ。

この境界線から脱出するには成瀬の行動が必要なのだが、

お前はこれっぽっちも気づいてやれていない」

「お前の考えすぎだからだろ」

「ノンノン。だがな、成瀬は今、恵美を気にしている。

千里は可愛そうだな」

「勝手に言ってる」

福岡は軽くため息を付く。

「やれやれ。それだけ気になるなら、お見舞いとかどうだ？」

「お見舞い？」

「ああ。体調不良で休んでるんだろ？」

明日学校休みだし、何か手土産もって行ったらどうだ？」

顎の上に手を置いて考えてみる。

確かに、過去一番連続で休んでいるし、気になることは確かだ。

最後に会った時のあの意味不明な行動も気になる。

「ふっ。やはり美恵の事を考えていた事は凶星だったようだな」

福岡は嬉しそうな表情、かつ、俺を見てニヤニヤしている。

「いちいちカンに触る奴だな」

「一人でお見舞い行きにくいなら、俺も行ってやろうか？」

「ん、お前も恵美の事が気になってるのか？」

「お前も？も？？凶星確定だな」

くっ。なんかハメられた気分だ。

いちいちうざい奴だな。

「うっせーな。誰でもアレだけ休んでりゃ気になるだろ？」

「ふっ。そういう事にしといてやるよ。

で、お見舞い行かないの？」

「んー。。。」

「気になるんだろ？」

「少しはな」

「俺明日暇だし、付き合っやってもいいぜ？」

「ほう・・・」

そうだな。

一度お見舞いに行って様子伺ってくるのも悪くないな。

「じゃあ、明日お見舞い行くか」

「ふふっ。素直でよろしい。俺も一緒に行ってやろうか？」

「そうだな。福岡も気になるなら、一緒に行こうぜ」

「OK。お前、家知ってるよな？」

「え？しらねーよ」

「どうやってお見舞い行くつもりだ？」

「そうだよな。家わかんねーじゃん」

「やれやれ。そうだろうと、俺が担任に聞いといてやったぜ」

「まじで？良く教えてくれたな」

「ふっ。俺が聞いても教えてくれないだろうなあ。

しかし、俺にはガールズネットワークという情報網があるからな。

聞き出すことはたやすい話だ」

「女友達に聞いてもらったって事だな」

「まあ、そういう所だ」

「そこまでしてお前もお見舞い行きたかったんだな」

「あほ。お前が毎日毎日美恵の席みて黄昏てるから

聞いてやったんだよ」

「俺そんなに露骨だったか？」

「成瀬は単純だからな。性格知ってりゃ

すぐにわかるさ」

「さすが親友って所か」

「そうだな。じゃあ、明日2時頃でいいか？」

「おう。どこ行けば良い？」

「○○駅の改札でよろしく」

「OK。サンキューな」

「あいよ、じゃあまた明日な」

福岡は席を立ち、自分の席へと戻り、帰る準備を始めた。

あいつ、女ったらしでろくな所ないと思っていたが、

ああいう観察力と行動力があるからもてるんだらうな。

努力のたまものって所か。

俺も帰る準備を済ませ、席を立つ。

千里からいつものようにノートを借りる為、千里の席へ向かう。

背後から千里の肩に手をのせ、人差し指を立てる。

千里は肩の重みに気づき、そのままこちらに振り返ろうとする。

しかし、俺の人差し指がストッパとなり、ぷにっと止まる。

「・・・光一くん・・・」

千里は上目目線で俺をにらみつけてくる。

「相変わらずひっかかるんだな」

「いいよ、もうノート貸さないから」

「すまんすまん、って事で今日も貸してくれ」

肩に置いた手をどけ、頂戴ポーズをする。

千里は机にある雑誌をそのまま俺の手に置く。

「何だこれは？」

「光一くん、この映画観たいって言ってなかった？」

「ん？」

手に乗せられた雑誌をみると、そこには俺が観たいと言っていたタ○タニックの映画特集の記事が目に入った。

「ああ、これ観たかった映画だな。もうやってるの？」

「うん。先週の土曜日からやってるよ」

「そうなのか。特集ページまで作られるって事は、

人気なんだろうな」

俺は渡された雑誌をパラパラとめくり、軽く記事に目を通す。

「駅前にある映画館でもやってるみたいなんだけど、

観に行かない？」

「ああ、いいぞ。いつ行く？」

「光一くん、今から暇？」

「暇と言えば暇だな」

「じゃあ、今から行かない？」

「いいぞ。じゃあ今から行くか」

「うんうん」

千里は自分の机からノートを取り出し、俺に渡してくる。

俺はそのノートを受け取り、カバンの中へ入れる。

千里も机から自分の荷物を鞆へ入れ、帰る準備をする。

「お待たせ、行こー」

「おう」

円満な笑顔を見せる千里。

二人は教室を出て、学校を後にした。

小さな道路を二人並んで歩く。

先に口を開いたのは千里の方だった。

「光一くん、普段映画好きじゃないのにこれだけ気にしてたよね」

「そうだな。基本、地球破壊系好きだからな」

「地球破壊系って、破壊されてないじゃん」

「船沈没するだろ？」

「船は沈没するけど、地球は破壊されてないよ？」

「まあ、自然が及ぼす影響を表した映画好きなんだよ」

「へえー。でも、どっちかというところは恋愛系の映画じゃない？」

「まあ、確かにな。船の前に立って僕はしにましえーんってするんだろ？」

「違うよ～。感動する場面をどうしてそう例えるかなあ～」

「僕はしにましえーんっていう場所も感動すると思うが？」

「まあ、感動する場面ではあるけど。。。」

「運転手からしたら、いい迷惑だよな。巻き添えだぜ。

あそこで本当にはねられたら、倒れながら僕はしにましえーんって言うんだろうな。すごく説得力なくなるが」

「そこまで悪い方向に考えちゃダメだって。ドラマだから～」

「ドラマだからねえ。じゃあ崖の上からバンジージャンプして僕はしにましえーん言われて説得力あると思うか？」

「・・・ないねえ。。。」

「だろ？別にあのフレーズいらないと思うんだよ。

普通に貴方が好きだからって言ってりゃいいじゃん」

「まあ、そう言われればそうだけどね。でも、あの行動があるから盛り上がったでしょ？」

「あのまま引かれたら盛り下がるだろ」

「そうだね・・・」

「まあ、ドラマってのはうまく作る様に作られてるからな。

現実でまねしたらえらいことになるわ」

「そこがドラマの良い所じゃない？」

「そうだな。まあ俺はあまりドラマ観ないが」

「光一くんだったら、好きな女性が目の前にいて、引かれそうになってたらどうする？」

「ドラえおんにスモールライト借りる」

「ドラえおんがいなかったら？」

「じゃいあんを生贖にする」

「一緒にひかれちゃうじゃん」

「じゃいあんの弾力がエアバッグの代わりになるかもしれん」

「じゃあ、じゃいあんがいなかったら？」

「実は彼女はテレポーションが出来る」

「出来なかったら？」

「実は彼女はスタントマン」

「もう～。非現実的な話じゃなくて、ちゃんと考えてよ～」

また千里は頬をぶくっと膨らます。

すかさず膨らんだ頬をぶにっと押す。

「またいたずら～～～～！」

「されたいから膨らませたんだろ？」

「違うもん～！」

俺の手を握り取り、そのまま拘束するように離さない。

「離さないつもりか？」

「もちろん。また悪戯されるもん」

「しなくてもつなぎたいんだろ？」

「・・・光くんはしないって言ってもするもん」

千里は視線をはずし、そう答える。

「なあ、福岡が言ってたんだけど」

「ん？」

「千里、俺の事好きなの？」

「・・・福岡くんがそう言ったの？」

「うん。千里は俺の事好きって言ってたぞ」

「好きって言われたらどうするの？」

「え？どうするって。特になにも・・・」

「光くんは、私の事どう思ってる？」

「んー」

千里は俺を見詰めてくる。

「まあ、嫌いなら遊びに行かないわな。

で、千里はどうなんだ？」

「私も、嫌いなら遊びに行かないよ」

「そっか。そうだよな」

なんか。

答えになってない気もするが・・・。

「ねね、光くん。二人で映画行くのって初めてじゃない？」

「ん。そうだな。俺があんまり映画に興味ないもんな」

「これを気に、映画好きになっちゃったりしてね！」

「どうだろな。まあ、楽しみにしてた映画だからそれなりに

楽しめると思うわ」

「うんうん。感動出来そうかもんね！」

「そうだな。感動な・・・」

その後、他愛のない話をしている間に、劇場に着き、

タニックの映画を鑑賞した。

途中、千里は感動のシーンで俺の裾を握り、
涙ぐんでる姿も目にうつった。

確かに、この俺でも感動する映画だった。

恋愛映画も、以外と良いかもしれんな。

日も落ち、千里がおなかすいたというので、
近くのファミレスで飯を食うことにした。

二人は注文を終え、俺は水を一口飲む。

千里はそんな俺の姿をみて、笑顔で口を開いた。

「超良かったね～。すごく感動したあ～」

「ああ。確かに感動ものだったな。千里最後らへん
ずっと泣いてるしな」

「うんうん。感動しすぎて疲れちゃったよお」

「たまにはこういう映画もいいかもな」

「そうだねー。また行こうね～」

「ああ。また気に入る映画があればな」

「光一くんがあの立場だったら、同じことしてた？」

「うーん。まあ、自分が愛してる相手なら
守りたいとは思うだろうな」

「そっかー。光一くん、根は優しいもんね」

「根だけか？」

「根だけねっ」

「それ、ほめ言葉には聞こえんのだが・・・」

「ほめ言葉だよ」

「そか？まあ、それなら良いんだけど」

「あははっ」

そんな映画の話に花を咲かせ、二人そろって

回想しながらお互いの感じた事を話す。

なんか、映画を観るのも悪くないかもな。

そう、思った。

「あ、もうこんな時間！帰らなきゃ」

時計を見ると8時を過ぎていた。

「ああ。そろそろ帰るか」

「うんうん」

席を立ち、会計をして二人はファミレスの外へ出る。

道路に下りる階段を下りようとしたら、千里が呼び止める。

「光一くん、ちょっと伸びしてみて？」

「あ？伸び？」

「うん。手をこうやって広げて、ぐーっと」

千里は横に手を伸ばすように表現してくる。

「こうか？」

俺は千里がしたように伸びてみる。

千里は俺の後ろに回り込んだ。

「ん？」

そのまま後ろから両方に広げた手に、千里の手が伸びてくる。

俺にぴったりとくっつき、千里のぬくもりが背中に感じた。

「タ○タニックごっこ。えへへ」

「・・・あほ」

俺の手を後ろから握っていた千里の手が離れ、

そっと俺の体を包み込む。

「光一くんの背中、すごく暖かいよ」

後ろから千里の小さな声が聞こえる。

「俺は生きてるからな」

「私も、生きてるかな？」

「ああ。かろうじてな」

「なにそれ～」

「さ、帰るぞ」

「うん」

千里は俺の体を離し、二人並んで駅へ向かった。

定期を改札機に通し、お互い反対方向へ向かう階段で足を止める。

千里は手を振り。

「また、行こうね」

千里が照れくさそうに言う。

「そうだな。またな」

「うん。今日はありがとね」

そう言って、千里は反対側のホームへ向かう階段を下りていった。

俺が待っていたホームの電車がやってきたので乗り込む。

反対側のホームを窓越しに見ると、千里は俺に向かって手を振っていた。

俺も小さく手を振りかえし、電車は動き出して千里は見えなくなった。

ガタンゴトンと揺れる車内。

福岡が言っていた事は。

まんざら凶星のようだな。

俺は。

千里の事を好きなんだろうか？

やられっぱなしだけど。

嫌な気にはなれない。

でも、今まで友達としてしか認識していなかった事は確かだ。

好きならどうするって聞かれた時。

どう答えていいかわからなかった。

自分の気持ちがわからない。

でも、もうひとつ気になったことがある。

福岡は、俺が美恵の事を考えて黄昏ていると言われた。

それは、俺が美恵の事が好きだからなのだろうか。

それとも、心配しているからなのだろうか。

自分が、わからない。

6話「後ろ姿」

5月2日、土曜日。

今日は美恵のお見舞いに行く日だ。

俺は家の近くにあるコンビニでポカリやひえびた等を買込み、待ち合わせの駅へと向かう。

近づけば近づくほど、あの時の美恵の姿を思い出す。

家に帰りたくない。

美恵はそう言っていた。

あれは月曜日だったかな。

火曜日から今現在まで、美恵は学校に来ない。

約2週間程過ぎているのにだ。

それに、体の打撲も気になる。

もしかして、学校でいぢめでもあっているのだろうか。

打撲を親に見せない為に、家に帰りたくない。

もしそうなら、つじつまが合う。

でも、俺が知っている限りは休み時間

とくに教室から外に出てる様子はないし、

どっちかというとなら教室で友達とだべってる姿の方がよく見かける。

打撲はやはり日頃の天然から来てるものなのだろうか。

もしそうだとすれば、首の後ろなんて打撲するか？

ありえないよな。

やっぱり美恵は誰かにいぢめられている可能性が高い。

それを隠すために、家に帰りたくないという流れが自然だ。

そういえば、バイトもやってるんだっただ。

もしかしたら、バイト先でいぢめに合っているかもしれん。

そうとなれば、学校内で気づく事はまず不可能だし、

おっちょこちょいだから絡まれやすい性格なのかもしれん。

一度つつこんで聞いてみる必要があるな。

考えているうちに、美恵の最寄り駅へ着き、福岡と合流する。

「よっ、福岡。昨日ぶり」

「おす。今日は雨振りそうな天気だな」

「今日降水確率80%って言ってたから降るだろうな」

「まじか。傘持って来てねーし。さくっとお見舞い行って帰ろうぜ」

「帰るんかい。それにしても珍しいな。休みの日に女友達と遊ばないとは」

「ん？遊ぶぞ。6時からカラオケだよ」

「なんや。行くんかよ。しかも6時って遅いな」

「バイトしてる子なんでね。だから俺も午前中暇だったのさ」

「その間違う女の子と遊べば良かったんじゃないの？」

「お前の為に時間作ってやったんだろうが。ありがたく思え」

「そかそか、そりゃありがとござんすね」

「さっ、振らないうちに行くぜ」

「おう」

福岡を先頭に歩き出す。

この駅、美恵がバイトしてた隣の駅だな。

ひとつ駅が違うだけでも風景は全然違う。

ここからすぐに海が見える。

夏はここへ潮干狩りに訪れる人も多いはずだ。

「夏ここに潮干狩り来たいなー」

福岡が海を眺めながらつぶやく。

「味噌汁がうまそうだな」

「そうだな。彼女に作ってもらう味噌汁は最高だろうな」

「ほう。作ってくれそうな子いんの？」

「いるいる。たまに弁当作ってくれるぜ」

「は？いつも俺と購買で買ってるじゃん」

「弁当は午前中の休み時間に食ってるだろ？」

「ああ、そうだったな。たまに弁当がついてる時あるな。」

あれ、彼女からの弁当だったのかよ」

「そそ」

「でも、そんな露骨にしてたら他の彼女にばれるんじゃないの？」

「他の彼女は公認だから問題ない。一応、

メインの彼女がいることは知ってるからな」

「はあ〜？なんやそれ。意味わからん」

「遊びの彼女と本気の彼女は別ってことだ」

「はいはい。よう分からんがそういうことにしとくわ」

「おう。お前も早く彼女作れよ」

「うっせえ」

福岡の言葉はどうもカンに触る。

自意識過剰なのか生まれ持った才能なのか良くわからん奴だ。

福岡がニヨニヨしながら俺の方を見て来る。

「なんだ？」

「そういや昨日、千里と一緒に帰ってたみたいだけど、

どっかあれから行ったの？」

「お前良くみてるな一。そういう所」

「まあね。で、どうだったのよ」

「ん、聞いたぞ。俺の事好きかって」

「まじで？何て言われたわけ？」

「聞いたら俺はどうか聞かれたから、

嫌じゃないなら遊びにいかんって答えた」

「それで？」

「千里も同じって答えた」

「・・・お前あの海でアサリに食われて来い」

「なんでやねん！しかも何でアサリ！」

「千里はお前から好きって言ってほしかったから

お前に逆質問したんだろ？そんな答え方なら

そりゃ同じ答え言うだろ」

「え一。でもさ、俺わかんね一もん」

「なにがよ」

「千里が好きかどうか。だって今まで友達としてみてたし、

そんな感情ないぜ？」

「そっか。じゃあ今は千里の片思い状態って事だな」

「う一ん。そうなのかも知れんな」

「な一んだ、つまんね一の。てっきりお前も好きなんだと

思ってたがそうではなかったのね」

「たぶんな」

「って事は、美恵の事が黄昏る程今は好きって事か」

「どうしてそうなった」

「黄昏てるから」

「いや、違うんだよ。美恵はな、ちょっと気になることがあってな」

「気になること？それが恋ってもんじゃね一の？」

「ちゃうちゃう。そうじゃなくて、様子が変わるんだよ」

「ほう。両思いになりつつあるってか？」

「だからちゃうっての。家に帰りたくないとか言うんだよ」

「お前に惚れてるから一緒にいたいって事だろ？」

「だから一。ちゃうんだって！」

「何が違うんだよ。どっからどう聞いてもそういう事じゃないか」

「あいつ、いぢめられてるかもしれんのよ」

「いぢめ？」

「そう。体に打撲があったり、この前も公園で一人ブランコに乗って

家に帰りたくないからって泣き出したんだ」

「なるほど。それは何か悩んでそうだな」

「だろ？何か悩んでるなら言ってみて言ったんだけど、

悩みは時間が解決するから大丈夫ってさ」

「じゃあ大丈夫なんじゃねーの？」

「大丈夫といった次の日から、学校来なくなったんだよ」

「そうなのか。それはちょっとわけあり臭いな」

「だろ。だから美恵の事気になってんの」

「ふむ。もしそういったのが原因なんだとしたら、

体調不良っていうのは嘘の理由で登校拒否なのかもな」

「ああ。そうかもしれん」

「なるほどな。まあ何の病気か分からなかったから飲料水だけ

買って来たけど、これで正解っぽいな」

「俺ひえびたとか買ったんだけど・・・」

「自らのデコにはっとけ」

「まあ、実際はわからんからこのまま渡すけどさ」

「そうだな。一応目的は体調不良によるお見舞いだからな」

「うむ」

やがて大きな道から小さな道へと入り、

福岡は地図を見ながら歩く。

そんな姿を見て、近所に近づいてる事を察する。

そして、ある一軒の家の前で福岡は立ち止まった。

「ついたぜ。表札も美恵って書いてるし、間違いない」

「ここか・・・」

2階建ての一軒家。

2階には、女の子が好きそうなキャラクターデザインのカーテンが見える。

おそらく、美恵はこの部屋に住んでるんだろう。

「成瀬、お前チャイムならせよ」

「OK」

俺はインターホンを押す。

ピンポ〜ンとチャイムが鳴る。

.....

返事がない。

ただの屍のようだ。

「留守かな・・・」

福岡は腕を組みながら玄関を見詰める。

もう一度インターホンを押す。

ピンポ〜ン。

.....

インターホンから、カチッと通信がつながった音が聞こえた。

『はい』

インターホンから男性の声が聞こえる。

すかさず応答する。

「○○高校の同級生、長瀬と言います。

美恵さんが体調不良と言うことで、お見舞いに来ました」

『・・・今美恵は寝ているので、お引取りください』

「そうですか。では、お見舞いの品を少し持ってきたので、
渡しておいてもらえますか？」

『今手が離せないなので、玄関においといて下さい。

後で渡しておきますので』

「え？あ、はい。わかりました」

ガチャ。

インターホンの通信が途切れた音がする。

「何か、殺風景な対応だな」

福岡が気に入らないような声でつぶやく。

「そうだな。まあ、寝てるなら仕方ないか」

「そうじゃねえよ。手が離せないなら、インターホンでれねーだろ」

「まあ、そう言われたら確かにな」

「むかつくオヤジだが、まあいいか。置いて帰るぜ」

「ああ」

俺たちはお見舞い品を玄関の分かりやすい場所におく。

美恵の部屋であろう2階を見上げながら、

ひとつため息を付いた頃、1階の窓から視線を感じた。

目線を1階にあてると、窓を少し明け、こちらを伺う父親の姿が見える。

目線が合ったので、会釈をする。

「ここに置いときますので」

聞こえる程度の音量で伝える。

すると父親は窓を閉め、姿が見えなくなった。

「なんかうぜーな」

福岡が舌打ちを鳴らす。

「まあ、行こうか」

父親の対応に納得出来ないまま、その場所を後にした。

防波堤の上を二人で歩きながら、まったり来た道を帰る。

「なんか気分損ねに来たみたいだな」

福岡が相変わらず機嫌悪くしている。

「そうだな。あの対応はちょっとな」

「結局、手が離せないとか言いながらこっちみる余裕あったじゃん。

ただ玄関から出て受け取りたくなかっただけだろあれ」

「そう見えるよな」

「むしゃくしゃするなー！」

近くにある石ころを見つける度、おもいきり蹴飛ばす福岡。

まわりを見渡していると、ゲーセンを見つけた。

「福岡、ゲーセンで気分発散でもして行こうぜ」

「ん、ああ。そうしょうか」

俺達はゲーセンに入り、二人で格闘ゲームの対戦をしたりして気分発散する。

「オヤジ死ねやー！！！」

福岡が絶叫しながらゲームを楽しむ。

時間を忘れ、俺達はゲームに没頭した。

何時間が立っただろうか。

ゲームに没頭してただけあって、すぐに時間は立ち。

福岡が隣に寄ってくる。

俺は格ゲーをしながら福岡が来たことを察する。

「俺そろそろ女の所に行かないといけないから、帰るわ。

またゴールデンウィーク明けな」

「おう。すまん。今日は付き合ってくれてサンキュー」

「じゃあな」

福岡はそのままゲーセンを後にした。

俺も軽くゲームクリアし、福岡と別れてから10分後位にゲーセンを後にする。

「げっ」

外は雨が降っていた。

ついさっき降って来たのだろうか。

それ程地面はぬれていない。

雨が降る海を見ながら、俺は駅に向かう。

「ん？」

防波堤に座っている女性を見つけた。

傘もさすことなく、海を見詰めている。

俺はその女性に近づく。

どんどんと近づく女性の後姿。

なんか、見た事ある髪形。

あれって。。。。

俺はその女性の真後ろで立ち止まり、

濡れない様に女性へ傘を傾け、一声かける。

「雨、降ってますよ」

「・・・」

女性は反応がないまま、海を見詰める。

俺は中腰になりながら、女性の隣へ濡れないように座る。

女性の顔を見てみると。

「あれ・・・美恵」

横顔はまぎれもなく美恵だった。

自分の名前を呼ばれた事に反応し、俺の方を向く。

「光一・・・くん・・・」

力弱い声で俺の名前を呼ぶ。

「ここで何してんの。雨、降ってるよ」

「そうですね」

「そうですね、じゃなくてさ。濡れるから、帰ろうぜ」

「・・・」

美恵は海を見詰め、動こうとしない。

「じゃあ、せめて濡れない場所に行こうぜ。」

あそこに屋根付きのバス停あるから、そこに行こう？」

そう言うと美恵は小さく頷き、俺が立つと彼女もゆっくり立ち上がった。

濡れないように傘の範囲に気をつけつつ、彼女をバス停へエスコートする。

二人はバス停のベンチに座り、傘を閉じた。

美恵の隣に、俺も腰掛ける。

「なあ、美恵。今日、お見舞いに行ったんだぜ」

「はい。お父さんから聞きました」

「体調、大丈夫なの？」

「・・・ぼちぼち、大丈夫です」

「ぼちぼちねえ。今、海でも眺めに来てたの？」

「はい。私、星を見上げるのが好きなので」

「星を見上げるって、今日ずっと曇りじゃん」

「そうですね。でも、私には綺麗な星が見えてます」

「ええ？」

俺は空を見上げたが、どうみても雲しか見えない。

「見えないけど・・・」

「ずっと見詰めてたら、見えてくるんです」

「ええ？」

俺は再度雲を見上げる。

少しの時間眺めてみたが、やはり星は見えない。

「見えないんですけど。何処に見えるわけ？」

「・・・見えるんです。遠い、向こうに・・・」

美恵も星なんて見えない雲を見上げながら言う。

俺には理解出来ないの、見る事を止めた。

「なあ、最近学校また来なかったけど、また来週から来れそうなの？

来週ゴールデンウィークだから木曜日からだけど」

「多分。。。」

「多分、ねえ」

美恵の方を見詰める。

先程とは反対側の横顔。

「ん・・・」

さっきみたのは左からの横顔。

普通の横顔だったが、今見ているのは右から見た横顔。

何か手のような形に赤くなっている。

「なあ、美恵。ほっぺたどうした？誰に殴られた？」

「・・・」

美恵は話そうとしない。

この状況下、どう考えても友達から殴られた後じゃない。

親から殴られた後にしか考えられない。

「美恵。親に殴られたんだろ？」

俺は追及する。

「・・・」

美恵は、黙秘を続ける。

もし、親に殴られたのであれば、今までの傷は友達からの
いぢめではなく、親からのいぢめの可能性が高い。

いや、いぢめというより、これは虐待だ。

「俺、お前が心配なんだよ。だから、本当の事言ってくれ。

毎日さ、お前のいない机を見て、心配してんだから」

「・・・」

「一人で我慢しなくていいから。俺、何でも聞くよ。

一人で抱えてないで、俺にも考えさせてよ」

「・・・」

「お前は一人じゃないから・・・」

「・・・」

美恵は手で顔を塞ぎ、泣き始める。

声を必死で殺し、ほんの小さな泣き声しか聞こえない。

俺には、凄く悲しい姿に見えた。

やはり、間違いない。

美恵は、虐待されてる。

あの今まで見た不自然なアザも、全て親の虐待だ。

美恵は体調不良で休んでたんじゃない。

ひどいアザが出来たりして、家に出れないから来ないに違いない。

今までのもやもやした疑問が、全て1本のレールとなる。

「美恵、親に虐待されてるんだな。今までのアザも全部、
親からの虐待された姿だろ。俺に何でも話してくれ。

凄く、お前の事が心配なんだよ」

美恵は何も答えることが出来ない程、

体を震わせながら声を殺し、泣き崩れている。

そんな姿を俺は見守る事しか出来ず。

そっと。

美恵の頭に手を添え。

軽くなでることにした。

美恵は添えた瞬間、ビクっとしたが。

払いのける事なく、受け入れてくれた。

受け入れてくれたというか、反応しなかったのかはわからんが。。。

俺はずっと、美恵の頭をなで続ける。

時間が立つにつれ、彼女の振るえも少し収まってくる事が、

なでている手から感じ取る事が出来た。

美恵は、顔を隠していた手を少しずらし、

目の部分だけ見える状態となった。

そして、小さく、こういった。

「私・・・父親が大好きなんです・・・

今の、父親も・・・」

「え？」

7話「帰りたくない理由」

「私・・・父親が大好きなんです・・・」

今の、父親も・・・」

「え？」

今の父親？

どういうことだ？

「今の父親って？」

「・・・」

美恵は一呼吸おいて、小さな声で語り始める。

「私が幼稚園の時、お父さんは交通事故で亡くなりました。

でもお母さんは私の前では心配させまいと、

泣く事なく、出来る限り私の前では楽しく振舞ってくれました。

でも、深夜に目が覚めた時、お母さんが泣いている声が聞こえました。

多分、お母さんは私が寝た後に毎晩のように泣いていたんだと思います。

でも私の前ではそんな素振りは見せなくて。

本当はお母さんの方が辛いはずなのに・・・」

「そうなのか・・・」

「お父さんがなくなった後、お母さんは毎日のように働き、

私を育ててくれました。

小6になった時、お母さんは今のお父さんと職場で出会い、

私を混ぜて食事に行ったり遊びに行ったりするようになったんです」

「うん・・・」

「私はお母さんに幸せになってほしいと思い、

お母さんが好きになれた人なら、結婚しても良いと伝えました。

かなり悩んでましたが、その度に私もお母さんが

幸せになってほしかったので結婚を望みました。

今のお父さんも凄く優しく、私も好きになりましたし。

その後、私が中2になった時に、お母さんは今のお父さんと

再婚したんです」

「そっか・・・」

思っていた以上に美恵の過去は傷だらけだったんだな・・・

何でも言ってくれとは言ったが、話が重いだけに

あいづちしか打てない・・・

「私の名前が美恵 美恵なのは、今のお父さんと結婚するまで、

谷口美恵（たにぐちみえ）という名前でした。

凄くお母さんは私の名前が苗字と同じになる事について、

名前を変えたくない意思を強くもっていたんですけど、

私がかまわないという説得を元に、今の名前になったんです」

「そういう事だったのか」

「はい。今年の1月14日、お母さんが・・・」

「ん？」

美恵の目がまた潤み始める。

流れないように美恵は人差し指でぬぐっていた。

「お母さんが・・・お父さんと同じように・・・」

交通事故に巻き込まれて・・・」

「まさか・・・」

「お母さんは・・・お母さんは・・・」

美恵はそれ以上言えず、泣き崩れてしまった。

こんなに辛い過去だったなんて。

誰が想像していただけるか。

自ら何でも話してほしいと言った自分の器の小ささが。

悔しいほど感じた。

こんな辛い想いをしてるのに。

毎日そんな素振りを見せなかった美恵も。

内心では凄い我慢していたのだろう。

味わったことがないその気持ち。

今の俺には、どう転がりかえっても理解しきれないだろう。

美恵の頭を撫でていた俺の手が動かない。

どうすれば良いかも分からない。

俺はずっと、美恵の姿を見届けるしかなかった。

しかし・・・

本題にはまだ入っていない事に気付く。

美恵の家族は現在再婚し、先日母を亡くした。

そして、さっき美恵の家で見たお父さんらしき人は、

まぎれもなく再婚後のお父さんだろう。

最近のありえない傷は、その優しいお父さんからの虐待・・・

まさか。

今まで優しくったお父さんが、虐待するというのも考えにくい。

だとすると、俺の推測は間違えてて、

自らを傷つけた痕だということのか？

それも自らだと物理的に難しい場所にだ。

それもまた考えにくい。

じゃあ一体誰が？

そんな事を考えている間に、30分は立っただろうか。
辺りはすっかり暗くなり、乗ることのないバスも、
何便か見送った。
降りて来た乗客はこちらを見ながら、何も言わず去っていく。
通り過ぎる車が跳ね上げる水しぶきの音と、
小さな声で泣く美恵の泣き声だけが、
俺の耳の中でこだまする。
俺は美恵の頭に再度そっと手を伸ばし、
ゆっくりと撫で下ろした。

「ごめんな、言いたくなかったのに、俺が追求したから
また辛い思いさせちゃって」

「・・・」

ゆっくりと。
美恵の頭を撫でる。

今、俺に出来ることはそれしかないから。
さっきはあまりにもショックで出来なかったけど。
自分の中で出来る限りの事をしよう。
今こうやって撫でる事が俺の限界だった。
美恵はまた少しずつ落ち着いてきて。

ゆっくりと話の続きを始めた。

「私、お母さんが亡くなった後、お父さんと一緒に、
毎日のように泣く日々が続きました。
少しでも何かしてない時間があると、
思い出して泣いていました」

「うん・・・」

「お父さんはお母さんが亡くなった後、
数日間は仕事に行っていましたが、同じ職場で
今まで働いていただけあって、いつもお母さんを
忘れられなくて仕事にならないからと、会社を辞めてしまいました」

「そっか・・・」

同じ職場で勤めていた夫婦。

仕事場でも思い出してしまう環境。

俺には到底想像も出来ない辛さなんだろうな。。

「お父さんは今までお酒を家で飲むことは無かったのに、
会社を辞めてから家で飲むことが増えました。
最初は、お父さんがご飯を作ってくれたりしてたんですけど、
お父さんは毎日お酒を飲むことと寝ること意外、何もしなくなっ」

「うん・・・」

「その後、お父さんに代わって私が料理を作る事にしました。

そしたら・・・」

「・・・そしたら？」

「お母さんの味じゃないって怒鳴って。。。

テーブルにおいていた料理を叩き壊しました・・・」

「ええっ・・・」

「こんなもの食えるかって言われて・・・

この時初めて、怖いお父さんを見ました。

それからお父さんは、段々お酒を飲む量が増えて行って。。。」

「・・・うん・・・」

「私がバイトから帰ってきたら、

帰ってくるのが遅いって殴られたり、

お父さんが好きな料理を作って上げようと思って

作ったりはしてたんですけど、お前は母さんの何を見てきたんだって

作った料理を私に投げてきたり。。。」

「そんなむちゃくちゃな！・・・」

やはり。。。

今までの傷は父親からの虐待だったのか。

しかし。

こんな形で虐待なんて。。。

美恵はある意味両方の親を交通事故という最悪な結果で

無くし、今の父親よりも辛いはずなのに、乗り越えようと頑張っている。

なのに。。。

「でも私は・・・私は、お父さんの気持ちに答えたくて。

少しでも、お母さんと同じ味になるように料理したりしてるんですけど、

やっぱりうまく行かなくて。。。」

「・・・うん」

「でも、きっと私が上手くなれば、お父さんもまた優しい

お父さんになってくれるだろうから。。。

そしたら、お父さんもまたお仕事して、元気になってくれるだろうから・・・」

「美恵・・・」

本当に。

本当にそうなるのだろうか。

俺には現実を受け止められなくて八つ当たりしてるようにしか思えない。

ましてや、料理の味が一致すればする程、

お母さんの事が忘れられなくてエスカレートするんじゃないだろうか。

「美恵・・・本当に、そう思ってる？」

「はい。お父さんが怒るのは、私が出来損ないだから。

私がしっかりすれば、お父さんはまた優しいお父さんに
戻ってくれるんです。

だから・・・光一君に聞かれた時答えたように、
時間の問題なんです」

「それ・・・それは違ುದる・・・」

「違うくないんです。私が、出来損ないだから悪いんです・・・」

「・・・」

何で。

何でこうなるんだろうか。

あきらかに間違えているのは父親の方だ。

何で美恵ばかり辛い想いをしなくちゃいけないんだ。

「さっきの頬、何で叩かれたんだ？」

「・・・男友達なんて作って良い身分だなんて言われて。

光一君には申し訳ないんですけど、買ってきて頂いた物を

目の前でゴミ箱に捨てられたので、拾いに行ったら叩かれちゃいました」

「えええ・・・」

「ゴミを拾うように育てた覚えはないって言われて。

そんなゴミを拾うような奴はゴミだって。。。

ゴミは出て行けて外に出されちゃいました」

「なんでやねん！ありえへんって！！」

「良いんです。いつもの事ですから。

また少し時間が立った後に戻れば、何も言いませんから。

お父さん、ちょっと気が立ってただけなんです。

だから、私気にしてませんから」

「・・・ありえへんって・・・」

大事な子供をゴミ扱い。。。

しかも、いつもの事って・・・

美恵は毎日こんな事を言われて過ごしているのか・・・

それなのに。

どうして美恵はそこまでプラス思考なんだ。

どうして自分が悪いと思う。

どうして親は悪くないと言えるんだ。

俺には・・・

俺にはわからない。。。

「なあ・・・正直に言ってくれ。

美恵、お前は辛くないのか？

実のお父さんもお母さんも亡くなって、一番辛いのは美恵のはずだ。

今のお父さんより、お前の方がずっと辛いはずなのに。

どうしてお父さんをそんなにかばうんだ？

美恵は悪くない。お父さんがどう見ても悪いよ！」

「・・・お父さんは悪くないです。

本当は、優しいお父さんだから。今はちょっと気が立ってるだけなんです。

それに、私よりお父さんの方が辛いと思います。

私はお父さんがいるけど、お父さんにはお母さんがいないから」

「それは違うだろ？お母さんがいないのは美恵も同じだぞ！」

「私には、お父さんがいます。だから、お父さんの方が辛いんです。

お母さんが亡くなった後、凄く悲しかったけど、

お父さんが、私にはお父さんがいるからって。

ずっと一緒にいるからって、言ってくれたんです。

私には、お父さんに頼ることが出来るけど、お父さんは、頼れる人がいなくて。

だから私よりずっとお父さんの方が辛いんです」

「そんな・・・」

分からない。

どうしてそこまで父親をかばえるのか。

本来あるべき姿は、父親は美恵がいるから頑張ろうって

てなるんじゃないのか？

子供は立ち直ってるのに、いち早く立ち直るべき親が子供に

八つ当たりなんて、理不尽だ！

美恵の方が何倍も辛いはずだ。

信用していた父にも裏切られている状態。

美恵は、自分に言い聞かせてプラス思考になっているだけにしか思えない。

本当は。

本当はそんな支える器なんて、あるわけが無い。

「美恵」

「はい」

俺は立ち上がり、美恵の前に立つ。

美恵の両肩に手を置き、中腰になって美恵との目線を合わせた。

小刻みに震えながら肩で息をする美恵を感じる。

「辛いなら、辛いって言って良いんだぜ。

俺はお前の強がりを知りたいわけじゃない。

お前の本音を受け止めたい」

「・・・」

「だから。辛い時は辛いって。苦しい時は苦しいって。

言って良いんだよ。その気持ち、全部俺が受け止めてやるから。

強がらなくて、良いんだよ」

「・・・」

美恵の表情が次第に崩れていく。

再び瞳からじわりと涙があふれて来る様子が分かる。

「・・・ほんとう・・・に・・・」

「ああ。強がらなくていいぞ」

「・・・ほんとに・・・」

美恵の声が裏返る。

「ああ。我慢しなくていい」

「・・・ううっ・・・」

美恵は倒れるように俺の胸へ飛び込んできた。

いきなりのアクションでよろめきながらも、何とか受け止める。

「辛いよおー・・・もう死にたいよおー・・・」

声にならない裏声で泣きながら本音を俺にぶつける。

「もうやだよおー・・・お父さん怖い・・・」

俺は何も言えず、美恵を強く抱き締める。

「お母さんに逢いたい・・・叩かれるの怖い・・・」

言葉をかけてやりたいが・・・

いい言葉が浮かんでこない。

何も言えない自分が悔しい。

俺に出来ることは・・・

やはり、頭を撫でてやる事しか出来なかった。

その後も美恵は何か言っていたが、

言葉として認識することが出来ない程泣きじゃくっていた。

Tシャツの胸あたりが、じわじわと生ぬるい涙で湿っていくのが分かる。

やはり。

美恵は強がっていた。

誰よりも、一番辛かったのは美恵だったはずだ。

サブリミナル効果のように自分に言い聞かせ、

あるはずも無い器を作り出し、自分を支えていたんだろう。

いや、辛かったからこそ、耐える手段はそれしかなかったんだろう。

自分の平常心を持たせる為に行った、人間の本能なんだろうか。

今俺が言える言葉は・・・

「辛くなったら、何時でも俺に言って来い。

お前は、もう一人じゃないから」

少しの間が空いた後、小さな声で、美恵が口を開いた。

「・・・うん・・・ありがとう・・・」

それからしばらくの間、俺はずっと美恵を抱きながら、

頭を撫でてあげた。

中腰で足がしびれてきたが、我慢した。

やがて、美恵から再び口を開く。

「光一君、ありがとう。もう、大丈夫」

「そっか」

ゆっくり美恵の体を起こし、ベンチに座らせた。

足がしびれてジンジンするが、気合で俺もベンチへ座った。

「そうだ」

俺は鞆からペンを取り出し、コンビニで買った時の

レシートを裏返しにし、俺の電話番号とポケベル番号を書き、

美恵へ渡す。

「これ、俺の番号だから。何かあったら、何時でも掛けてこいよな」

美恵は番号の書いたレシートを受け取る。

「ありがとうございます」

「ああ。本当に、何時でも良いから」

「はい」

俺はバス停の時計を見る。

もう8時を過ぎていた。

ここで3時間近くいたのか。

「もう、8時だけど。帰るよね？」

「はい。もう大丈夫だと思います」

「そっか」

美恵はゆっくりと立ち上がる。

いつの間にか雨は止み、目の前の道路を通る車も少なくなっていた。

「家まで送るよ」

「いえ、お父さんが見るとまた怒られそうなので」

「そっか。。。分かった。気をつけて帰ってね」

「はい」

俺も立ち上がり動こうとしたが、足がしびれて上手く動けない。

仕方なくその場で美恵を見送る。

「じゃあ、帰ります」

「ああ」

美恵は背を向け、ゆっくり歩き始めた。

そんな姿を見て、俺はもう一言言いたかった。

「美恵！」

俺の声に反応して、美恵が振り返る。

「何時でも、何かあったら連絡して来いよな！」

美恵は頷き。

「はい。ありがとう」

俺は笑顔で美恵に手を振る。

美恵もそれに答えて小さく手を振り、ゆっくりと背を向け、自分の家に歩いて行った。

俺は、美恵が見えなくなるまで。

ずっと。

小さくなっていく美恵の背中を追い続けていた。

俺はこの日のブログを読み終え、

彼女の手紙に振り返る。

「私を受け止めてくれた光一君の大きな胸。

凄く暖かかった。

そして。

凄く嬉しかった。

今まで我慢していた自分の気持ちを。

光一君が優しく受け止めてくれた。

この時は、光一君が支えてくれるから、

何があっても乗り切れると思った。

そんな光一君を。

私は好きになっていた。

だから、ダメだったんだよね。

光一君を好きになっちゃ。ダメだった。

もし、少しの間、時間を戻せるのなら、

この日、光一君を避けてすごしたい。

好きになったことで、こうして今自分を追い込む形になるなんて。

この時は思ってもいなかった」

美恵。。。

俺の事好きだったのか。

追い込むって。。。

やっぱり、あの時の事が・・・

8話「美恵とのデート」

5月7日、木曜日。

ゴールデンウィークも一瞬で終わり、地獄の学校が始まる。

今日は美恵、来てるだろうか。

結局、美恵からゴールデンウィーク中に

電話やポケベルが鳴る事はなかった。

鳴らなかった事は、特に問題なかったと思えばいいのか、

問題があってそれ所ではなかったと思えばいいのか、

俺には会って聞いてみるまで分からない。

そんな思いを胸に、教室へ入った。

「おはよ、光一くん」

真っ先に俺を気付いたのはドアの近くに座っている千里だった。

「ああ、おはよう」

挨拶しながら、美恵の席を確認する。

そこには、期待していた美恵が座っていた。

少し俺は安心し、千里の方に向いた。

「あ、ノート」

俺は鞆から千里に借りていたノートを取り出し、千里に渡す。

「サンキューな」

「はいはい。ゴールデンウィークは何処か行った？」

「ん。いや、寝正月だったな」

「正月じゃなくてゴールデンウィークだよ？」

「ああ、寝ゴールデンウィークだったな」

「相変わらず不健康な生活ねえ」

「日頃の疲れを癒すのにそれ位の期間が必要なんだよ」

「日頃って、授業中も常に癒してるじゃん」

「あれは瞑想だ。極限の集中力が必要なのださ」

「よだれが出るほどの集中力ですかあ」

「え？出てた？」

「ほらー！やっぱり寝てたんじゃん！」

「あ、しもた。。。また千里トラップにひっかかった」

「またー！トラップとか言わない！もう！」

「へいへい。そういう千里は何処かいったのかよ？」

「私は潮干狩り行ってきたよー」

「マジで？ダダ込みだったんじゃね？」

「うーん。ぼちぼちね。でも楽しかったよー」

座っている千里を見渡す。

全然焼けているようには見えない。

「その割には全然焼けてないのな」

「日焼け止め徹底したからねー」

「ふーん。女は大変だな」

「そだよお。見えない努力をいっぱいしてるんだよお」

「見えない努力ねえ。俺も見えない努力はしてるぞ」

「たとえば？」

「例えると見える努力になっちゃうだろ？」

「その前にないでしょ？」

「ある」

「ない」

「たまにある」

「たまにもない」

「否定的だな」

「凶星でしょ？」

「はいはい。まあそう思っててくれ」

「うんうん」

やれやれという表現を見せ付けた後、俺は千里の席から離れる。

自分の机に鞆を置き、美恵の席へ向かった。

肩に手をポンと置き、声を掛ける。

「よっ、今日は久しぶりの登校だな」

美恵は振り返り、俺に視線を向ける。

「はい。おはようございます」

「あれから電話無かったけど、何も無かったって事で良いのかな？」

「おかげさまで、特に何もありませんでしたよ」

「そっかそっか」

美恵の隣の席へ勝手に座る。

「ところでさ、いつも思ってたんだけどさ」

「はい？」

「その敬語口調、止めね？ すぐ一気になるんだが」

「そうですか？ ついつい初対面の人には使ってしまうんです」

「俺達もう初対面じゃないじゃん」

「まあ、そうですけど」

「普通に言ってみ？」

「はい」

「はい、じゃなくて、うんって言うだろ？」

「う、うん」

「他の友達にも全員敬語でしゃべってるの？」

「・・・うん。今の所はそうですね」

「今の所はそうだね、だろ」

「そう・・・だね・・・」

「去年の学級にいた時の友達ともそうなの？」

「途中まではそうでし・・・そうだったけど、

今は普通にお話しま・・・するよ」

「ふーん。いつからそういう敬語使うようになったの？」

「お母さんが結構そういう所は厳しい人だったから、

色々教えてくれたんで・・・くれたの」

「そっか。母親の影響なんだね」

「うん」

「そういえばさ、この前、星が見えるって言ってたけど、

なんていう星が見えるの？」

「えっと。。。」

「ん？」

「お母さんが、星を見上げるのが好きで、良く家から星を眺めてたの。

だから、見上げれば、お母さんが見えるかなって」

「・・・そっか。お母さんが見えていたんだね」

「うん。私だけにしか、見えないかも」

「心の目でしか、見えないだろうな」

「そう・・・だよね・・・」

「俺も、星見るのは好きだからさ、機会があれば、見に行こうぜ」

「うん。行きたいー」

「おう」

お母さんの話をしだした時は少し暗そうな顔をしたが、

すぐに元気そうな顔になった。

危ない所だったぜ。

「なあ、今日バイトある？」

「えーっと・・・」

美恵は鞆から手帳を取り出し、スケジュールを確認する。

「今日はないみたい」

「そっか。暇だったら、学校終わってから遊びに行かね？」

「何処行くんです・・・何処行くの？」

「カラオケとかどう？気分発散になるだろ？」

「良いね。行く行く」

「OK。じゃあ学校終わったらいくぜ」

「うん、あっ」

「ん？」

美恵は手帳の裏側にある方をめくり、筆箱からペンを取り出す。

それを俺に手渡してきた。

「良かったら、書いてほしいな」

「ん？」

住所録だ。

俺の名前と電話番号が可愛い字で書いてある。

「もう書いてるじゃん」

「えっと、住所の部分が埋まってないから、埋めてほしいなと思って」

「ああ、そういう事ね。OK」

俺は自分の住所を書く。

「それにしても可愛い手帳もってるなあ」

俺はパラパラと手帳をめくる。

デイリーの部分になにやら日記のような内容がぎっしりと書かれてあった。

「5月4日、お父さんと遊園地に行く。

観覧車に乗り、お父さんが隣に座る。

夜景を見ながら、お父さんと星を眺める」

「あっ」

美恵は手帳を取り返そうとして来た。

悪いと思い、俺もそのまま美恵に手帳を返す。

「日記帳にもなってるのな。ゴールデンウィーク中は、

お父さんと遊びに行ってたのね」

美恵は手帳を胸に、横に首を振る。

「・・・行ってないよ」

「えっ？」

「こうだったら良いなと思って。書いてるだけ・・・」

「書いてるだけ・・・か。そういや、日記帳のわりには

過去形の書き方じゃなかったもんな」

「うん」

「理想の未来日記ってどこか。。。」

「うん。そうだね」

「勝手にみて悪かったな」

「うん。良いよ」

「んじゃ、今日のデイリーには、俺と遊んだ日記でも書いてくれよな」

「うん。わかった」

キーンコーンカーンコーン。

チャイムが鳴る。

「じゃ、また放課後な」

「うん」

俺は自分の席に戻り、久しぶりの地獄授業を苦痛に感じつつ、瞑想へと落ちた。

．．．

ゴン、ゴン。

頭が叩かれている感覚がある。

「．．．くん」

誰かの声が聞こえる。

「光一くんってば！」

「．．．ん．．．」

ゆっくり顔を上げ、見上げる。

そこには千里の姿があった。

俺の頭にノートらしきものをのせている。

「．．．ノートで俺を殴ったか？」

「これの何処が瞑想なの？」

「ノートで俺を殴ったか？」

「いらぬなら持って帰るよ」

「ああ、悪い。いるいる」

頭に置かれてるノートを受け取る。

「サンキュー」

「じゃ、先に帰るね」

「ああ。また明日な」

「うん。また明日ね」

俺は寝ぼけながらノート類を鞆に入れ、机を立つ。

周りはほとんど帰っているようで、結構な時間寝ていたようだ。

美恵はまだ自分の席で座っている。

俺はそのまま教室を出ようとした。

「あ、光一君！」

「ん？」

俺を呼び止めたのは美恵だった。

「どした？」

美恵も机に広げていたノートを鞆に入れ、いそいそと近づいてきた。

「おまたせ」

「えっ？」

「今日、カラオケ行くんだよね？」

あ。

そうだった。

寝ぼけてて忘れてた。

「ああ、そうそう。ごめんごめん。じゃあ行こうか」

「うん」

危ない危ない。

普通に忘れてた。

俺達は学校の近所にあるカラオケ屋へ向かう。

「なあ美恵。カラオケは結構得意？」

「うーん。下手ではないと思う」

「ほー。それは楽しみだ」

「光一君は？」

「んー。まあ、そこそこかな」

「そうなんだ。光一君上手そうだよな」

「まあ、お楽しみに」

「うん」

「俺さ、カラオケで歌う声を聞いて、占い出来るんだよ」

「占い？」

「そそ。どういう性格してるとか、声でなんとなく分かるんだよな」

「へえー。じゃあ占ってみてね」

「おう。占っちゃる」

そんな他愛の無い話をしながら、カラオケ屋についた。

ルームに案内してもらい、ワンオーダーを注文する。

「俺、コーラで」

「私はオレンジジュース」

店員さんはリモコンの説明をした後、ルームを後にした。

二人は選曲用の本を眺める。

「何か歌ってほしいのとかある？」

「えっと。ダンサー光一君。だったよね？」

「ぶっ。よく覚えてたな」

「歌える？」

「一応ね」

「わーい」

「なんだ、kinko好きなの？」

「うん。ゴールデンウィークの間に結構聞いてたよ」

「へえ〜。リクエストは？」

「えっと、僕らは愛の花咲かそうよ〜っていう歌がいい」

「ああ、フラワーね」

「うん。あの曲、励まされるんだ」

「元気が出る歌詞だもんな。OK」

リモコンを操作し、フラワーを選曲する。

PVが流れ、ノリノリになりながら俺は熱唱した。

「一緒に夢をかなえよう～」

「きゃ～」

美恵が笑顔で拍手する。

「光一君、光一君みたいに上手だよー」

「そか？そりゃよかった」

「格好良かったよっ」

「サンキュー！」

マイクを美恵に渡す。

「美恵は何歌うの？」

「これこれ」

モニターを指差す。

美恵はあゆを歌うようだ。

「エイソングフォーペケペケペケ？」

「ペケペケペケは読まないよ」

「あ、そうなんだ」

マイクを深く持ち、熱唱し始めた。

普段は少し低い声なのだが、歌い始めると別人のように高い声で熱唱する。

ビブラートも良い感じに出来ていて、凄い上手だ。

「やべ。めっちゃうまいじゃん」

「ありがとっ」

美恵は完璧に歌いきる。

美恵の別人のような綺麗な声に聞き惚れてしまった。

俺は大きな拍手をする。

「うますぎだよ。びびった」

「えへへ」

嬉しそうに頭を撫でながら照れ隠しする。

「占いはどうだった？」

「ん。えーっと」

全然考えてなかった。

「うんうん」

美恵は俺の回答を待つ。

「えっと、凄く優しそうな感じだった」

「ありがと」

美恵は円満な笑みを見せる。

そんな姿が、ちょっと可愛いな。

と、思った。

その後、二人で熱唱を続け、楽しい1日を過ごした。

俺はこの日のブログを読み終え、

彼女の手紙に振り返る。

「光一君を意識し始めてから、

kinkoの歌を聴くようになったよ。

ダンサー光一君って言葉。

私の中では深く残っていたから。

フラワーを熱唱してくれた時、

凄く嬉しかった。

まるで光一君が私に応援してくれているかのように。

そう思えた」

美恵が選曲した歌。

歌詞を見てると、応援ソングなようなものが多かった。

きっと。

自分を励ますために。

日々、聞いていた歌だったんだろうな。

歌には、凄い励まされる力が込められている。

すごいよな。

歌って。

9話「すれ違う気持ち」

5月11日、月曜日。

今日は俺の誕生日だ。

朝早く、妹の愛美からカップラーメンのプレゼントがあった。

まあ、軽く嫌がらせには変わらない。

親からは図書券。

本読まねー俺には使い道がないんだが。。。

漫画の本買う時にでも使う事にしよう。

俺はいつものように学校に到着し、自分の教室に入る。

何故か千里の隣に福岡が座っている。

「よっ。おは・・・」

パーーン！

「ちょっ！」

福岡と千里は俺に向かって隠していたクラッカーを引っ張った。

ダイレクトにクラッカーの中に入っていた紙帯が俺に直撃する。

地味に痛いんだが・・・

「せーの、お誕生日おめでと～」

福岡と千里は声をそろえて俺を祝福する。

「なんだなんだ～？えらいサプライズなお祝いだな」

「えへへ。福岡くんと作戦を練っていたんだよ」

「おめでとさん、成瀬」

「ああ、ありがと。マジ、びびったわ」

髪の毛に引っかかっている紙帯を取り除く。

「成瀬、今日暇だろ？」

「ん？ああ、暇だぞ。帰宅部だからな」

「放課後誕生日プレゼントにカラオケおごってやるから行こうぜ」

「まじで？おごってくれんの？行く行く」

「OK。じゃあ放課後にな」

福岡が使い終わったクラッカーを俺に渡す。

「ん？」

「ゴミは捨てといてくれな」

「後始末は俺かいっ！」

「当然だ」

福岡は俺の肩にポンと手を置き、そのまま自分の席へ戻っていった。

「まったく」

千里に手を差し出し、使い終わったクラッカーをよこせとばかりに手招きをする。

千里は理解したようで、クラッカーを俺に渡す。

「なんで俺が後片付け役なんだよ。今日の主役は俺じゃねーのか？」

「あははっ。福岡くんらしいよね」

「まったくだ。ところで」

「ん？」

「福岡はおごってくれるらしいが、千里は何してくれんの？」

「福岡くんと合算だよ？」

「なんだ、合算か」

「うんうん」

「らじゃー。とにもかくにも、サンキューな」

「うん」

俺は後ろにあるゴミ箱にクラッカーを捨て、自席に鞆を置いた。

美恵の机を見たが・・・

どうやら今日は来ていないようだ。

特に電話はなかったが・・・

何かあったんだろうか。

そういや、美恵に俺の誕生日教えてなかった。

まあ、美恵の誕生日も知らんわけだが。

明日も学校来なかったら連絡してみるか。

・・・

って、俺番号知らねーじゃん。

この前、住所録書いた時に聞いたら良かったな。

何だこの一方通行は（笑）

.....

時間が立つのは早いもので（寝てるからかもしれんが）

あっという間に放課後だ。

鞆にノート類を詰め込み、千里の席へ向かう。

「今日もノートよろしく」

「はいはい」

千里からノートを受け取る。

「サンキュ」

受け取ったノートを鞆にしまう。

「光一くん」

「ん？」

「今日はね、○○駅にあるカラオケ屋ね」

「あ？何でそんな所いくんだ？すぐそこにあるじゃん」

「飾り付けもしてくれるお店なんだよ〜」

「飾り付け？そんなん別にいらんが・・・」

「まあまあ、誕生日位盛り上がりようよ」

「俺はいつも盛り上がってるがな」

「そうだね。ちゃんとケーキも準備してるからね」

「まじで？えらい準備がいいな」

「合算の意味分かったでしょ？」

「ああ。そりゃ金かかるわな。納得した」

福岡が帰る支度が出来たようで、近づいてくる。

「お待たせ。んじゃ行こうぜ」

「おう」

俺達は学校を後にし、○○駅へと電車で向かう。

電車で揺られながら福岡達に疑問をぶつける。

「それにしても、お前らいつからこんな計画立ててたんだよ」

「ゴールデンウィーク前位かな。成瀬、去年散々な誕生日だったろ？」

「ああ。去年の誕生日は風邪引いてそれ所じゃなかったからな」

「バカは風邪引かないって言うけど、引いちゃうもんだよね〜」

千里がクスクスと笑いながら言う。

「バカじゃないという事が証明された日だな」

「そうだな。成瀬はアホだもんな」

「なんでやねん。俺は神だ」

「神が風邪ひかねっつーの」

「あれは俺がレベルアップする為の試練だったのさ」

「風邪引く試練ねえ。聞いた事ねえ」

「神のみぞ知る現実ってやつだ」

「あっそ。まあ、今年は盛大にしてやるから楽しめよ」

「ああ。サンキューな」

電車は○○駅に到着する。

って、ここ美恵の最寄り駅じゃん。

俺は福岡を先頭についていく。

「そこだぜ」

福岡は指差しながら歩く。

「へえ。お前ら普段この駅こないだろ。ここ来た事あんの？」

「私は打ち合わせに来ただけで、ここで遊んだことはないよ」

「福岡は？」

「俺は結構来る所でね。店長と仲良いんだよ」

「なるほど。福岡のツテってことね」

「まあ、そういうことだ」

俺達は店に入り、カウンターで待っていた店長らしき人と話している。

やがて、店長らしき人は俺達を案内し、ルームに案内する。

「さっ、成瀬くん。開けてごらん」

店長が俺に声をかけてきた。

俺は言われるがまま、ルームの扉を開ける。

「うわお」

部屋一面に風船で覆われ、テーブルの真ん中にケーキが置かれている。

俺は部屋に入り、周りを見渡す。

「すげえな」

テーブルの真ん中にあるケーキを見る。

俺が好きなショートケーキホールに複数のろうそくが立てられ、

ケーキの左右にはハートマークがアポロでデコレーションされ、

中央には板チョコがささっていて、なにやら文字が書いている。

そこには、『光一くん お誕生日おめでとう』と書かれていた。

「何でハートやねん」

「ささ、主役はお誕生日席へ」

千里が部屋の奥へ誘導する。

俺は奥に座り、福岡と千里は手前の席へ座った。

店長は全員が座る所を見届けた後、部屋のドアを閉め立ち去っていった。

千里がろうそくに火をつけている間に、福岡は照明を落とす。

二人は準備が出来たかのように、『せーの』の掛け声と共に歌い始める。

「ハッピーバ～ステ～トゥ～ユ～ ハッピーバ～ステ～トゥ～ユ～

ハッピーバ～ステ～ディ～ア光一～

ハッピーバ～ステ～トゥ～ユ～」

パチパチパチパチ。

二人は俺に向かって拍手。

「ささ、一発で消してね」

千里は笑顔でろうそくを消す俺を待つ。

期待に答える為、めいっぱい空気を吸い込み、勢いよく吹きかける。

ろうそくは瞬く間に消え、勢いでハートを描いていた

アポロがいくつか飛んでいった。

「もろいハートだったな」

「ちょっと～。肺活量ありすぎ～」

「成瀬！おめでとうー！」

「光一くん、おめでとう～」

二人は再び拍手を始めた。

「サンキュ。マジ、本気で嬉しいわ」

「良かった良かった」

千里は円満の笑みで拍手を続ける。

福岡はナイフを手にし、千里に渡す。

「んじゃ千里。カットよろしく」

「うん」

福岡は照明を明るくしている間に

千里は板チョコを一旦はずし、器用に3等分した後、皿に移し配る。

俺のケーキにわざわざ板チョコを再度ドッキングされる。

「アポロハートの上に板チョコってすごい組み合わせだな」

「ささ、光一くん食べて食べて」

「んむ」

一口サイズにフォークで切り取り、口に入れる。

「うん。うまいな」

「ほんと？良かった～」

俺達はその後、ケーキを頬張りながらカラオケを楽しんだ。

.....

途中千里が歌っている時に福岡が声を掛けてくる。

「俺、今から女と待ち合わせがあるんで、ここで抜けるな」

「そっか。今からデートかよ。相変わらず遅いな」

「彼女はバイトなんでな。じゃあお先に」

「おう。また明日な」

福岡は二人が分かるように手で合図をし、ルームを去った。

千里と俺は残り時間、カラオケを楽しんだ。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、俺と千里はカラオケ屋を後にする。

「いやー楽しかった。それにケーキも美味かったし。余は満足じゃ」

「喜んでもらえて良かったよっ」

千里は満足しているようだ。

「んじゃ、帰るか」

「あ、光一くん」

「ん？どうした？」

千里は近くにある百貨店を指差す。

「ん？」

「夜景、ちょっと見に行かない？」

「ああ、いいぞ」

俺達は百貨店に向かい、エレベータを使って屋上へ向かう。

二人は屋上に着き、鉄柵の付近にあるベンチへ二人並んで腰掛ける。

「あっ」

「ん？」

千里は鞆からごそごそと何かを探し、小さな何かを取り出す。

「光一くん」

「なんだ？」

「これ、お誕生日プレゼント」

「えっ？」

千里は俺に手渡してくる。

「プレゼントって、カラオケ合算だったんじゃないの？」

「これが、本当の私からのプレゼントだよ」

「・・・サンキュ」

俺は千里から受け取る。

「開けてみていい？」

「うん」

俺は綺麗にラッピングされたのを丁寧に解く。

包装紙の下には、箱のようなものが入っていた。

俺はその箱を開けた。

「えっ。これって」

「光一くん。こういうの、好きって言ってたよね」

箱の中には、前に千里の買い物に付き合ったときに例をあげた、ブレスレットだった。

「良く覚えてたな」

「うん。光一くんの事は、忘れないよ」

「つけてみていい？」

「うんうん」

箱からブレスレットを取り出し、自分の腕へとはめる。

「うん。良い感じだ」

「良かった」

「サンキューな」

千里のサプライズ。

ちょっと感動した。

てか、これ結構な値段したと思うんだけど。。。

「光一くん」

「ん？」

「今日は天気が良くて、星もいっぱい見えるよ」

千里は夜空を見上げている。

俺も夜空を見上げ。

「ああ。綺麗だな」

「うんうん」

「千里、お前にはあの北斗七星の隣にある死兆星が見えるか？」

「なにそれ？何処？」

「ほら、あそこらへんにあるはずなんだ」

俺は星に向かって指差す。

もちろん、死兆星は有名なあのアニメの話で、本当には見えるはずがない。

千里は指差した俺の腕にべったりとくっつき、その指先を眺める。

「見えないよ？」

「そうか。ではまだ戦う時ではないようだ」

俺はそのまま千里に視線を移す。

千里は、知らない間に俺に視線を向けていた。

ずっと俺の事を見詰める。

べったりとくっつかれてるので、距離が近い。

「ねえこのネタ、知ってる？」

「私には、見えるよ」

「え？死兆星？」

「ううん。光一くんの瞳が」

「なんじゃそりゃ」

「ねえ、光一くん」

「ん？」

千里はしばらく俺をずっと見詰める。

「・・・好き」

「ん？何を？」

「・・・光一くんを」

「誰が？」

「私が」

「ええっ？」

福岡に以前から言われていたが、

本人から真剣に言われると、どう反応していいか困る。

確かに、千里は良い子だし嫌いではないが。

好きかどうかと聞かれると、良く分からない。

「光一くん」

「ん・・・？」

千里はベンチに座りながら背伸びをし、

俺の視界にゆっくりと千里の顔がズームインする。

千里は目を閉じながら俺に近づき。

どうすればいいか分からない俺の気持ちを無視するかのよう。

千里と俺の唇はそっと触れ合った。

ゴトン。

少し遠い所で何かが落ちた音がした。

千里と俺は音に気づき、千里から体を離す。

俺は音がした位置に視線を合わせた。

「あっ・・・」

そこには、手持ちのバッグを落とした美恵の姿があった。

美恵はこちらを見ながらピクリとも動かない。

「美恵・・・どうして、ここに？」

「美恵ちゃん・・・」

美恵は自分のバッグを拾い上げ、駆け足でその場を後にした。

「美恵！」

俺は立ち上がり、美恵を追いかけようとするが。

俺の腕を強く千里がつかむ。

「千里・・・」

千里は険しい顔で。

「いかないで」

おれは

「えっ？」

俺は美恵のいた場所に視線を戻すが、そこには美恵の姿がもうなかった。

視線を千里に戻す。

「なんで？」

千里は俺の腕をさらに強くつかみ、こう言った。

「私だけを見てほしい」

10話「現実の今」

千里は俺の腕をさらに強くつかみ、こう言った。

「私だけを見てほしい」

「何を？何で止める訳？」

「だって・・・」

「だって？」

「光一くん、美恵ちゃんの事気にしてるでしょ」

「え？なんで？」

「この前、お見舞い行ってたし・・・」

「何で知ってるの？」

「福岡くんが言ってた」

「はあ。なるほどね。とりあえずさ、美恵の話は後で詳しく話すから、
ちょっとおっかけさせて？」

「やだ・・・」

「なんで？」

「やなの・・・」

「・・・。わかった。何か、勘違いしてるみたいだし、
話しようか」

仕方なく俺はベンチに再度腰掛ける。

千里もその姿を見て俺の手を開放し、隣に座った。

「まず・・・千里は美恵の事何処まで知ってるの？」

「何処までって、光一くんと仲がいいような話は福岡くんから聞いたよ」

「そっか。そりゃそうだよな」

そういや美恵の過去の話は俺だけしか知らないんだったな。

「美恵はね、学校良く休むのは知ってるよね？」

「うん」

「休む理由なんだけど、実は美恵、親にDV受けてるんだよ」

「え？」

「それでね、傷ついた体を見せない為に、学校を休んでるの。

病気とかじゃないんだよ」

「・・・そうなんだ・・・」

「だから、俺が美恵の事心配なのは、その親からのDVが気になって、
相談役となっているのね。だから、気に掛けてるの」

「そっか・・・」

千里は申し訳なさそうに下を向く。

「ごめんね、勘違いしてた」

「いいよ。何を勘違いしてたのか良くわからんけど」

「美恵ちゃんの事気になってるみたいだったから、好きなのかと思ってた」

「俺が？美恵を？」

「うん」

「んー。。。」

俺の気持ち。

ちゃんと言った方がいいよな。

でも、怒られるかな・・・

「なあ、千里」

「ん？」

「正直な話さ、誰が好きとか、わかんないんだよ」

「・・・そうなの？」

「うん・・・こんな事言って良いのかわかんないけど、
千里の事、俺はどう思ってるか、わからないんだ」

「・・・」

「今まで友達として見てたし、そういう対象としてみてなかったから。
今頃になってだけど、ごめん」

「そっか」

千里はずっと下を向いて俺と目をあわそうとしない。

やっぱ、今のタイミングで言うのはまずかったか。

「千里は。千里は、いつから俺の事を？」

「・・・ずっとだよ」

「ずっとって。1年の時からって事？」

「うん・・・」

「そうなのか・・・全然、気付かなかった」

「・・・鈍感」

「ごめん」

「好きじゃないのに・・・キスしたのね」

「・・・えっと」

出たよ。

一番聞かれて困るツッコミ。

あえてツッコミ返す事で回避出来るかな？

「ATフィールドが発動しなくてな・・・」

「なにそれ？」

「心の壁って意味かな・・・」

「ふーん」

「何か、期待に添えない回答ですまん」

「光くんはいつもごまかすよね。瞑想って言ってみたり

今みたいに」

「そうだな・・・」

「ごまかす所は、好きなんだけどな」

「え？そうなの？」

「でも。ちゃんとした話の時位は、ちゃんと話してほしい」

「・・・ごめん」

ダメだったらしい。

まあこの質問はクリア出来たからよしとしよう。

「なあ」

「ん？」

「好きって、何だと思う？」

「何って？」

「こう、何をどういう状態が、好きって言うのかなと思ってさ」

「光一くん、初恋した事あるでしょ？」

「ない」

「ないの！？」

「うむ。多分ない」

「そっかあ。それじゃ、分からないね」

「だろ？で、好きってどういう感じなの？」

「んと・・・その人の為に何かして上げたいとか、

何もしてなくてもその人の事を考えちゃうとかかな？」

「ふむ。じゃあ、どうやって俺を好きになったの？」

「ええ・・・聞く？」

「聞く」

「えーっと・・・普段バカっぽいけど、本当は凄く優しくて、

一緒にいて楽しいし、ずっと一緒にいたいと思う。かな」

「普段バカっぽいって所は余計じゃないか？」

「そこがまた、光一くんっぽくて良いんだよ」

「ふーん。まあ良くわからんけど」

「ねえ、光一くん」

「ん？」

「美恵ちゃんの事、私も出来る事は手伝いたいから、

何でも相談して？」

「ああ。わかった」

相談ね。

俺が相談を聞いて、さらに相談するってのもどうかと思うんだが。

女の子が考えている事は分からん事も多いし、

それはそれでありかも知れんな。

「光一くん」

「ん？」

「今日、引き止めてごめんね」

「ああ。まあ、何とかなるさ。何で逃げたのかはようわからんけど」

「多分、光一くんの事、好きなんだよ」

「え？」

「光一くん、誰にも言えない相談受けてるし、それだけ信用してくれてるって事でしょ。

きっと、光一くんの優しさが好きなんだと思う」

「それを好きって言うのか？」

「・・・どうなのかな。でもね、好きっていう定義は決まってるわけじゃないから、本人にしか真実は分からないと思う」

「真実ねえ・・・真実は、いつも1つ！」

「それは、本人だけが知っている。って所かな。

本人でも、勘違いっていう可能性もあるかもしれないけど」

「勘違い？好きって勘違いする物なの？」

「する時も、あるかもね」

「ふーん。難しいものだな」

「そうだね」

ぐっと俺は伸びをする。

千里の方を向くと、千里いつの間にか俺の方を向いていた。

「そろそろ、帰ろうか」

「うん」

二人そろって百貨店のエレベータで地上に降り、駅へと向かう。

「今日は、本当にありがとな。嬉しかったよ」

「よかった」

「過去今まで最高の誕生日だったかもしれん」

「そうなるように、色々頑張ったもん」

「そっか。ありがと」

「どういたしましてっ」

そのまま千里と電車にのり、自分達の最寄り駅へと向かう。

楽しかった思い出が。

ひとつ。

そこに出来た気がした。

.....

5月12日、火曜日。

いつものように学校へ行き、千里にノートを返す。

自分の席へ行き、美恵の席を見るが、やはり今日もない。

俺が来たことに福岡が気づき、近づいてくる。

そのまま俺の席の前に反対向きで座る。

「よっ、昨日は楽しかったか？」

「ああ、サンキューな」

「あのケーキ美味かったよな」

「うむ。良い味出してた」

「あれさ、千里が作ったんだぜ。わかってたか？」

「えっ？マジ？」

「やっぱ気付いてなかったか。普通の一般人なら気付くと思うんだがな。

板チョコに書いてた字とか、どうみても千里だったろ？」

お前ノート毎日借りてんだから、それ位気付けよな」

「そうだったのか。どおりでアポロが転がりやすいと思った」

「着眼点がおかしいだろ。何でアポロなんだよ」

「いや、アポロがハートマークだったもんで」

「もう片方のハート、千里の元に行ってたことも気付いてたか？」

「え？そうなの？」

「お前本当何にもみてないな。あの飾り付けも千里がほとんどやったんだぜ」

「まじで？すげーな・・・」

「おかげで俺はひたすら折り紙切る係りにされたわ」

「いつの間にそんな事やってたんだよ」

「日曜の夜さ。店長に無理行って前日からセッティングさせてもらったんだよ。

店長もその日はそのルームお誕生日ルームだねって喜んでたけどさ」

「へえー。すげー手が込んでたんだな」

「お前さあ、普通あそこまでやってくれる子なかなかいないぜ？」

俺の彼女よりも尽くす子だぞ」

「味噌汁も作ってくれそうだよな。アサリ入りの」

「ケーキが作れるんだから味噌汁も作れるだろうな。って

着眼点がやっぱおかしいだろ？味噌汁の話なんてしてねえっつーの」

「福岡が前に彼女作ってくれそうだって言ってたじゃん」

「まあ言ったけど、あそこまで手のかかった誕生日、きっと俺の彼女なら

やってくれないぜ？千里だけの特権だぞあれは」

「そうなのか？俺も鼻が高いな」

「鼻が高いってまだ彼氏彼女になってねーんだろ？」

「うむ。でも、昨日告白されたぞ」

「まじで？成瀬は何て答えたの？」

「わからんって答えた」

「ぶっ。目嚙んで死んでしまえ」

「直ちに影響はない」

「影響でとるだろうが」

「そうとも言う」

「そうとしか言わん。しかし、マジで考えてやれよ。

じゃないと」

「じゃないと？」

「俺がもらうぜ」

「は？お前彼女おるだろうが」

「本命をサブにまわして、千里を本命にするだけの話さ」

「マジで言ってるわけ？」

「お前みたいにどっち付かずの行動されてる間に、

スパッと好きって言ってくれる方に心が動きやすい時期だぜ今は」

「・・・うーん」

「まあ、千里はお前だけのもんじゃないって事、よく覚えておけよな」

「・・・ふーむ」

そう言い残し、福岡は自分の席へ戻っていった。

本気で千里狙ってるのだろうか。

相手が相手だけに、どっちにも取れて微妙だ。

しかし、俺の為にあれだけ千里がやってくれてたんだな。

福岡の言う通り、あそこまで尽くしてくれる女の子はいないだろうな。

福岡が言うんだから、間違いないだろう。

・・・

福岡が千里と仲良く・・・か。

手をつないでる姿とか、考えたくないな。

少し、千里の事を意識し始めている俺を、自ら感じ始めた。

そんな気がした。

.....

その後、その週ずっと美恵が学校に来る事はなかった。

相変わらず俺は連絡先が分からないので、こちらから連絡を取ることは出来ない。

その週の金曜日、学校から帰ってたら、妹の愛美に声を掛けられた。

「おかえり、お兄ちゃん」

「ああ、ただいま」

「お兄ちゃんに手紙来てたよ」

「手紙？」

愛美から手紙を受け取る。

花柄の封筒。

「あれ」

誰からかも書いてないし、切手も貼っていない。

消印の後も残っている様子はなかった。

封をあけ、中に入っている便箋を取り出す。

『Dear 光一君』

俺は最後の便箋を取り出し右下を見る。

『From 美恵』

美恵からの手紙だ。

その最後の便箋の上の行に視線を移すと。

『ありがとう。さようなら』

どういう事これ？

もう一枚前の便箋に目を通す。

『光一君を信用していたのに、裏切られた気がした。

自分の思い違いだったって分かってるけど。

自分が頼れる所が奪われた。そんな気がした。

お母さんとお話しに行こうと、出向いた百貨店の屋上。

お母さんと少しでも距離が縮まる場所と思っていた所。

そんな場所で、光一君と千里ちゃんがキスしてる姿を見た。

きっと、お母さんは私に早くおいでって言ってるんだと思う。

だから。

心配してくれた光一くん到最后のお礼だけ言いたい』

．．．

なんか。

よくわからん。

とりあえず手紙を自分の部屋に持って行き、ドアを閉める。

パラパラと見る手紙の内容は、過去の事をいくつか書いてあるようだ。

俺との事やその時に思った事。

色々書いてる感じだ。

俺は自分のPCを起動し、自分が書いてるブログと比較して

どの日の事を書いているのか思い出しながら見ることにした。

さっきの文章見るからに、俺は美恵を傷つけてしまっているようだ。

俺は何処からずれていたのか。

何処から傷つけていたのか。

もう一度確認するために。

そして、次の一步を見つけるために。

今、見直さないといけない。

自分の歩んできた道を。

美恵との、思い出を。

11話「美恵を探して」

俺は美恵とであった始業式の日から、
今日までのブログを読み返した。
美恵の事。
千里の事。
そして福岡のライバル宣言。
色々あった。
美恵は俺を信用してくれ、俺を好きと感じてくれていたようだ。
しかし、百貨店の屋上で俺と千里のキスを目撃した美恵。
美恵はその姿を見て、唯一信用していた俺も、
自分の中で離れていくと感じたようだ。
その結果。
今一度、美恵からの手紙の一部を読み返す。
『きっと、お母さんは私に早くおいでって言ってるんだと思う。
だから。
心配してくれた光一くん到最后のお礼だけ言いたい。
ありがとう。さようなら』
この文章の意味は。
死のうとしている意味にしかとれない。
のんびりブログを振り返っていたが。
そんな事してる程時間が無かった事に気付く。
手紙の封筒には切手が貼られていないということは。
俺の家のポストに直接手紙を投入したという事だ。
そして、美恵が向かいそうな所は。
母親を見ていたと言っていた海に違いない。
百貨店の可能性も考えたが、俺との嫌な思い出がある所に行くとはいえにくい。
俺はちゃちゃっと私服に着替え、家を飛び出した。
美恵の最寄り駅まで急いで電車に乗って向かう。
電車の中で、俺のポケベルが鳴る。
まさかと思い、急いでポケベルを確認する。
『アシタヒマカナ？チサト』
．．．
千里からと分かった瞬間、ため息が出た。
美恵からの着信と期待した分、見た後の残念感が込み上げる。
そのままポケットへ押し込み、ぼーっと外を見ている間に、
電車は美恵の最寄り駅へと到着し、俺は駆け下りて海へ向かった。

防波堤を乗り越え、浜辺に降りる。

夕焼けが海に反射し、オレンジ色に見える海。

細々とさざなみの音色が聞こえる浜辺。

辺りを見渡すが人影はなく、歩けば歩くほど

俺の足跡だけが記憶されていく。

ここにはきていないのか。。。

自信有り気に来ただけあって、次何処探せば良いか考えていなかった。

百貨店の屋上。。。

行って見るか。

俺は海岸を後にし、百貨店の屋上へ向かう。

エレベータで上がり、屋上のあらゆる場所を探してみるが・・・

やはり見つからない。

完全に探し場所を失った。

自分の知識ではこれ以上思いつかない。

・・・

女性の意見を聞いてみたら分かるかもしれん。

俺は公衆電話を探し、千里へ電話を掛ける。

「はい、もしもし」

都合よく千里が電話に出た。

「俺だ」

「光くん？ベル見て電話してくれたの？」

「いや、ちょっと聞きたい事あってな」

「ん？どうしたの？」

「今日、家に帰ってきたら美恵から切手がはってない手紙が届いてな。

そこに、今から死ぬような事を書いてたんだ」

「ええ～！！めっちゃやばいじゃん！」

「それで、今美恵が行きそうな海岸や百貨店の屋上とか行って見たんだが、

見つからないんだ。どっか行きそうな所分からんかと思って電話した」

「う～ん・・・美恵ちゃんとはあまり話した事ないからなあ。

でも、光くんの家を手紙を入れに来たんなら、

わざわざ手紙を入れた後に自分の家の近くまで戻るかな？」

「んーむ・・・思い出の場所とかあるなら、戻ってくることもあるだろうな」

「そうだねえ。もし本当に死のうと考えてるなら、

高台が可能性高いんじゃないかな」

「そうだな。じゃあちょっとその辺探してみるわ」

「後は家に戻ってないか確認したんだよね？」

「えっ？確認してない」

「もしかしたら、ためらって家に戻ってる可能性もあるから、
そっちを確認してみるのもいいかも」

「そっか。じゃあまず家見にいった後で他探してみるわ」

「うん。私は光一くんの家の近所探すから、光一くんはそのまま
そっち側探してみて？」

「お、サンキュ。じゃあそうするわ。何かあったらベルしてくれ」

「わかった。すぐ探しに行くね」

「OK。じゃあまた後で」

受話器を戻す。

千里に電話して良かった。

一人で探すより二人で探した方が力強い。

俺は美恵の家に走って向かう。

あのオヤジが気に入らんが、いるかいないか位は分かるだろう。

福岡に案内してもらった道を思い出しながら、美恵の家にたどり着いた。

美恵の部屋と思われるカーテンは、相変わらず閉まっている。

俺は息を整え、インターホンを押した。

ピンポ〜ン。

数秒後、インターホンからカチッと通信がつながった音が聞こえた。

『はい』

あのオヤジだ。

「〇〇高校の長瀬です。美恵さんご在宅でしょうか」

『何用ですか』

「えっと、お見舞いに来ました」

『・・・今美恵は寝ているので、お引取りください』

「えっ？今いらっしゃいますか？」

『寝ているので、お引取りください』

「・・・わかりました。失礼します」

ガチャ。

インターホンの通信が途切れた音がする。

・・・

美恵は家に戻っている。

オヤジの言った事が嘘じゃないなら、あの部屋にいるはずだ。

少し、一安心した。

結局の所、無事家に戻ってくれたようだ。

しかし、いつまた外に出てくるか分からない。

俺は美恵の部屋と玄関が分かる程度に離れた場所で座り込んだ。

あっ。

千里に連絡しとかなきゃ。

辺りに公衆電話が無いか探す。

都合よく近くに公衆電話を発見。

立ち上がり、千里にベルする。

1 2 1 4 5 2 1 2 4 1 8 8 7 2 6 1 4 3 4 5 2 3 (家にいた見張っとく)。

これでよし。

定位置に戻り、美恵が出てくるのを待つ。

しばらくすると、ベルが鳴った。

『ヨカッタネ ワタシモイクネ』

家知らないはずだが、来れるのか？

しばらくして、またベルが鳴る。

『イエドノヘン？チサト』

住所なんて知らねえ。

近くの住所標識を見るが。

よく考えたら、美恵は勘違いしてるんだった。

千里と一緒にいる所をまた見られたら、ややこしくなりそうだ。

千里に来なくていいベルをした。

8 1 8 1 2 5 3 2 2 3 5 1 9 3 2 1 9 1 2 5 5 1 2 3 4 4 1 2 1 2

(ややこしくなるから来なくていい)。

これでよしっと。

俺はまた定位置で座り込み、こっそり監視する事にした。

...

しばらく時間が立ち、日も完全に落ちた。

街灯の明かりが小さな空間を照らし始める。

美恵の家に変化はない。

気合を入れて待ち伏せするのは良いが、いつまでこの状況が続くのだろう。

とりあえず明日は学校休みだし、一夜漬けで見張っておくか。

ぼーっとしながら美恵の家を眺める。

美恵の部屋の明かりはついていない。

本当にいるのだろうか。

本当に寝ているのだろうか。

そんな事を考えていると。

「光一くん」

後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り返ってみると、そこには来れるはずがない千里が立っていた。

「千里。お前どうやって来たんだ？」

「福岡くんとこの前来てたみたいだったから、福岡くんに住所聞いたよ」

「そうなのか。でも、来るなって言っただろ？」

「うん。だから、すぐ帰るよ」

千里は俺にコンビニ袋を渡そうとして来る。

「これ何？」

「お弁当だよ。光一くん、見てる間は動けないだろうから」

「あ・・・ありがと」

千里からコンビニ袋を受け取る。

「それじゃ、帰るね。また明日の朝来るね」

「えっ？」

「光一くん、ずっといるつもりでしょ？もし何かあったら、連絡してね」

「ああ・・・わかった。サンキュ」

「じゃあ、頑張ってるね」

千里は手を振り、通って来たであろう道に戻っていった。

千里・・・

俺の性格、完全にばれてるよな。

俺が帰らずに今日ずっとここにいるであろう事も予想済みか。

わざわざ福岡から住所を聞いてまで。

俺に弁当を渡す為だけに来るなんて。

これが。

千里の言っていた相手に何かしてあげたいという。

好きという感情から来る行動なのか。

千里は曲がり角に曲がる前、また俺の方を向き軽く手を振った。

俺もその姿を見て軽く手を振る。

千里は角を曲がり、姿は見えなくなった。

俺は受け取ったコンビニ袋の中身を確認する。

ミックスグリル風弁当に、お茶とコーラ。

眠気防止であろう刺激系タブレット。

弁当がやたら熱い件。

俺を探す時間を考慮して冷めない様、熱めに温めたのだろうか。

あとは小さな紙が入っている。

その紙を手に取り、広げてみる。

『Dear 光一くんへ 眠いだろうけど、頑張ってるね。

美恵ちゃんの事、話してくれてありがとう 千里より』

マメな奴だ。

弁当も俺の好きなタイプのものだし、コーラも好きだし。

俺の性格から好きなものまで全部お見通しって事か。

そしてこのやたら熱くてむかつく弁当も。

少しでも冷めないうちに届けるというまるでピザ屋の出前みたいな

精神も心得ているようだ。

しかし俺は猫舌だからすぐには食えないがな。

．．．

改めて思うが。

福岡の言う通り、千里は良い子だ。

細かい所に気が付くし、行動力もある。

わざわざ福岡に聞いてまで弁当届けるだけに来るか？普通。

そういや最近千里が書いてくれるノートの書き方も変わった。

テストに出そうなポイントは色鮮やかに分かりやすくしてくれている。

自分で見るノートというより、見せるノートのような書き方だ。

この前の誕生日の時だって、こんなのが良いついていう

ブレスレット買ってくれるし、ケーキも作ってくれた。

．．．

俺、尽くされまくってるよな。

逆に、俺は千里に何をしてやれてるだろうか。

何もしてやれてない気がする。

いつものようにおちよくって。

いつものようにノート借りて。

俺の何処が良いのか。

さっぱりわからん。

それに比べ、千里の魅力は絶大だ。

福岡が絶賛するのも無理はない。

もし福岡と千里が付き合うことになったら。

俺と千里の関係はどう変わるのだろうか。

千里と福岡が仲良く手をつないだり。

キスをしたり。

そんな想像はしたくないな。

なんか。

むかつくというか。

．．．

なんだろ．．．

あの笑顔は、自分以外、誰にも見せたくないかも。

ずっと側にいてほしい．．．かも。

俺は熱い弁当を取り出し、頬張り始める。

うまし！

ちらちらと美恵の家の様子を伺いながら、飯を食いきった。

その後、夜9時ごろだろうか、美恵の部屋の明かりがついた。

美恵はどうやら無事なようだ。

しかしあんな事を書いていた以上は今日何するかわからん。

美恵の部屋の様子を伺いながら、ぼーっとする。
夜の12時頃、部屋の明かりは消えた。
家から出てくる様子もなく、就寝に入った様だった。

．．．

俺は何故ここにいるのか。
ふとそんな事を考える。
それは、美恵が心配だからだ。
美恵は俺の事が好きと手紙に書いていた。
俺は美恵の挙動が気になって、話しかけたりしていた。
それは、心配だったから。
美恵はそんな姿を見て、信用してくれた。
だから、俺に今まで誰にも言わなかった事を打ち明けてくれた。
信用するという事が。
好きという事に繋がるのだろうか。
もし俺じゃなくて福岡が心配して話を聞いていたら。
同じく福岡を好きという事に繋がったのではないだろうか。
つまり、それは誰でも同じ結果になったという事にならないだろうか。

逆に千里について考えてみる。
福岡と千里が元々仲良くて遊びに行ったりしてた場合。

．．．

すでにしてるよな。
って事は、福岡と俺という存在がいた中で、俺を選んだという事か。
．．．なんか。
美恵の好きという気持ちは。
違うんじゃないだろうか。
そんな事を考えながら、何も変わりの無い家を見つめながら。
一夜を過ごした。

．．．．．

「．．．くん．．．」
誰かの声が聞こえる。

眠い．．．

俺は寝ていたのか。
目をゆっくりと開ける。

「光一君．．．」
そこには、美恵が中腰になって俺を見詰めていた。
「．．．おはよう、美恵」

「どうしてここに・・・」

俺は目を擦り、美恵を見詰める。

「美恵こそ、何であんな手紙を送ったんだ」

「それは・・・」

「俺はお前の事が気になって、ずっと探したんだぞ。

幸い父親から家にいるって聞いたから、こうやって

また変な事考えて家を飛び出さないように見張っていたのだ」

「・・・ごめんなさい」

「今から何処に行こうとしたんだ？」

「・・・散歩です」

「ほう。それじゃ、ちょっと喫茶店でも行こうか」

「うん・・・」

俺は立ち上がり、美恵と並んでゆっくり歩いた。

「で、喫茶店ってこの辺何処ある？」

「えっと、駅の近くに行けば」

「んじゃ、そこ行こうか」

「うん」

二人は駅の方に向かう。

「あっ、ちょっと待って」

俺は近くの公衆電話から千里へベルを打つ。

7 2 4 2 2 1 4 3 4 1 8 8 6 1 5 1 3 2 4 4 2 3 9 3

(見つかった話してくる)。

これで良しと。

「お待たせ、行こうか」

「うん」

朝焼けがまぶしい海岸を見ながら。

二人は喫茶店へと向かった。

店の中に入り、手際よくモーニングを注文する。

「さて・・・話を聞こうか」

「・・・うん」

12話「あの時の真相」

店の中に入り、手際よくモーニングを注文する。

「さて・・・話を聞こうか」

「・・・うん」

「まず、昨日の件についてだけど、思い止まってくれてよかったよ。

あの手紙を見てから、色んな所に探しに回ったんだぜ。

どうしてああいう気持ちになったのか、改めて教えてほしいんだけど」

美恵は一息ため息を付いた後、語り始めた。

「・・・先週の土曜日、バイトから帰ってきた後、

お父さんがリビングでアルバムを開いてて、お母さんとの思い出を振り返ってたようで。

お父さんに何て声をかけて良いか分からず、そのまま自分の部屋に行ったの」

「うん」

「しばらくして、お父さんの鳴き声が自分の部屋からも聞こえた。。。

そんな声を聞いていられなくなって。

私はお父さんのいるリビングに行ったの。

お父さんは私が降りて来た事を気づいてなかったみたいで。

私は泣いてるお父さんの前に座ったの」

「うんうん」

「泣いてるお父さんに、私はずっとお父さんの側にいるよって声を掛けたの。

そしたら、お前はお母さんのかわりにならないって怒り出しちゃって・・・

でも、少しでも近づけるように頑張るって言ったんだけど。

さらに怒り出しちゃって、叩かれたり、けられたりしちゃった」

「・・・」

「お前を見るだけで思い出すから話しかけるなって言われて。

当初は私がお母さんに近づけるように頑張るって言った事を期待してくれてたみたいだけど、

全然進歩してないしお前を見る度に思い出すから出て行けって言われて。

いつものように外でお母さんとお話した後に戻ってきたの。

そしたらお父さん、家になくて、その日帰ってこなかった」

「そっか・・・」

「それから日曜日、お父さんが帰って来て昼間からずっとお酒飲み始めたの。

夜、お父さんが好きなお料理作って、食べてみてほしいって言ったら

いらないうって言っただろって言われて、テーブルに並べたお料理はたかれちゃった。

拾っていたら、お前を見てたらむかつくんだって後ろからけられちゃった」

「・・・」

相変わらず美恵の話は深刻だ。

何て言ってやればいいのか言葉が浮かばない。

店員さんがモーニングを持ってくる。

美恵は目の前に置かれたコーヒーにミルクを入れ、

軽くグラスを持ってストローで啜る。

さっきは目に付かなかったが、腕には絆創膏がいくつか貼ってある。

「その腕の傷は？」

美恵は自分の腕に視線を移し。

「これは、けられた時に割れたお皿で切っちゃいました」

「まじか・・・」

「・・・光一君って、千里さんとお付き合いしてたんだね」

・・・

月曜の話だな。

キスしていた事を言いたいのだろう。

「いや、付き合っていないよ」

「でも・・・」

「どうしてあの時、美恵は逃げたんだ？そもそも、何であそこに？」

「・・・あそこ、夏にはビアガーデンをやってて、家族で良く行っていたの。

あの日は雲ひとつない快晴だったから、屋上で見たら星が

もっと綺麗に見えるかなと思って。

そしたら、光一君達を見つけて・・・」

「うん」

「私・・・手紙にも書いたように、光一君の事が好き。

今まで、光一君は誰とも付き合っていないと思ってた。

でも、千里さんとああいう姿を見て、どうすればいいか分からなくなって。

気づいたら、走って逃げていたの・・・」

「そっか・・・」

美恵は、コーヒーが入っていたグラスから、俺の方に視線を戻す。

「逆に、聞かせてほしい。。

どうして、付き合っていないのに・・・キス・・・したの？」

「えっと。。。」

なかなか痛いつっこみ。

千里だけでなく、美恵にもつつこまれるとは思ってもいなかったわ。

ちゃんと言った方が良いよな・・・

「あの日、俺の誕生日でさ。

あの百貨店の近くにあるカラオケ屋で祝ってもらった後、

千里が夜景見たいって言うから、あそこに行ったのよ。

そしたら、千里がキスして来てね。

丁度その時に美恵がいたって感じかな」

「そっか。。。私、光一君の誕生日知らなかった」

「うん、言ってなかったよな。学校来てたら言おうと思ったんだけど。

今になってごめんな」

「うん・・・」

美恵はまたコーヒーが入ったグラスに視線を落とす。

「千里さんと光一君・・・お似合いだと思うよ」

「そか？」

「うん。私あんまり学校行ってないけど、二人楽しそうだもん」

「うーん。まあ、1年からの知り合いだからな。

でも、美恵と話してる時も俺は楽しいぞ？」

「・・・私は千里さんみたいにノリが良い訳でもないし。

千里さんに比べたら、全然だと思う」

「そんな事ないと思うが・・・

ねえ、俺の事好きって言ってくれたけど、何処が好きとか、言える？」

「好きな所・・・ですか」

「うん」

「光一君は唯一、私を本当に心配してくれた人。

こんな話もちゃんと聞いてくれるし、私が泣いてる時はずっと何も言わず側にいてくれる。

いっぱい、光一君から元気もらったよ。

そんな優しい光一君を・・・私は好き」

「なるほど」

やはり、優しくされたから好きになったって事か。

って事は、俺じゃなくても同じ結果になったって解釈で良いかな？

「なあ、思うんだが。相手が俺じゃなかったとしても、

例えば福岡だったとしても、同じ行動をしていたら

福岡の事を好きになっていた気がするんだが、どうだろう？」

美恵はその質問に対し、ちよっぱやで俺に視線を向けた。

「どうしてそんな事聞くの？」

「いや、美恵の好きっていうのは、恋人になりたいとかいう好きじゃなくて、

人として好きっていう意味なのかなと思って」

美恵は首を横に振る。

「光一君だからこそ、あのタイミングで抱き締めてくれたり、

声を掛けてくれたり、今日みたいに家の前で見ててくれたり

したんだと思う。

もし違う人なら、まったく同じようにしてくれるとは限らないし、

そのどれかひとつでも欠けたとしたら、私は好きになってなかったかもしれない。

光一君の全ての行動があったからこそ、私は好きになったと思う」

「・・・なるほど」

「光一君じゃなかったら、好きになる事は無かったと思う」

「・・・」

うーむ。

何か追い討ちの一撃をくらった。

しかし、その理論がよくわからん。

「なあ、今更の質問になるんだが。好きって何だと思う？」

「えっと。。。」

美恵は少しの間考え込んだ後、話し始める。

「自分の足りない所を補える所だったり、

自分がしてほしい事をしてくれる所だったり、

二人で一緒にいることで、楽しく過ごせたり・・・

何って言われると、表現が難しいけど、そういうのもあると思う」

「ふむ。自分が頭の中で完成イメージとしているジクソーパズルに、

自分は持っていないパーツを持ってる人を好みと思い、

二人一緒になることで1つのジクソーパズルが完成する相手を好きになる。

という感じだろうか？」

「多分。そんな感じだと思う」

「ふむふむ」

なんとなく分かった気がした。

ハートの欠片のようなアクセサリがあり、

二人がもっているアクセサリを重ねることで1つの形になる。

1つの形になる事が最終目的である人間の本能は、

ぴったり重なるであろう欠片を持ってる人を好きと思う。

それが好きという感情のメカニズムなのかもしれん。

「そういえば、どうして昨日あんな手紙を出したんだ？」

美恵はため息を小さくした後。

「・・・おとつい、自分の部屋にいた時、焦げ臭い臭いがしたので、

お父さんが料理でも作ってるのかと思ってリビングに下りたの。

そしたら、お父さんが灰皿に写真を入れて次々と燃やして・・・」

「写真？」

「お母さんとの思い出が詰まったアルバムから全部写真を取り出して、

次々に燃やしてたの・・・

すぐに止めに入ったんだけど、お前も燃やしてやろうかって

ターボライターを私に向けて、少し火傷させられた・・・」

「おいおい・・・大丈夫か？残っていた写真は守れたの？」

「うん。お父さんはお前が持ってる写真も出せって言われて、私の部屋に押し入り、写真を探し始めたの。必死に止めたんだけど、財布や鞆、机にあるもの殆どが見つけれられて燃やされちゃった」

「そうなのか・・・」

「全てを否定された気分になって、最初は必死に止めたんだけど、何しても突き放されて部屋も荒らされ、絶望感で反応出来なくなって。どんどん荒らされていく自分の部屋を見届けるしか出来なくなってた」
「・・・」

こんな話をしているのに今日の美恵は目が潤みながらも泣かない。もう、泣きたくても泣けないほど枯れてしまったのか。死のうとしていただけあって、泣く事が出来ない程、感情が限界を超越しているのだろうか。

「それから、1夜ずっと寝れずに考えてた。どうしてお父さんがこんなことしたのか。きっと、これはお母さんが早くこっちにおいでって言ってる様な気がして。決心した・・・つもりだった。。。」

「つもり？」

「うん。光一君にはさよならを伝えておきたくて手紙を書いたの。その後、朝になって光一君の家に入れに行って、光一君がたこ焼きくれた所の公園に向かったの」

「何故に公園へ？」

「あそこは、昔お母さんがよく連れて行ってくれた公園なの。そして、あのブランコに私が乗ったら、お母さんが後ろから押してくれた場所なの」

「それであの公園にこの前いたのか」

「うん。私はあの公園のブランコに座って、しばらく思い出に耽ってたら、子供をつれたお母さんが遊びに来て、私の子供の頃してもらったのと同じように子供を乗せたブランコをお母さんが押してたの。楽しそうなお母さんと子供の姿を見て。お母さんは本当に私が死ぬことを望んでいるだろうか不安になって」

「・・・望んでないだろうな」

「そのお母さんに聞いてみたの。

そしたら、詳しく聞きたいって親身になって聞いてくれて。私のお母さんは、私が元気で幸せになる事を常に思って今まで育てたんだろうって。

前のお父さんも事故で亡くなった時、人一倍お母さんは頑張って

今まで私を育ててくれた。

どれだけ苦勞をしても私の幸せと、笑顔を見届けたい為に頑張ってたんだって。

今、お母さんは物理的に私を守ることが出来なくて悔しい思いをしてる。

ここで私が負けて死んじゃったら、お母さんは悔やんでも悔やみきれないだろうって」

「・・・そうだろうな・・・」

「今のお父さんにとっても、自分の経験にない初めての体験で

どうすれば良いのか悩んでる。

色々な対策をやってみて、自分が次のステップに進むための道を探してる。

その対策のひとつとして、執着して前に進めない自分を進めるために

今までいっぱいしまった思い出を振り返って立ち止まらないように

見えなくしようとしたんじゃないかって」

「・・・」

「あとね、神様は乗り越えられない試練は与えないからと。

乗り越えるために試練はあるんだよって言われて。

乗り越えた先に、お母さんが望んでいる幸せはあるから、

ここであきらめちゃダメって言われたの」

「そうだな。お母さんに本当の幸せな姿を見せて上げる為にも、

美恵は生き続けて幸せになる必要がある」

「うん。それを言われて、思い止まった。

もうちょっと、頑張らなきゃダメだと思った」

「そうだな。俺も協力するから、あきらめちゃダメだ」

「ありがとう・・・」

「美恵、多分俺が思うには、お父さんも少し一人になったほうが

良いと思うんだ。

今美恵を見ると、どうしてもお母さんの事が忘れられないし、

一人で考える時間が必要だと思う」

「そう・・・なのかな・・・」

「それに、いくら頑張ろうと思っても、美恵も相当な精神的苦痛を

耐え切れる限界に来てるから、美恵の為にも、お父さんの為にも、

一度距離を置いたほうが良いと思うんだ」

「でも・・・」

「親戚に一度今の現状を話して、そこからしばらく通学したらどうだろう？」

「うーん・・・」

「この辺で親戚って、誰か住んでない？」

「私のおばあちゃんなら、いるかな」

「OK。そこに今から行こうぜ。な？」

美恵は考え込む。

気持ちが切り替わった事は良いのだが、俺はエスカレートしている現状と

美恵の精神状態の限界を一旦開放してやる事が最優先と考えた。
現状では冷静な判断が直ぐに保てなくなる可能性の方が高い。
他の人が関与する事で、二人の仲が悪くなる可能性はあるが、
美恵が死んでしまっただけでは意味がない。

しかし、関与する事で守ってくれる可能性が高く、
父親が正常な精神状態に戻れば仲良く生活出来るようになり、
美恵もこれ以上の苦痛を受けずにすむかもしれない。
未来に希望を残し、今の美恵を守るのが先決と考える。

「俺は、美恵を守りたい。だから、安全に逃げる事が出来る道も、
今作っておくべきだと思うんだ」

「・・・わかった。光一君がそういうなら、そうする」

「んむ。そうしよう」

「・・・うん。心配かけて、ごめんね」

「美恵が生きていて本当に良かったよ。」

お母さんが亡くなって、美恵やお父さんが悲しんでるように、
美恵がいなくなると、俺だって凄く悲しくなるぞ。

俺はお前を守るから。

美恵も、諦めないで何でも相談してほしい」

「うん。ありがとう」

「んじゃ、おばあちゃんの家行く前に腹ごしらえをまずしようぜ」

手がつけられていないモーニングを指差す。

「うん。光一君優しいね。本当に相談して良かった」

「次何かあった時、俺の了解なく勝手に行動したら、
学校で俺と福岡の昼飯1年間パシリに行かすから覚悟しとけよ」

「パシリ・・・」

「嫌なら、ちゃんと言えよな。」

手紙一方的に投函とか、反則だからな」

「ごめんね」

「ベル番だって教えてるんだからさ。入れてくれたら、
飛んでくるから」

「うん。わかった」

「んじゃ、このさめさめトースト食っちまおうぜ」

「うん」

冷えたトーストを口に押し込む。

だが、ミミの部分は嫌いなので綺麗に残す。

コーヒーを飲んで一呼吸。

美恵もマイペースで食べきる。

「んじゃ、行きますか」

「うん」

伝票をそのまま手に取り、会計する。

美恵も財布を広げて出そうとするが。

「良いよ。今日はおごっとく」

「ありがとう」

「んじゃ、行こうか」

「うん」

喫茶店を出て、美恵に場所を聞く。

そんなに遠い場所ではなく、4つ隣の駅らしい。

俺達は電車に乗り込み、おばあちゃんの駅へと向かった。

.....

おばあちゃんの家に着き、インターホンでおばあちゃんを呼ぶ。

急に訪ねて来た事について、おばあちゃんは驚いていたが、

父親の事と冒頭に出ただけで深刻な話と察してくれたのか、

すんなり中に入れてもらった。

おばあちゃんは客間へ案内してくれたので、そこに座る。

美恵と俺は奥に座り、おばあちゃんは入り口の手前に座った。

その後、美恵は言いにくそうにしていたので、俺が変わりに話しを切り出す。

母親がなくなった後からの父親の変化や、

美恵が虐待を受けている事。

それでも自分が変われば父親の態度も変わってくれると信じて

今まで尽くしてきた事も。

しかし、もう精神的に限界が来ている事を話した。

そして、説明を終えた後、俺はおばあちゃんにお願いをした。

「このまま父親の元で生活すれば、また美恵はいつ

精神的にまいってしまってもおかしくありません。

父親が元に戻るまで、ここに住ませてもらえませんか？」

美恵はずっと下を向いたまま俺とおばあちゃんの会話を聞いている。

おばあちゃんも真剣そうな顔で、美恵を見詰める。

ひとつも口を開かない美恵に、おばあちゃんは話しかけた。

「美恵ちゃんは、どう思ってるんだい？」

「・・・」

俺も美恵からの言葉を待つ。

自分の意思で、父親と離れる決心をしてほしいが・・・

1分ほど考えた上、美恵は口を開いた。

「やっぱり、お父さんと一緒にこのまま過ごしたい」

「えっ？どうして！？」

つい俺は突っ込んでしまう。

あれだけ精神的にもまいてるはずなのに。

「お父さん、好きだから。昨日あった人も、お父さんは
変わろうとしてるかもって言ってたし。

私がいなくなったら、本当にお父さんは何も残らなくなる。

そうなると、お父さんが今度、私と同じ思いをするかもしれないから」

「うーん・・・」

こんな事言うとは。

どうして自分はアレだけひどい目にあっているのにこうなのだろうか。

好きという感情は、自分の辛さをも超越するのか？

死にたいと思った程の気持ちは何処に行ったのか？

俺はおばあちゃんの返答を見守る事にした。

おばあちゃんは美恵への視線をはずすことなく、口を開いた。

「美恵ちゃん。何も逢えなくなるなんて言ってないんだよ。

お父さんが逢いたいと思ったら、こっちに来てもらえば逢えるし、

美恵ちゃんが逢いたいと思ったら、家に戻って良いんだよ。

お父さんもね、今色々考えたい時期だから、

そっと考えさせて上げると、気持ちの切り替えが出来る事だってあるんだよ。

少しの間、ここに泊まって考えさせてあげたらどうかな？」

「・・・」

美恵は考え込む。

「お父さんにはおばあちゃんから話しておくから、

心配しなくて良いよ」

おばあちゃんが追撃する。

美恵は少し考えた後、顔を上げた。

「戻りたくなったら、戻って良いんだよね・・・？」

「もちろんさ。自分の家だからね」

「・・・分かった」

「そうかい。分かってもらえて良かったよ」

おばあちゃんは美恵の言葉を聞いてほっとしたようだ。

あえて、戻りたかったら戻って良いという発想は思いつかなかったな。

しかし、その言葉を鵜呑みに戻られても良い事はない気がするが・・・

「お父さん、今家にいるかい？」

「うん。起きてTV観てた」

「そうかい。じゃあ、お父さんに電話しておくね」

「うん・・・」

おばあちゃんは電話する為、客間を後にした。

俺と美恵だけがシーンとした部屋に残される。

「美恵、良かったな。おばあちゃんに相談して」

「・・・お父さんが何て言うか・・・」

「そうだな・・・」

美恵はやはりお父さんが気になっているらしい。

気になっているというか、お父さんの反応がどうでるか。

それが、気になっているんだろうな。

無理も無い。

下手をすれば逆切れされるパターンだ。

しかし、おばあちゃんがいるだけあって、

簡単に変な行動は取れないだろう。

10分程過ぎただろうか。

おばあちゃんが部屋に戻って来た。

おばあちゃんはさっき座っていた場所に腰掛け、

お茶を一口飲んだ後、こちらに視線を移した。

「お父さんと話してきたよ。こっちでしばらく居ても良いってさ」

「・・・そっか・・・」

美恵はうなずく。

「美恵、何も持って来てないし、一旦取りに帰る？」

「うん」

「それじゃあ、私もついていくよ」

おばあちゃんもついて来てくれるようだ。

「んじゃ、取りに戻ろうか」

俺は立ち上がり、玄関へ向かう。

俺に続き、美恵もゆっくりと立ち上がる。

「準備してくるから、ちょっと待っておくれ」

おばあちゃんはそう言って、別の部屋に移動した。

俺と美恵は、玄関を出た所でおばあちゃんを待つ。

「光一君」

「ん？」

「ありがとうね」

「ああ。気にすんな」

「・・・うん」

しばらくして、玄関から出てくるおばあちゃんの姿が見えた。

家の鍵を閉め、こちらに向かってくる。

「さて、行こうか」

「うん」

俺達は、美恵の荷物を取りに行く為、再び美恵の家へ向かった。

13話「もうひとつの気持ち」

おばあちゃんのゆっくりな歩調にあわせ、俺達は駅へ向かった。

切符を買い、美恵の最寄り駅行きの電車に乗り込む。

テッテテッテテテッテッテ・・・

俺のベルが鳴る。

ポケットから出し、内容を見る。

『ヨカッタ アトデレンラクシテ』

名前が入ってないが内容的に千里だろう。

ポケベルの限界が15文字だから名前のスペースがなかったようだ。

「千里さん？」

「ん？」

美恵が聞いてくる。

「ああ、さっき美恵と会えたってベル打ったから、

良かったって返事来た」

「千里さんにも心配かけちゃってたんだね・・・」

「美恵が見つからなかったから、千里にも探してもらうように言ったんだ。

内容が内容ただだけに、緊急事態だったんでな・・・

でも、美恵が再び元気になってくれれば、千里も喜ぶよ」

「うん」

「そういや、美恵の事を千里に話してしまったんだが、

今更ながらごめんな」

「うん。大丈夫」

今の美恵は、朝に比べて少し元気そうに見えた。

しばらくして、美恵の駅に到着し、家へ向かう。

相変わらずおばあちゃんがトロトロなので、その歩調に合わせる。

さっき行った喫茶店。

さっき通った海岸。

少し前の話なのに。

美恵への安心感はかなりあがった。

やはり身内が仲間になってくれた事は大きい。

家にいる父親の反応が凄く気になるが・・・

おばあちゃんが居るので大丈夫だろう。

そんな事を考えているうちに、美恵の家へ到着した。

美恵は家の鍵を開け、扉を空ける。

「それじゃ、取って来るね」

「ああ。俺はここで待ってるよ」

「私は、立ってるの辛いので少し上がらせてもらうかの」

おばあちゃんと美恵は、家の中に入っていった。

立ってるの辛い・・・ねえ。

まあそれももちろんあるだろうが、美恵の保護がメインの目的だろう。

俺はしばらく玄関前で待つ。

.....

遅いな・・・

千里にベル返しとくか。

今日待ち伏せしてた場所の公衆電話に行き、千里にベルを打つ。

114544047141940391233393（後でまた連絡する）。

これでよしっと。

再び美恵の玄関前に戻る。

ちょっばやでベルがなった。

『ワカッタ マッテルネ チサト』

そういや今日暇？とかベル入ってたよな。

千里暇なんだろうな・・・

それにしても、俺、結構待たされてると思うんだが。

かれこれ30分位だろうか。

と思ってる矢先。

ガチャ。

家の扉が開く。

おばあちゃんがゆっくりと出て来た。

「もう少しで美恵ちゃんも来るからね」

「はい。お父さんは、どんな感じですか？」

「少し活（カツ）を入れといたから、きっと大丈夫だよ」

「そうですか」

活入れたってどんなん何だろう。

まあ、大丈夫って言ってるし、今後の行動で分かるか。

しばらくして、美恵も玄関から出てくる。

大きめなボストンバッグを肩からかけている。

「おまたせ」

「結構時間かかったな」

「うん。色々詰め込んでたのと、後お父さんに手紙置いてきた」

「手紙？」

「うん。お父さんに心配かけないように」

「そっか。お父さん、喜んでくれるといいな」

「うん」

「ところで、その荷物重そうだな。持とうか？」

「ううん。大丈夫だよ」

「俺手ぶらだし、気にすんな」

美恵からバッグを強制的に取り上げる。

俺の善意に答えるように、取り返そうとはしない。

「ありがとう」

「んじゃ、行こうか」

「うん」

俺達は再びおばあちゃんの家に向かって歩き始めた。

「お父さん、寂しそうだった」

「ん？」

美恵が小さな声で話し出す。

「お父さんの気持ちが整理出来たら、直ぐまた戻ってやるといいよ」

「うん・・・」

「美恵も、明るい笑顔を見せれる様になる為にも、

ちゃんと学校来て普通に生活しような。

一人で家に居たら、暗くなっちゃうから」

「そうだね。ちゃんと学校行くよ」

「うむ。きっと出席日数かなりピンチだぞ（笑）」

「うん。。。久しぶりに学校行くと、全然授業わかんないよ」

「だろうな。まあ俺は毎日行ってても分からんがな」

「光一君はお昼寝してるもんね」

「昼寝じゃないぞ、瞑想をして精神統一修行してるのだ」

「修行してるの？」

「うむ」

「何で？」

「神に近づくためだ」

「神様になりたいの？」

「うむ。俺は神になる」

「光一君は、もう神様だよ」

「え？」

「光一君は私にとって、神様だから」

「・・・」

俺、神った。

今、神になった。

「頭が高いわあ！控えおろう！このプ○マ様が目に入らぬか！」

俺が着てるTシャツの胸元にある刺繍を指差す。

「・・・入らない・・・」

「素で答えられても困る。相変わらずボケ殺しだな」

「光一君のボケ・・・難しいよ」

「ははあ～って言っときゃいいのだ」

「ははあ～」

「遅いわ！」

「うーん。残念」

俺達をみておばあちゃんが笑い始めた。

「あははは。久しぶりに笑わせてもらったよ。

いつもそんな話ばかりしてるのかい？」

「俺はいつもこんなもんですよ」

「そうかいそうかい。所で、二人仲良い様だけど、

お付き合いしてるのかい？」

「いえ・・・友達です」

「友達かい。仲が良いからてっきり恋人かと思ったよ」

「はは・・・」

痛い所を突っ込まれて返事に困るわ。

そんな話をしている間に、駅に到着。

俺はおばあちゃんの家に行く切符を買おうとする。

「光一君。ここでいいよ」

「ん？」

「私、もうおばあちゃんの所行くだけだから。

もう大丈夫だから」

「そっか。それじゃ、また学校でな」

「うん。昨日から待っててくれてありがとう」

「いってことよ。少しでも元気な姿見れて良かったよ」

「元気だすね」

「おう。たのんませ」

「うん」

「また学校でね」

「学校でね」

俺は改札前で、美恵とおばあちゃんを見送る。

遠くから美恵は手を振り、俺も姿が見えなくなるまで、

改札前で二人を見送った。

「さて・・・」

俺はどうするか。

そういや、さっき千里が待ってるって言ってたな。

電話してやるか。

俺は公衆電話を探し、千里の家に電話する。

トゥルルルルル・・・

ガチャ。

「もしもし、中山です」

千里の声だ。

「おっす、オラ悟空」

「・・・私わかめちゃん」

「漫画の種類ちゃうだろうが」

「だって、出てこなかったんだもん」

「じゃあ俺のびたくん」

「いちめられるよ？」

「・・・じゃあ、ジャイアンでいいや」

「ぴったりだね」

「どういう意味だそれは？」

「いつもいちめてばかりでピッタリだよ」

「そうか。じゃあこれからもいちめてやるからな」

「私はもういい～」

「お楽しみはこれからだぜ」

「あ、光一くん。美恵ちゃんどうだった？」

話ばっさり変えられた。

さすが千里だな。

「おばあちゃんの所に引き取ってもらったよ」

「そうなんだ？ねね、光一くん今から時間ある？」

「ん？あるぞ」

「じゃあちょっと直接聞くよ～。何処にいるの？」

「○○駅にいるぞ」

「じゃあそっちに今から行くね」

「いや、俺駅前にいるから、そっちいくわ」

「ありがと。じゃあ来る頃見計らって駅に行くね」

「OK」

「それじゃ、また後でね～」

「あいよ」

ガチャン。

受話器を公衆電話に戻す。

そのまま千里の家の最寄り駅へ向かった。

・・・・・・・・

まったくもって遅い。

駅について15分位経過だ。

時計をチラチラみながら待っていると、

ようやく千里の姿が見えた。

千里も俺の事に気づき、手を振りながら駆け寄ってくる。

「ごめ〜ん。待たせちゃった？」

「5時間位待った」

「電話もらってから5時間も立ってないよー」

「俺の体内時計は5時間を指してるぞ」

「私の体内時計は2分位しか立ってないよ」

「体内時計狂いすぎだろそれ」

「光一くんの方が激しくずれてるよ」

「ま・・・いいや。行こうぜ」

「うん。おなかすいたよ〜」

「そういやもう昼か」

「ご飯食べながら話そ？」

「そうするか」

「うんうん」

二人横に並んで歩き出す。

近くのファミレスに足を運んだ。

定員さんに案内され、4人掛けの席を進められた。

そのまま俺達は対面に座る。

1つのメニューを二人で共有する。

「俺、ミックスグリルでいいわ」

「じゃあ、私カルボナーラにする」

「OK」

定員さん呼び、二人分の注文をした。

目の前に出された水を軽く飲み。

「さてさて、昨日はサンキューね」

「うん。あれからずっと寝ずに起きてたの？」

「いや、寝てた。知らぬまに」

「あらら。でも、風邪引かなくて良かったね」

「外はぬくいからな。冬だったら凍死するわ」

「冬でも待ってた？」

「うーん。どうだろうな」

「光一くんなら何が何でも待ってそうだけど」

「どうかね。俺も人間なんで出来る範囲ってのががあるが」

「うんうん。美恵ちゃんとはどうやって会えたの？」

「俺が寝てたら美恵が目の前に立っててね。」

散歩しに外に出た所を発見してくれたみたいで」

「そっかあ。会えて良かったね」

「んむ。それから喫茶店でモーニング食いながら、

今までの話を聞かせてもらった。

お母さんの写真を燃やされた事がきっかけで、

死にたいと思ったらしい。

でも、たまたま近くにいた人に励まされて、思い止まったようだ。

その後、自分の家に戻ったみたいよ」

「引き止めてくれる人がいて良かったね。

私も美恵ちゃんの話聞いて凄く心配したよお」

「それから美恵のおばあちゃんが近くにいるって言ったから、

おばあちゃんに会いに行ってるね。

しばらく泊めてもらうように話して、OKでたのよ」

「お父さんは大丈夫だったの？」

「ああ。おばあちゃんが電話で活いたらしく、大丈夫だった」

「じゃあこれからはおばあちゃんの家で住む事に？」

「しばらくは。父親が普通に戻るまでいつまでかかるのかは分らんが、

とりあえず美恵にとって逃げる場所が出来た事は大きい。

精神的にも、かなり助けてくれるだろうし、大きな心配はなくなっただろうね」

「良かったね。おばあちゃん引き取ってくれて」

「だな。その後美恵の家で服とか取りに戻ったんだけど、

おばあちゃんに二人付き合ってるの？って聞かれて焦ったわー」

「そうなの？何て答えたの？」

「友達ですって答えたよ」

「そっかあ」

「うむ。いきなりの質問でびびるわ。仲が良い様に見えたんだってさ」

「ふーん」

「荷物取りに帰った後、おばあちゃんの家まで送ろうとしたけど、

ここでいって言うから、駅でばいばいして今に至るって感じかな」

「そっか」

「そそ。昨日はどうなるかと思ったけど、少し安心したよ」

「そうだね」

何か千里の反応が鈍い。

俺なんか悪い事言ったか？

「何か、機嫌悪い？」

千里は横に首を振る。

「別に。普通だよ」

「そっか。なら良いんだけど」

声のトーンもいきなり下がってるんだが。

何だ？

「ねえ、光一くん」

「ん？」

「美恵ちゃんの事・・・本当はどう思ってるの？」

「どうって？」

「好きとか・・・」

これが気になってたのか。

そういや、おばあちゃんの付き合ってるのかどうかの質問の話からいきなりトーン変わってたな。

ここは、ちゃんと言っておくべきだな。

「うーん。守ってやりたい人かな。

今日、本人にも俺が守ってやるって言ったし。

でも、好きとかそういうのじゃないと思う」

「守ってやるって。言ったんだね・・・」

「ん？ああ。父親からだぞ？」

「うん」

何か。

墓穴掘った臭いぞ。

ますますトーンダウンしてる。

「千里・・・怒ってる？」

「・・・ううん。怒ってないよ」

思いっきり怒ってる口調なんですけど。

まいったなこりゃ。

「お待たせしました」

店員さんが料理を運んでくる。

「んじゃ、食いますか」

「うん」

何か、険悪なムードで食べる食事。

チラチラと千里を見てしまうが、千里は俺を見ない。

何か話しを切り出したいが、お前今しゃべったら

どうなるかわかってんだらうなという雰囲気漂っていて

なかなか言葉が出ない。

そんな中、千里の方が先に口を開く。

「ねえ、光一くん」

「ん？」

「美恵ちゃん、凄く光一くんの事必要としてるから。

ずっと、一緒にいてあげたほうがいいよ」

「ん・・・」

どういう意図で発言してるんだらうか。

「それ、どういう意味？」

「そういう意味だよ」

「・・・うーん」

意味わからん。

だからどういう意味やねん。

「意味わかんないんですけど」

「・・・」

千里は肩で大きくため息を付いた。

「美恵ちゃんは、私に比べたら比べものにならない位、

光一くんを必要としてるよ。

だから、美恵ちゃんの側にいてあげて」

「その言い方、千里も俺の事必要としてたって事？」

「・・・全然してないよ。私、死にたいなんて思ってもないし」

「千里が死にたいとか言い出したら困るぞ」

「どうして？」

「いや、ノートとか借りれなくなるし、困るじゃん？」

「・・・」

千里は下を向き、持っているフォークとスプーンが震える。

力いっぱい握り締めている事がわかる。

これはまずい。

「それにさ、ノートだけじゃないぞ。千里がいなくなったら、

おちよくる人もいなくなるし、千里の存在って色々大きいぞ？」

「・・・」

ああああああ。

唐突に思いついた言葉はろくな言葉がない。

やばいやばい。

逆効果過ぎる。

「どうせ私は・・・」

「ごめん。言い方が悪かった。修正させてくれ」

「もういい」

「ごめん・・・」

痛恨の一撃過ぎた。

どうしよう。

「私、美恵ちゃんの話も聞けたし、もう帰るね」

「え。まだ残ってるじゃん」

「もう・・・おなか一杯だからいい」

「んじゃさ、パーっと気晴らしにカラオケでも行こうぜ？」

「行きたくない」

「じゃあ、ビリヤードとか行こう」

「行きたくないってば！」

俺の顔を睨み付け、テーブルをドンと叩く。

周りのお客さんも大きな音でこちらに視線が集まる。

そんな中、千里の頬には少し涙が流れていた。

「・・・ごめん。言い方、本当に悪かった」

「もういいから・・・帰るね」

千里は自分の分を財布から取り出そうとする。

「良いよ良いよ。俺出すから」

「いらない」

テーブルに硬貨が何枚か置かれる。

止めるにも、止めれない状況。

ただ、その姿を見届けるしかなかった。

「じゃあ、帰るね」

「・・・本当にごめん。悪かった」

「もういいから」

そう言い残し、千里は出て行ってしまった。

どうすればいいかわからず。

俺は目で千里を追うことしか出来なかった。

14話「見えない心」

千里は怒って帰ってしまった。

あそこまで怒った姿を見るのは初めてだ。

怒った原因は、俺が美恵の話をしたからだろう。

あれだけ怒り狂う程、美恵の話を聞いて嫉妬したという事か？

でも、美恵の側にずっと一緒にいてやれって言われたし。

好きならそんな事言うだろうか？

女の気持ちって、よくわからんな・・・

昨日、明日暇って聞いてきたんだから、

今日帰ったのはあきらかに怒った反動だろう。

・・・

普通にキレルだけなら、泣かないよな。

泣く時は、痛い時・悲しい時・感動した時・あくびした時。

この4つのどれかだ。

あくびはしてなかったし、殴ってないから痛くも無かった。

感動するような話も特にしてないし。

ってことは、残るのはやはり悲しい時か。

じゃあ、何で悲しくなったかだな。

千里の機嫌が最高潮に悪くなったのは千里が死んだら

ノートとか借りれなくなると言った事だ。

つまり・・・

美恵との話しをする事で嫉妬し、俺も美恵の方が大事なように

言う事で千里を悲しませ、とどめの一発にノート見せてもらいからの的な

評価をしたからああなった。

という事でおそらく正しいだろう。

千里・・・

もうノート見せてくれないだろうな・・・

って、そこが問題じゃないな。

俺はどうなんだろうか。

美恵への気持ちは千里にも言ったように、

可愛そうな子だから守ってやりたいという気持ちが強い。

守ってやりたいっていう気持ちだけじゃ好きにはならないよな。

自分なりに考えたジクソーパズル恋愛論に例えたとしても、

必要とされるパズルのパーツがそろうことはないと思う。

では、千里はについてはどうだろうか。

千里は俺に色々な事をしてくれて感謝している。

細かい気配りもあるし、面倒見が良い。

どちらが俺のパズルにばっちりハマるかと言うと、
千里の方が当てはまる所は多いだろうな。

しかし。

好きっていう感情というか、なんていうか。

みんなが言うような自分が思いつめるような事はない。

やっぱり。

俺はどちらも『好き』ではないのだろうか。

そんな俺は。

二人に対してどういう行動をしてあげるのがベストなのか。

千里に言った話だって、千里が友達感情でいてくれた場合、

ああいう風に怒ることは無かっただろう。

中途半端な対応してるから期待させてしまうんだだろうな。

はっきり、そういう気持ちはないと言うべきなのか。

まあでも、ああいう言い方したのは友達でも怒るかもしれん。

道具扱いのような言い方したのは俺が悪いな。

今は千里大激怒中だし、明日学校で改めて謝ろう。

千里の怒り発言で熱い視線をずっと浴びていたが、

千里もいなくなって視線は薄れて行き、

今はようやく普通の1人客状態となった。

今がこっそりと消えて行くタイミングだと思い、

俺は店を後にした。

そして、そのまま行くあても特に無いので、帰ることにした。

．．．

家に帰り、勝手に外泊というか野宿したことについて、

親にこっぴどく怒られたことは言うまでもない。

夜、千里から借りているノートに一言書いておいた。

『ごめんな』

．．．．．

5月18日、月曜日。

いつものように学校へ向かう。

下駄箱に上履きに履き替え、教室へ入った。

「ちいっす！」

気合を入れていつものように挨拶する。

千里は・・・

すでに居る。

美恵は・・・

美恵もいた。

まずは千里に謝ろう。

俺は千里に近寄り、話しかけた。

「おっす。昨日は悪かったな」

「・・・おはよう」

いつものような笑顔はない。

まだ怒っているようだ。

「あんな事言ってごめんな。本気で悪かったよ」

「・・・もういいよ」

「怒ってる？」

「怒ってないよ」

「いつものように元気じゃないじゃん」

「いつも通りだよ」

「そうか？じゃあニコって笑ってみ？」

千里の顔は笑顔にならず、イーっと歯を見せる感じになった。

「芸能人は歯が命のCM中か？」

「光一くんの見る目がなくなったって事だよ」

「なんだそれ？俺はいつも変わらんぞ」

「じゃあ私の見る目が変わったのかもね」

「・・・どういう意味だそれ」

「さあ」

「・・・」

まだ相当怒ってるみたいだな。

何言ってもまだ聞く耳もちそうにない。

俺は鞆からノートを取り出し、千里へ返す。

「いつもサンキューな」

「うん」

千里はノートを受け取る。

相変わらず、ムスっとしてる。

「これからも、ノート見せてくれるよな？」

「うん」

「そかそか。サンキュー」

「どうしてそんな事聞くの？」

「どうしてって、昨日言った事、気にしてるかなって」

「そっか」

「千里はいつも気配りきくし、すごい感謝してるよ。

弁当持って来てくれたのも、すごい嬉しかったし。

サンキューね」

「・・・うん」

「機嫌直してくれな」

「・・・わかった」

少し肩でため息を付いてるように見えたが、

千里に笑顔が戻った気がした。

もう大丈夫かな。

俺はそのまま自席に鞆を置き、美恵の席へ向かう。

後ろから軽く肩を叩く。

「よっ。ちゃんと学校着たな」

美恵が俺の方に振り向き。

「うん。おかげさまで」

「おばあちゃんの家はどう？」

「おばあちゃん優しくしてくれるし、少し気が楽になったよ」

「そっかそっか。そりゃよかったな」

「うん。光一君、ありがとうね」

「良いふうになってくれてよかったよ」

「うん」

「んじゃ、これからも元気で学校来いよな」

「うんうん。来る来る」

「おう」

キーンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴る。

「んじゃ、またな」

「うん」

俺は自席に戻り、いつものように瞑想を始めた・・・

.....

「・・・くん」

「ん・・・？」

片目を明け、聞こえた声の方を向く。

そこには、千里の姿が見えた。

「どうした？」

「もう、授業終わったよ」

「ああ。帰る時間か」

俺は両手を広げ、大きく伸びをする。

「はい、これ」

千里はノートを差し出してきた。

「おう、サンキュー」

俺は差し出されたノートを受け取る。

「じゃ、また明日ね」

「ん？ああ。明日な」

千里はそのまま福岡の席に行った。

俺はぼーっとしながらその姿を見届ける。

少し福岡と話し込んだ後、二人そろって教室を出て行った。

福岡と二人で帰るのがって何か珍しいな。

．．．

そういえば、前に福岡千里狙うぞって俺に宣言してたような．．．

もしかして、そういう事？

これってどういう事だ？

まあ、たまたまかな．．．

よくわからんまま、千里から受け取ったノートを鞆に入れ、

俺も家に帰った。

この時はまだ、あんなショックを受ける事につながるなんて、
思ってもみなかった。。。

．．．．．

5月20日、水曜日。

何気ない学校生活を過ごす俺。

すばらしいことに美恵はあれから精勤賞だ。

日々元気になっているような気がする。

しかし。

俺と千里の関係は良くわからない事になっている。

先週の月曜もそうだったのだが、福岡とよく帰るようになった。

しかも、一緒に帰るようになったのは今週から。

そう。

俺と喧嘩した次の日からだ。

口では仲直りしたように見えるが、

態度があきらかに福岡に寄っている感じがする。

最近の行動を見てると、そう思える。

でも、相変わらずノートは貸してくれるし、行動は前と変わらない。

どういう心境の変化なのか俺にはわからん。

だが、今一番考えられる事は。

福岡が狙っている可能性が高いという事だ。

二人の関係が気になるのか、最近福岡と千里の行動を
気にしてしまうようになった。

まあ、二人が何かしてたとしても特に割り込む事はしないわけだが。

しかし・・・

少し、気になる。

キーンコーンカーンコーン・・・

6時間目の授業が終わる音だ。

珍しく俺は起きていた。

まあ、授業は聞いてないが。

その後、担任が来て適当にホームルームした後、

今日も長い学校の1日は終わった。

「さて・・・帰るか・・・」

俺は鞆にノートだけ詰め込む。

教科書はいつも置きっぱなしなのだ。

帰る準備をしてると、俺の視線を人影が暗くする。

誰か見上げてみると、そこには美恵が立っていた。

「ん、どうした美恵？」

「光一君。お父さんね」

「ん・・・何かあったのか？」

「んーん。ちょっとお父さんの状態を報告したいなって」

「ほう。で、最近どうなんだ？」

「隣、座っていい？」

「ああ、かまわんよ」

美恵は隣の席に腰掛ける。

グゥー・・・

「あっ」

俺の腹が鳴いた。

今日昼飯やきそばパンとジュースだけだったから

腹が減ってきたようだ。

「お腹すいた？」

美恵が首を傾げて聞いてくる。

「うむ。おやつ時間だからな。

「そうだ、前食ったたこ焼きでも食いにいかねーか？」

「良いね。行く行く」

「んじゃ、支度して来いよ」

「うん。わかった」

美恵は椅子から立ち上がり、自席に戻って帰る準備を始めた。

俺は自分の鞆を持ち、千里の席へ向かう。

千里も帰る準備をしていた。

「千里、またノートよろしく」

俺は千里にプリーズの姿勢を取る。

その姿を見て、予め準備してあったのであろう机の左端に置いていたノートを俺に渡してくる。

「はい、今日の分ね」

「おう、サンキュー」

ノートを受け取り、自分の鞆へ入れた。

そうだ。

美恵の話聞くついでだし、千里も誘うか。

「なあ千里。今から暇？」

「ん？」

「美恵が父親の現状を教えてくれるみたいなんだけど、たこ焼き食いながら一緒に話聞かね？」

「あー。ごめん」

「ん？何かあるのか？」

「うん・・・今日ちょっと早く帰る予定があって」

「そうなんか。じゃあ、しゃあないな」

「ごめんね。また・・・」

「ん？」

一瞬千里が止まり、少し考え事するように下を向いた後、再びこちらを見上げる。

「また、明日にでも聞かせてね」

「ああ。わかった」

「それに・・・」

「それに？」

「きっと光一くんに聞いてほしいだろうから、私も一緒に行かない方がよいよ」

「そんな事ないだろう。千里だって一緒に探したりしたんだからさ」

「そんな事ないことないよ。」

「ゆっくり話し聞いてきてあげて？」

「・・・そっか。わかった」

何かひっかかる言い方。

なんなんだ？

後ろから、歩く音が近づいて来て、真後ろで止まった。

「おまたせ」

振り返ると、そこには美恵の姿があった。

「お、来たか。んじゃ、行こうか」

「うん」

「千里、また明日な」

軽く千里に手をあげる。

「うん。また明日ね」

千里も小さく手を振る。

俺と美恵は、たこ焼き屋に向かった。

.....

たこ焼き屋で、二人分のたこ焼きを買い、

美恵の思い出がある公園へ向かった。

二人並んでベンチへ腰掛ける。

たこ焼きが入ったビニール袋から、1人前分を取り出し、

そのまま美恵へ渡す。

俺も自分の分を取り出し、たこ焼きを爪楊枝で一刺し。

そのまま口にほりこんだ。

「あつつっ！」

俺の舌は27のダメージを受けた。

猫舌には熱い食べ物は最重要危険物だぜ。

仕方なく、ハフハフしながらたこ焼きを恐る恐る口に入れ、

モグモグと頬張る。

美恵も小さくかじりながら食べていた。

「うまし！やっぱこのたこ焼きは旨いな」

「うん。美味しいね」

「体調も良いだろうから、食も進むだろ？」

「うんうん」

美恵は美味しそうにたこ焼きを食べる。

「んで、さっきお父さんがって言ってたけど、どうなん？」

「うん。あのね」

美恵は口にたこ焼きが入っていて上手くしゃべれないのか、

しばらくもぐもぐした後、ゴクリと飲み込んだ。

「えっと、お父さんね」

「おう」

「先週の木曜日から、毎日こっちの家に来てくれるの」

「ほー。何しに？」

「最初はぎこちなく、元気か？とか聞いてきてたけど、最近はやっと普通に話す感じになってきたよ」

「そうなんか。毎日来るのか？」

「うん。玄関前で話すだけなんだけどね。

数分位しかいないけど、コアラのマー○とか、お菓子買って来てくれるの」

「なんじゃそりゃ」

美恵が楽しそうに話す。

こんな姿を見るのはじめてかもしれん。

よほど、お父さんの事が好きなんだろう。

そして、楽しく接してくれる事についても、嬉しいんだろうな。

「まゆげがあるコアラ見つけると良いらしいとか、何か私と話す為にネタを考えてきてくれてるみたい」

「まゆげコアラか。1箱に1個入ってたら良い方のだろ？」

「うん。見つけたまゆげコアラ、次の日あげたら喜んでたよ」

「はは・・・何か、前のお父さんとえらい印象が変わる行動だな」

「そうだね。でも、これがいつものお父さんなの」

「そっか。もう、安心出来そうな感じ？」

「私はいつものお父さんに見えるし、大丈夫だと思うんだけど」

「だけど？」

「お父さんがね、今お仕事探し始めたんだって」

「おお」

「それでね、お父さんが仕事決まったら、迎えに来るって」

「そっか。仕事見つけて、いつものように生活が出来るようになってから、迎えに来るって事か」

「そうみたい。それまで、毎日来てくれるって」

「根は優しいお父さんなんだな」

「うん」

「お母さんの事、話触れてみた？」

「うん。最初にお父さんが来た時にね、今まで八つ当たりしてごめんって言ってくれた。

私を書いた手紙もちゃんと読んでくれたみたいで。

ここまでひどい事してしまったのに、それでもお父さんを精一杯好きでいてくれて嬉しかったって」

「なるほど。手紙にはそういう事を書いてたんだな」

「うん。それでね、私を幸せにするという事を達成出来なかったお母さんの分も含めて、お父さんが幸せになるまで見守りたいから、今までの事を許してほしいって」

「改心したんだな」

「かな。もちろん、OKしたよ」

「そっか。何がきっかけになったのかは分らんが、

改心してくれて本当に良かったよ」

「うん。これも、光一君のおかげだよ」

「俺は何もしてないさ。きっと美恵の気持ちが通じたんだと思うよ」

「そうなのかな。。。でも、光一君がアドバイスしてくれたから、

今の私があると思う。あのまま家にいたら、

まだ変わってなかったかもしれないし」

「まあ、俺はアドバイスした覚えはないが、変わってなかった

可能性があったというのは、確かだな」

「うん。光一君、本当にありがとうね」

「うむ。これで俺もやっと安心出来るわ。

まじ良かった」

「えへへ」

美恵は嬉しそうにたこ焼きを口に入れ、もぐもぐと頬張る。

美恵の家庭にも、ようやく春が訪れたようだな。

しかし、母親がいなくなった事実は変わらない。

どうして、不幸というものは突然やってくるんだろうな。

人間生まれ変わる時に自分の人生を決めて生まれてくると言うが。

やり遂げる事があるにもかかわらず、死んでしまうなんて。

そんな悲しい人生を自分で決めたなんて、考えられないよな。

神様って本当に、時には残虐な事もするもんだ。

そんな事を考えながら、程よく冷めたたこ焼きを頬張る。

猫舌なもんで、熱すぎると食えないのだ。

「ねえ、光一君」

「ん？」

一足先に食べ終えた美恵が、俺の方を向いて話しかけてくる。

「ひとつ聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「最近、千里さんと福岡君、仲良いみたいだけど。

光一君どうしたの？」

「どうしたのって？」

「えっと。。。」

美恵が少し言いにくそうにしている。

お前は どう思ってるんじゃないボケ！とでも言いたいのだろう。

「まあ、福岡と千里が最近良く一緒に帰ってるのは見かけるな。

いきなりああいう感じになったわけだが、俺も良くわからん」

「光一君、千里さんとお付き合い本当にしてないの？」

「ああ。前にも言った通りだよ。

でも、最近あの二人活発に一緒に帰ったりしてるよな」

「そうだね。光一君は何も思わないの？」

「うーん。。。どうかな。良くわからん」

「そっか。このままで良いの？」

「このままって？」

「福岡君と、千里さんがお付き合いするようになって」

「うーん・・・」

確かに最近の二人の行動は気になる。

だが、それは福岡が俺に頂きます宣言したからであって、

好きとか嫌いとかそういう分類じゃないだろう。

俺が千里にあんな事言ったせいか、次の週から

やたら二人仲良いし、俺への好きという感情は

なくなったのかもしれない。

今考えると、かなりひどい事を言ったからな・・・

「ねえ、光一君」

「ん？」

「私、光一君の事、好きって手紙に書いた事、覚えてる？」

「ああ。衝撃発言だったな。直球だぜ」

「光一君は、どう思ったかな？」

・・・

嫌な質問。

変に答えると千里みたいに大目玉くらいそうだし、

今分かってる範囲でちゃんと答えよう。

「えっと。。。確かに、美恵の事は心配だったし、

守ってやりたいとも思った。

でも、好きとか嫌いとか、そういう感情はわからない。

俺、初恋とかしたことはないし。

どういう状態が好きなのかってのがね」

「そっか・・・」

「期待に沿えない回答になって、ごめんだけど。

でも、好きって言ってくれた事については嬉しかったし、

嫌じゃなかったよ。サンキューな」

「うん。。。わかった」

美恵が少し空を見上げる。

そんな姿を見て。

「お前にはあの北斗七星の横に輝く、死兆星が見えるか？」

と、明るい空を指差す。

・・・時間帯が悪かったと後で後悔した。

星がまったく見えぬ。

「死兆星・・・光一君にも、私みたいにお母さんが見えるように、
他の人が見えない星が見えるんだね」

「いや、それ見えたら死ぬから・・・」

「見えてるの？」

「見えるわけないじゃん！俺まだピンピンしてんのに！」

「あははっ。そうだねー」

美恵は腹を抱えて大笑いする。

・・・

どこにツボったのかようわからん。

「美恵、笑いすぎ」

「あは。ごめんね。見えちゃ駄目な星なんだね」

「うむ」

「ねえ、光一君」

「ん？」

「光一君は、千里さんと一緒にいる時の方が楽しそうだし、
お似合いだと思うよ」

「ふむ・・・」

美恵もまたこんな事言う。

千里も美恵も相手という方がお似合いとか。

どないやねん。

「あっ」

美恵が急に立ち上がり、腕時計を確認している。

「どした？」

「もうちょっとしたらお父さん来るから、帰るね」

「そかそか。じゃあ帰るか」

「うん」

俺も立ち上がり、ゴミを捨てた後二人並んで駅へ向かった。

・・・

やがて、駅が見えて来た位の時。

「ん？」

見覚えのある姿が近くの喫茶店から男女2人出て来る。

「どうしたの？」

美恵が俺に尋ねてくる。

「あれって・・・」

その見覚えのある姿の人物がこちらに視線を移した。

この顔は・・・

「・・・千里に福岡・・・」

「えっ？」

美恵が大きな声で驚く。

千里と福岡もこちらに気づいたようで、様子を伺っている。

俺達は視線を感じながら、二人に近づき、目の前で止まった。

「よう、成瀬。デートかい？」

福岡が俺に尋ねてくる。

「いや、デートじゃねえし。そういうお前達こそ、デートか？」

「そういう風に見えるか？」

「見えないなら聞かないだろ？」

「そうか。じゃあ、そういう事で良いぜ」

「あん？」

こいつら。

マジでデートかよ。

千里は何も言わず、こちらを見ているだけだった。

「お前達も何だかんだ言って、上手い事やってんじゃねーか。

デートに見えますよ、成瀬くん」

挑発するかのようにな福岡が言う。

「俺はただ話を聞きに一緒に帰っただけだ」

「ほー。じゃあ、俺と千里ちゃんも同じだぜ？」

「・・・」

俺は千里に視線を移す。

俺が誘った時、早く帰る予定があるって言ってたのは。

福岡に逢う為だったのかよ。

「千里、早く帰る予定じゃなかったのか？」

「・・・」

千里は何も言わず、下を向く。

その様子を福岡は見て、俺をさらに挑発する。

「まあ、二人仲良くお帰りやんせ。

俺も千里ちゃんと仲良く帰るわ」

そう言って、福岡は千里の肩に手を伸ばし、

駅の方へエスコートする。

千里はされるがまま、俺に背を向け、

そのまま駅へ歩き始めた。

そんな姿を見て、俺は何も言えず、立ちすくんでしまった。

・・・

何なんだよ。

やっぱり、こいつらデキてたのかよ。

最近仲良いと思ったけど。

こういう現実突きつけられるなんて。

思ってもいなかった・・・

俺はそれ以上何も行動することが出来ず。

二人が小さくなっていく所を見届けるしかなかった。

そして。

福岡と千里は再びこちらを向くこともなかった。

15話「初めての想い」

翌日。

俺は学校を休んだ。

昨日の二人の姿を見て、少しショックすぎて。

風呂入った後にパンツいっちょでそのまま寝てしまい、

風邪を引いてしまったのだ。

頭が痛い。

鼻水が止まらん。

ピピピッ。

脇に挟んでいた体温計を取り出し、温度を確かめる。

38.5度。

かなり重症だ。

今日は学校な気分じゃなかったし、丁度良いっちゃいいんだが。

しかし・・・

本当に福岡、狙ってたとはな。

あれを見た瞬間、千里に裏切られた感があった。

元を返せば、俺が致命的な一撃を与えたからなんだろうが。

でもな・・・

福岡にだけは、正直とられたくなかった。

彼女いるくせに・・・

本命切り替えだあ？

調子のんなボケ、クソが・・・

・・・

千里の全てが福岡に奪われていく感じがする。

俺がしたことないのに、福岡は千里の肩に手を回して

肩くんでやがった。

千里も千里だ。

それに抵抗する事なく、受け入れてた。

そして。

俺に早く帰らないといけないと嘘ついてまで、

福岡と逢ってたんだ。

くそ！

むかつくわ！あの二人！！

枕を命一杯天井に投げつける。

バン！

天井に叩きつけられた枕は、直角に俺の顔面目掛けて落ちてくる。

その枕をナイスキャッチする俺。

そしてまたシーンとなる。

．．．

二兎追うものは一兎も得ずと言うが、まさに今の俺がその状態だ。

まあ、どちらも追ってなかったんだが。

二人を出会わせると、二人がお互いに遠慮して引き下がったって感じか。

はあ．．．

枕を頭の後ろに戻し、横を向きながらポーっとする。

千里が笑った姿。

千里が怒った姿。

千里が俺の為に尽くしてくれた姿。

そんな事しか頭に浮かばない。

千里。

可愛かったよな。

良く、俺に尽くしてくれたよな。

キスも．．．したよな。

強引だけど。

左手の人差し指で、自分の唇をふにふにと軽く押す。

こんな感じだったっけかな．．．

千里の唇．．．

ちゃんとキスする時、千里は目を閉じてたよな。

昨日からずっと千里の事ばかり考えてるや．．．俺。

どうしてだろう。

友達、と思ってたはずなのに。

何故か千里が俺の側から離れてるように見えて。

．．．

何か、寂しい。

．．．

寂しい、ねえ。

俺が寂しいとか思うってどういうことよ？

そういえば、何もしてなくても相手を考えてしまうのが好きになった証拠って言ってたよな。

と言っても、何もしてないが何かされたんだがな．．．

どうなんやろ。

俺、千里の事好きだったのか？

．．．

今考えてももう仕方ないよな。

福岡に取られちゃったんだから。

それにしても、あんなに気持ちが早く変わるもんなんだろうか。

俺と喧嘩して次の日からいきなり福岡と仲良くなったし。

でも、これでまたあの二人と関わりにくくなった。

何事も無かったかの様に接するのが一番良いか。

はあ。。。

学校行きたくねえな。

居心地悪い～。

とりあえず寝るか・・・

寝たら気分も落ち着くよな。

きっと。

俺は再び目をつむり、頭が痛いのを意識しないようにし、

再び深い眠りに落ちていった。

.....

ピンポン。

インターホンの音が聞こえ、ふと意識が戻った。

しかし、俺には関係のない事。

目を開けることなく、再び無心になる。

しばらくすると。

トン、トン、トン、トン・・・

階段を上ってくる音が聞こえる。

おかんか愛美が来たのかな。

まあいいや、このまま寝ておこう。

ガチャ。

ドアをゆっくり開ける音が聞こえる。

その音に俺は反応せず、そのまま寝てようとする。

カチャ。

再びドアは閉まる。

ギシ、ギシ・・・

ゆっくりしのび足で誰かが近寄ってくる音がする。

俺の部屋はフローリングにじゅうたんをひいてるだけなので、

音は結構なるのだ。

コトツ。

何か良くわからん音だが、そんな音も気にせず、寝ようとする。

聞こえていた足音がベッドの隣で途切れ、

掛け布団に軽い重みを感じた。

手でものせたんかね。

冷えピタでも取り替えてくれるつもりだろうか。

そっと俺のおでこに温もりが伝わり、

そのまま頬へ移動する。

熱の確認か？

「・・・寝てるかな・・・」

ん？

おかんでもない、愛美でもない声が聞こえた。

俺はゆっくり目を開ける。

そこには、正真正銘の千里の姿だった。

お見舞いに来てくれたのか・・・

でも、なんで・・・

千里は心配そうに俺を見詰めている。

「・・・寝てるよ」

「起きてるじゃん・・・」

「・・・何でここにいるわけ？」

「お見舞いだよ」

千里はいつもと違う優しい笑顔を見せる。

「大丈夫？」

「大丈夫なら寝てないわな」

「そうだね。顔もあついし、具合悪そう」

「具合悪いから学校休むんだよ」

「うん。ゆっくり休んで」

「・・・」

千里は俺の髪をゆっくりかき上げるように撫でる。

いつもと違う千里を見てみたいだった。

ゆっくり頭を撫でられる俺。

そんな今が、すごく居心地が良い感じがした。

しかし、頭に福岡の事がよぎる。

「なあ、千里」

「うん？」

「こんな所福岡が見たら、怒られるぞ」

「どうして？」

「どうしてって、お前ら付き合ってたんだろ？」

千里はゆっくり横に顔を振る。

「付き合っていないよ」

「じゃあ、付き合う前兆の状態か。」

「どちらにしても、福岡は良い思いせんぞ」

「してくれるよ。きっと」

「はぁ？何で？」

「私、光一くんが好きだもん」

「あぁ？意味わからんし。

福岡は千里の事狙って近寄ってる位分かってるだろ？」

「違うよ。私はただ福岡くんに相談してただけだよ」

「相談？何の？」

「光一くんの」

「俺の？俺の何？」

「どうすれば私の気持ちを受け取ってもらえるか」

「はぁ？どういうこと？」

「怒らないで聞いてくれる？」

「聞きたいから質問してるんだろ？」

「うん、ごめんね。そうだね」

「んで、何よ」

俺はちゃんと話を聞こうと、起き上がろうとする。

そんな姿を見て、千里は両手を俺を寝かそうとした。

「無理しないで。横になってて」

「・・・」

俺は言われるまま元の位置に戻される。

「光一くんに怒っちゃった日ね、

私、福岡くんにあの後電話しちゃったの」

「ほう」

「それでね、光一くんにこんな事言われちゃったって言ったらね」

「うん」

「バカ正直な所あるから、悪気があって言ったつもりじゃ

ないだろうって。だから、許してやれって言われたよ」

「・・・そっか」

「私は今、光一くんの直ぐ側にいるから

私の存在が当たり前になっているけど、

ちょっと距離を置いたらどう？って言われてね」

「・・・それって」

「福岡くんが私を取るぞってカマかけたのを利用して、

しばらく福岡くんと一緒にいたら、嫉妬するんじゃないかって

言われたの」

「・・・俺を二人でハメたのか」

「あのまま接してても、光一くん変わらなかつただろうし、

それもありかなと思って。

ごめんね、今までそんな態度とって」

「・・・はあ。。。ため息しか出んわ」

まさか俺がはめられてるとはな。

福岡が千里を取ろうと見せてたって事か。

本当に狙ってるわけじゃなかったんだな。

「ごめんね。昨日の福岡くんの行動は、アドリブだから。

でも、私本当は光一くんが好きだよ」

「・・・」

「怒ってる？」

好きって言われた後に怒ってる？って聞かれても、

答えにくいっちゃありゃしない。

でも、少しホッとした。

いや、かなりかな・・・

「何で今日お見舞いに来たわけ？」

今までの作戦がこれでパァになっちゃったんだぞ」

「そうだね。でも昨日の今日で学校お休みしちゃうし、

心配になっちゃって。学校休んだの初めてでしょ？」

「そういや休んだのは初めてだな。俺らしくない」

「人間だから、体調崩す時だってあるよ」

「そうだな。バカは風邪引かないっていうから、

俺はバカじゃなかったって事だ」

「うん。光一くんはバカっぽいように見せてるけど、

本当はすごく良い人だよ」

「良い人ねえ・・・って、俺いま褒められてるの？」

「うん。褒めてるよ」

「そっか。じゃあ良いけどさ」

「今まで、ごめんね」

「ごめんと思うならするなっつーの」

「少しは、気にしてくれた？」

「・・・少しはな」

「少しだけ？」

「・・・ちょっと」

「ちょっとだけ？」

「・・・まあまあ」

「まあまあだけ？」

「何だこのループは」

「光一くん良くやるからおかえしー」

「あのなあ。まったく・・・」

「うん？」

「まあ、マジ良かったわ。福岡と絶縁する所だった」

「それは本当に危なかったね。今日来て良かった」

「本当だよ。心配かけんなっつーの」

「心配してくれたの？」

「・・・少しはな」

「少しだけ？」

「・・・またループか？」

「またループだよ」

「あほ。千里がそれを使うには100年早いわ」

「そっかあ。残念ー」

「何が残念なんだか・・・」

「あ、そうそう。お花買ってきたんだよ」

「花？」

千里は俺のベッドの上にいるの間にかおいた花瓶を手取る。

コトッって聞こえた音はこの花瓶の音だったのか。

誰かが千里に花瓶貸したんだな。

ピンク色の綺麗な花1本と、白いつぼみみたいな花が1本ある。

「これなんていう花？」

「ソネットフローズピンクと、アマドコロだよ」

「ほう。アマドコロってのが白いやつか」

「うん。花言葉って知ってる？」

「花言葉？」

「成長や香りなどから受ける印象とか、

性質を言葉に置き換える事を言ってね。

1つ1つの花には、意味が込められてるんだよ」

「ほー。で、この花言葉は何なの？」

「アマドコロは、元気を出してっていう花言葉だよ」

「ほうほう。ピンクの方は？」

「ソネットフローズピンクは・・・

あなたの事が大好き、そして、あなたの愛を信じる。だよ」

「・・・良く恥ずかしがらずにそんな言葉を言えるよな、千里って」

「えへ。気持ちは正直にしたいから」

「バカ正直にならんようにな」

「それは光一くんでしょ？」

「そうとも言う」

「だよね。あははっ」

まったく。

千里がいつもの笑顔に戻った感じがする。

そんな千里を見て安心したのか、俺は段々眠くなってきた。

「千里、俺眠くなってきたから寝るわ」

「うん。ゆっくり休んでね」

「ああ。お見舞いサンキュー」

「光一くんが寝るまで、側にいて良い？」

「ん？何で？」

「看病、だよ？」

「・・・そっか。まあ、別に良いけど」

「えへ。じゃあ、ゆっくり寝てね」

「ああ。んじゃ、お休み」

「おやすみなさい」

俺は目をつむり、寝る体制に入る。

「冷えピタ、張り替えとくね」

「ああ、サンキュー」

千里は俺のおでこに張ってる冷却能力を既に失った

冷えピタをはがし、新しいひんやりした冷えピタに張り替える。

うん、冷たくて気持ちよい。

千里はその後、俺の頭をゆっくり撫で続けてくれた。

その感触が、なんだか気持ちよくて。

俺の意識は直ぐに遠のいていった。

.....

何時間立っただろうか。

俺は自然と目を覚ます。

....

俺の呼吸とは違う音が聞こえる。

ふと目を開けてみると。

俺のベッドに両手を枕にして寝ている千里の姿があった。

自分の部屋の時計を見る。

時計は18:30を指していた。

数時間寝たようだ。

千里は俺が寝た後も家に帰らず、ここで寝てしまったようだ。

寝顔が微妙に可愛い。

....

俺の事、千里好きなんだよな。

福岡と上手い具合に俺を引っ掛けやがって。

でも、福岡のものじゃなかった。

それは、良かったと思う。

．．．

良かった、か。

腕組んでる姿見たとき、ショックだったもんな。

．．．

こうやって、俺の事を気にしてお見舞いに来てくれる。

別に花は好きじゃないが、こういう風に

花を持って来てくれる千里もまた女の子らしい。

花言葉はあなたの愛を信じる、か。

俺も。

千里を失いたくない。

ずっと笑顔を見ていたい。

もう、誰にも腕を組んでる姿を想像したくない。

ずっと。

ずっと俺の側にいてほしい。

ノート借りたいからじゃなくて。

おちょくりたいからじゃなくて。

．．．

好きだから。

千里の寝顔は本当に可愛い。

この千里の唇が、俺の唇に触れたんだよな。

．．．

千里は、俺の事が好きなんだよな。

じゃあ、良いよね。。

可愛い寝顔にそっと近づき、真近で千里を眺める。

そっと、千里の頬に手の平を包み込む。

ぷにぷにしてる。

千里は俺に気づかず、小さな寝息を立てて寝ている。

俺は目を閉じ。

千里の唇に。

そっと俺の唇を重ね合わせた。

．．．

ゆっくりと離れ、目をゆっくりと開けながら千里を見る。

すると、千里もゆっくり目を開いた。

「げっ．．．」

「・・・光くん・・・」

ばれちゃった。

やってもうた。

「すまん」

「・・・光くん」

「はい・・・」

「私の事、好きになってくれた？」

「・・・嫌いなら、俺からキスしないよ」

「そっか」

千里はゆっくりと体をおこし、俺に問いかえる。

「普通の人でも、光くんからキスしたいと思う？」

「思うはずがないじゃん」

「じゃあ、私は？」

「・・・まんまと作戦負けしたって事だ」

「作戦負け？」

「ああ。俺、本当は」

言っちゃおうか・・・

さっき気づいた。

本当の気持ちを。

「好きだよ。千里」

心配そうな顔から一転。

千里は笑顔になった。

「・・・両想いに、なれたんだね」

「そのようだな」

「光くん」

「ん？」

「私も好きだよ。大好き」

「ああ」

千里はゆっくり寝転んでいる俺に体を預けてくる。

俺も、千里をぎゅっと抱き締めた。

「俺も、千里が好きだから」

「うん」

しばらく二人の温もりを感じた後、ゆっくりと

お互いの顔が見える程度に距離を取り見詰め合う。

「こんな至近距離だと、俺の風邪うつしちゃうな」

「良いよ。光くんのだから、大歓迎だよ」

「はは。バカめ」

俺はそう言って、そのまま千里を抱き寄せ。

両想いとなった二人の気持ちを確認合うように。
もう一度、ゆっくりキスをした。

16話「父親が大好き」

6月12日、金曜日。

月日が流れるのは早いもので。

千里と両想いになった日から、早くも1ヶ月がたとうとしている。

曖昧だった感情が確かなものになったおかげで、

前以上に仲良く学校生活を過ごすようになった。

福岡も俺の事を何だかんだとからかうが、

実は良い奴だったりするわけで。

表面上は適当な人間だが、

そういうしっかりした面もあるから、女の子に好かれるのだろう。

キーンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴り、ホームルームを適当に過ごした後、

今日も1日長かった学校が終わる。

俺はいつものようにノートだけ鞆に入れ、帰る準備をする。

「光一君」

「ん？」

声がした方向に顔を向けると、美恵が立っていた。

「どうした？」

「あのね、明日かあさって、時間あるかな？」

「どっか行くのか？」

「えっと、私の家に来てほしいんだけど、駄目かな？」

「家？おばあちゃんどこ？」

「ううん。自分の家の方」

「なんで？」

「お父さんがね、是非光一君にお礼が言いたいって」

「は？何でお父さんが俺に興味示してるわけ？」

「私をおばあちゃんの所に連れて行ってくれたし、

そのおかげでお父さんも改心出来たからって」

「ふーん。そういや、あれからまともに聞いてなかったけど、

お父さんの様子はどうなんよ？」

「毎日おばあちゃんの家に来てくれるよ。

それで、明日から私家に戻るようになったの」

「ほー。じゃあ、お父さん新しい仕事見つかったって事？」

「うん。それも合わせて、お話したいって」

「そっか。何か親に呼び出されるって不思議な話だが、

改心出来てるならまあいいや」

「来てくれる？」

「ああ。かまわんよ。明日で良い？」

「うん。じゃあ、明日光一君が来てくれるって伝えとくね」

「へいへい。あんまり乗り気じゃないが、まあ良いだろう」

「ありがとね。じゃあ、明日待ってるから」

「うい。昼過ぎに行くわ」

「うん。分かった。それじゃ、また明日ね」

「おう」

美恵は軽く手を振り、教室を出て行った。

親に呼び出されるとか、俺何言われるんだろ。

想像がつかんな。

俺は中断していたノートを全て鞆に詰め込み、

千里の席へ向かい、机の横に立つ。

いつものように、プリーズのサインを出し、

ノートを要求する。

「今日もよろしく」

「はいはい。テストに出るって先生が言ってた所、

ちゃんとポイントつけといたからね」

「お、いつもサンキュー」

千里からノートを受け取り、自分の鞆に入れる。

「あ、そういや、明日美恵の家行ってくるわ」

「そうなんだ？」

「何か父親が俺と話したいから連れて来いってさ。

何言われるか全然想像つかねー」

「うーん。何だろうね。お父さんは美恵ちゃんと仲良くなったの？」

「そうらしい。もう大丈夫だってさ」

「そっか。じゃあ良かったね」

「んむ。って事で明日行って来るわ」

「うん。わかった」

千里は慌てて帰る準備をする。

両想いになって数日後から、俺達は毎日一緒に

帰ることになっているのだ。

「おまたせ、行こっか」

「おう」

俺達は教室を後にし、楽しく話しながら家へ帰った。

.....

翌日、家で飯食った後、美恵の家へ向かった。

久しぶりに見た美恵の家。

美恵の部屋のカーテンが初めて開いている所を見た。

部屋はピンクっぽい色で統一されてそうに見える。

恐る恐る、インターホンを押す。

ピンポーン。

ああ、なんかドキドキしてきたぞ。

ガチャ。

通信がつながる音がした。

『はい』

「あっ、○○高校の成瀬です」

『ああ、成瀬くん来てくれてありがとうございます。今ドアを開けるね』

「はい」

前聞いた声より少し明るめな印象を受けた。

気分が晴れると声質も変わったように感じるものなのだろうか。

ガチャ。

玄関のドアが開き、美恵が出迎えてくれる。

「よう。昨日ぶり」

「いらっしゃい。今日はわざわざ来てくれてありがとうございます」

「ういうい」

美恵に家の中へと招かれる。

そのままリビングへ案内され、父親の前にあるソファへ座る。

美恵は俺を案内したあと、父親の横に座った。

「あ、美恵。成瀬くんにお茶出してあげて」

「うん」

美恵は再び立ち上がり、台所へ向かった。

その様子を見届けた後、父親は再び話しかけてきた。

「成瀬くん。今日は来てくれてありがとうございます」

「いえいえ。特に呼び出しされる程の事はした覚えはないですが」

「美恵の相談とか、受けてくれてたみたいだね。」

本当に、心配かけて申し訳なかった」

「いえ、無事また仲直りしてくれたみたいなので、僕も安心しました」

「美恵から聞いているだろうが、無事新しい仕事も決まってね」

「そうですか。それは良かったですね」

美恵が台所から出てきて、俺の目の前のテーブルにお茶を置き、

父親と自分の分も座る目の前に置く。

オボンをテーブルの端に置き、父親の隣に再度腰掛けた。

「美恵がね、最後この家を出て行く時に、私に手紙をくれたんだ。

その手紙には、将来私と美恵がどうなっていたいか、

どうやって楽しい日々を過ごしているか。

そんな未来が描かれた、言わば未来日記のようなものだった」

「そうなんですか」

「最後に、あれだけ私が美恵を傷つけたのに、

まだ好いてくれている事を書いていてね。

私は変わらないと駄目だと、本気で思った」

「なるほど」

「本当にありがとう。成瀬くん」

「いえいえ。僕が言うのも何ですが、美恵を大切に

してやって下さいね」

「ああ、わかった。約束する」

「あと、お仕事も頑張ってくださいね」

「・・・ああ。そうだね」

「美恵も、お父さんと仲が戻って良かったな」

「うん。これが、いつものお父さんだよ」

「そっか。優しそうなお父さんだ」

「うん！」

美恵は満面の笑みを浮かべる。

以前見た時のような印象悪い雰囲気はもう一切ない。

人って、考え方が変わるだけであれだけ人に与える印象は変わるんだな。

「話聞けてよかったです。それじゃ、帰りますね」

「ああ。ありがとう。美恵と仲良くしてやってな」

「もちろんです。じゃ、帰りますね」

「うん」

「それでは」

俺は前のテーブルに置かれたお茶を飲みほし、玄関へ向かう。

父親と美恵は俺を見送る為に後ろからついてくる。

ドアを開け再度振り向く。

「じゃあ美恵、また月曜な」

「あ、駅まで送るよ」

「そっか。サンキュー」

俺は父親に頭を下げ、美恵と一緒に駅へと向かった。

・・・

前に出会った海岸に差し掛かり、ぼーっと俺は眺めながら歩く。

「そういえば美恵、ここにも母との思い出ってあるのか？」

「海岸？」

「うん」

「そうだね。小さい時、よく浜辺で遊んだ記憶があるよ」

「そっか。ここも思い出が沢山あるんだな」

「うん」

「そういや、お父さんって仕事もう行ってるの？」

「ううん・・・まだだよ」

「そっか。じゃあそれまで一緒に平日も父親と一緒にいれるな」

「そうだね・・・」

何か声のトーンが低くなる。

「どうした？声のトーン低いけど」

「・・・あのね」

「うん？」

美恵が途中で下を向きながら立ち止まった。

それに気づき、俺も足を止める。

「どうした？」

「お父さんね・・・」

「うん」

「職場、東京なの」

「ほお。って、東京！？」

東京だと？

ここ大阪ですけど。

「美恵は、ここに残るのか？」

「ううん・・・」

「・・・じゃあ、着いていくのか？」

「うん・・・」

「そうなんか・・・」

衝撃の一言だった。

まったく美恵には、いきなりびびらされる事が多い。

引越しちまうのか・・・

「ずっとお父さんと一緒にいたいから、着いていくの」

「・・・そっか」

これか。。

もしかして、俺をわざわざ呼んだ理由は、

これを言いたかったからなのか。

父親も東京を選んだってのは、おそらく近所の噂等もあったんだろう。

大人の事情と言うもので、ここから離れる必要もあったんだろうな。

「これが、俺に伝えたかったメインの内容だったんだな」

「私は、そうだね。お父さんは、本当にお礼も

言いたかったんだろうけど」

「そっか。何時、引越しするんだ？」

「お父さんの仕事は7月からだから、

6月29日に引っ越し予定だよ」

「あと3週間しかないのか」

「うん・・・」

「まあ、美恵がそう決断したなら、良いんじゃないか？

お父さん、大好きなんだろ？」

「うん。でも・・・」

「ん？」

「今まで光一君に色々してらって、引っ越しちゃうと思ったら・・・

何て言うか、迷惑だけかけて引っ越しちゃう形みたいで」

「そんな事ないさ。無事に美恵は幸せに近づいてるんだ。

俺はその結果を聞いた事が、何より俺にとってのご褒美みたいなもんさ」

「光一君」

「ん？」

「今までありがとう」

「ああ。気にすんな」

「光一君と出逢えて良かった。そして・・・」

「そして？」

「好きになって良かった」

「・・・」

そういえば、美恵に千里と両想いになった事、言ってなかったな。

しかし、このタイミングで言うのはどうか・・・

でも、引越しが決まっているのに好きになって良かったって、

一体どういう意味だ？

「好きになって良かったって、美恵引越しちゃうじゃん。

逆に、辛くなるんじゃないのか？」

つつい聞いてしまった。

すると美恵は、今まで下向きながら話していたが、

ゆっくりと顔を上げ、俺の方を見詰める。

「光一君。もう、千里さんと付き合ってるんだよね」

「え？」

「違う？」

何でわかるんだ??

「ああ。そうだな。今付き合ってる」

「そうだよね。二人の行動が変わったから、そうかなって」

見た目ではばれてたのか。

「折角好きになってくれたのに、期待に答えられてなくてごめん。

でも、好きって言ってくれた事は嬉しかったよ」

「うん・・・だから」

「だから？」

「ずっと、片思いの思い出を、残しておけるから」

「ん？どういう意味？」

「私ね、光一君が好きになった事が、初恋なの」

「そうなんか・・・」

「あれだよ。初恋って、実らないって言うし。

でも、その気持ちはずっと心の思い出で残るから。

その思い出が、光一君で良かった」

「・・・」

何て返せば良いのかわからん・・・

初恋は実らないって、俺にとっての初恋は千里なんだが・・・

これも実らないと言われてる感じもして、少し複雑だ。

「光一君。千里さんと、ずっと仲良くしてね」

「・・・ああ」

「光一君は優しいから、良いお父さんになれると思う」

「・・・ありがと」

潮風になびく美恵のさらさらとした髪の毛が、

太陽の反射で美恵本人が輝いて見えた。

そんな気がした。

「ごめんね、こんな話しちゃって。行こっか」

「ああ。そうだな」

美恵は歩き出し、並ぶように俺も歩き始める。

「美恵、ごめんな」

「ん？」

「期待に答えられなくて」

「うん。千里さんと仲良くしてくれれば、私も嬉しいよ」

「・・・そっか」

何て答えたら良いかわからん。

でも、美恵の気持ちは今決まった感じではなく、

少し落ち着いて見える。

前から気付いて、結論を出した答えなのだろう。

これ以上この話を引き伸ばしても美恵に傷つけそうだし、

話を変えるか・・・

「なあ、引っ越す時、俺見送りに行くよ」

「ほんと？」

「ああ。何で東京向かうの？」

「飛行機だよ」

「空港何処？伊丹？関空？」

「伊丹だよ。本当にお見送りに来てくれるの？」

「もちろんさ」

「ありがとう。嬉しいよ」

「何時の便？」

「えっと、6月29日の13時10分発だったかな」

「13時10分か。了解。必ず行くから」

「うん。家出る時、ベル鳴らすね」

「そうしてくれるとありがたい。よろしくな」

「うん」

ゆっくりと歩いていたが、話していると直ぐに時間は過ぎ。

駅に到着した。

切符を買い、美恵の方へ振り向く。

「そんじゃ、見送りサンキュー。また月曜な」

「うん。気をつけて帰ってね」

「ああ。そんじゃな」

「うん」

俺は改札を通り、自分の家のホームへ向かう為に階段を下りる。

改札を振り向くと、美恵は手を振っていた。

俺も美恵に手を振り返し、ホームへ向かった。

あと3週間か・・・

美恵の見送りの時も、何か印象に残る送り方をしたいもんだ。

この話、千里にも言っておくか。

ホームにたどり着き、俺は近くの公衆電話で千里にベルを打つ。

美恵が引っ越すことを入れ、何かしてやれることは無いかベルをした。

タイミング良く、電車が来たので乗り込む。

電車の窓から見えるさっき歩いた海岸。

美恵が引っ越したら、俺もこの駅に来る事はないだろう。

この海岸の海を見るのも、今日が見納めかもな。

そんな事を考えていると、ベルが震えた。

千里からの返事と察し、ポケットから取り出し確認する。

『イマカラアエルカナ？ チサト』

逢いたいらしい。

詳しく話を聞きたいって事かな。

今から用事もないし、このまま千里の家へ向かうか。

そのまま自分の家に向かうのは止め、千里の駅へ向かった。

.....

乗り越し料金を払い、改札を出る。

近くの公衆電話から最寄駅へ来たことを千里にベルを打つ。

しばらくして、再度ベルが震える。

『OK イマカライクネ チサト』

来るようだ。

俺は千里が来るのを待った。

.....

15分位過ぎただろうか。

千里が走ってこちらに向かってくる姿が視線に入る。

俺は千里に気づくように手を振る。

千里も気付いたようで、手を振りかえしながら俺の元にたどり着いた。

「おまたせー。急に来ちゃうんだもん。びっくりしたよお」

千里は肩で息をしながら話す。

「悪いな。電車の中で見たもんだから、そのまま来ちゃったわ」

「そっかあ。わざわざ来てくれてありがとね」

「ああ。どっか喫茶店入るか」

「うんうん」

駅前のすぐ側にある喫茶店をチョイスし、中に入る。

テーブル席を選び、千里を奥に座らせる。

「千里何飲む？」

「ここね、ミックスジュースおいしいよ」

「ほー。じゃあそれする？」

「うんうん」

「あいよ。じゃあ俺コーヒーにするわ」

「うん」

お水を持ってきた店員さんに注文する。

注文を聞いた定員さんは、メモした後奥に戻って行った。

二人きりになった所で、千里が口を開いた。

「美恵ちゃん、引越しちゃうんだね」

「うむ。突然すぎてびびったがな」

「そうだよ。引っ越す前に何かして上げたいね」

「そうなんよ。何が良いと思う？」

「うーん。考えたんだけど、クラスみんなで寄せ書きとかどうかな？」

「寄せ書きか。それも悪くないな」

「でしょ？後は私達で一緒に遊びに行ったりとかね」

「ふむ。千里良いの？」

「良いのって？」

「いや、美恵と俺って疑いがあったから、
美恵と話したりするの気になるだろ？」

「光一くんが私の事想ってくれてるってわかったから、
今は平気だよ」

「そっか」

「それに、引っ越しちゃうのに、みんなで楽しい思い出
作りたいと思うしね。短い期間だったけど、友達には変わらないし」

「そうだな。じゃあ、どっか遊びに行って、
そんでもって寄せ書きをプレゼントかな」

「うんうん。それが良いと思うよ」

「んじゃそうするか」

「うんうん」

千里の表情に疑いの顔はまったく無い。

俺も、少しは信用してくれる存在になったって事か？

「美恵との思い出作りってどこがいいかな？」

「んー。光一くんにしたお誕生日みたいに、
豪勢にやってみたらどうかな？」

「ふむ。それも悪くないかも知れんな」

「サプライズな感じだと、さらにびっくりで
喜んでくれるかもー」

「千里、サプライズ好きだもんな」

「えへへ。喜んでくれる姿見るのが、
自分へのご褒美だもん」

「ご褒美ねえ。美恵も喜んでくれると良いな」

「そうだね。良い思い出、作らないとね」

「うむ。思い出はできるものじゃなくて作るものだからな」

「そうそう。たまには良いこと言うじゃない？」

「たまにはっていうのは余計だぞ・・・」

「たまには、だよ。私たちも、思い出いっぱい作ろうね」

「おう。特上大トロを超える思い出作ってやるよ」

「それ例えが分かりにくいんですけど～」

「分からなくて良い、感じる」

「感じろかぁ。また良い事言うじゃない？」

「お言葉に甘えるね。いっぱい感じさせてね」

「良い事言った覚えがないが、結果オーライだったみたいだな」

「お答えは？」

「・・・頑張ります」

「頑張ってください」期待してます」

「過度な期待は禁物だがな。何せ俺は福岡と違って

付き合いなれてるわけじゃないんでな」

「光一くんが一生懸命考えてくれた事なら、

何でも嬉しいよ」

「バンジージャンプツアーでも嬉しいか？」

「ええ～・・・怖いのはいやあ～～」

「何でもいいわけじゃないじゃん」

「一生懸命考えて、バンジージャンプツアーとか普通出てくる？」

「俺ならありえる。怖いのが好きだからな」

「怖くないのにしてね？」

「考えとくさ」

「おまかせしてると怖そうだから相談してくれてもいいよ？」

「それじゃサプライズにならんだろ？」

「サプライズでバンジーつれていかれても、恐怖のサプライズだよ～」

「恐怖感がまた良いかも知れんぞ？」

「いやぁーん。二人が楽しめることにしてね」

「あいよ」

楽しそうな千里。

そんな千里を笑顔を見るのが楽しみな俺。

その後も楽しく雑談した後、

千里を家に送ってから俺も家へ戻った。

17話「思い出作り」

6月15日、月曜日。

今日から美恵宛ての寄せ書きを作ることにした。

美恵が見てない所でクラスの一人ひとりに書いてもらう。

クラスみんなは誰も引越す事を聞かされておらず、

初耳で驚く人がほとんどだ。

昼になり、今日も絶好調で福岡とのジャンケンに負け、

購買で飯を買ってきた後、屋上で日光浴しながら飯を食う。

今日は、千里も輪に入り、3人で食事をした。

食いきった後、一息ついた所で、俺から本題に入る。

「話は変わるが、美恵の事なんだけど、

思い出作りの場所って何処が良いと思う？」

「うーん。俺あんまり美恵ちゃんとしゃべらんからなあ。

言いだしっぺの成瀬はどうなんよ？」

「候補があるなら質問せんだろ」

「まあ確かに」

「うむ。やっぱりここは女性の意見を聞くべきだな」

「ええー。私なの？」

「期待してるぞ、千里」

「うーん・・・」

千里はあごに人差し指を当てながら考える。

「美恵ちゃんの思い出がありそうな場所って光一くん知ってる？」

「思い出のありそうな所か」

そういえば、母親との思い出の場所をいくつか聞いたな。

「えっと、浜辺とか公園、夜空に母親の思い出があるみたいだな」

千里が急に手をポンと叩き、アイデアを話し始める。

「それなら、夜の浜辺でみんなで花火なんてどうかな？」

「ふむ。悪くはないな」

「それで、噴射花火で文字を描いちゃうとか良いんじゃない？」

福岡がその提案にツッコミを入れる。

「そんな一気に花火を点火出きるか？」

「導火線があれば・・・」

「売ってるの見たことないが？」

千里は少し考え。

「見たことないね・・・」

「うむ。ないな」

俺も想像した結果、売ってる所を見たことがなかった。

「じゃあ公園とかどうかな？」

「何か、俺が言ったのしか出て来てくないか？」

「まあ、そうだけど・・・」

千里は少しショボンとしている。

そんな中、福岡が聞いてくる。

「そもそも、その思い出の場所って何があった所だ？」

「ん。母親との思い出の場所らしいよ」

それを聞いて福岡は自分の頭を少し強めに平手で叩く。

「かーっ！あのなあ、そんな所に思い出が上書きできるとでも思ってるのかね」

「ん？どういう意味だ？」

「いいか、お母さんは既にもう死んでいないんだ。

そんな辛い場所でお祝いされても、

お母さんの事を思い出して心底喜べると思うか？

もうここから離れられないんだっていう気持ちが込み上げて、うれし泣き所か悲し泣きになっちゃうぞ？」

「ふーむ。確かに、一理あるな」

千里も納得してるようで、コクコクと顔を縦に振る。

「いいか。俺達は俺達の思い出を作る為に今考えているんだ。

喜びだけが残る思い出をな。

その3つに重ねるのは全部却下だ却下」

「ふーむ」

俺は腕を組んで、壁に体を預ける。

相変わらず福岡の一言は説得力がある。

女性を扱いなれてるだけあって、相手の気持ちも

理解できるからこそてるんだろうな。

「では福岡よ。我に最善の一手を教えてくれ」

「そうだな・・・あえて人の家とかどうだ？」

「ほうほう。それが最善の一手だったわけだな」

「そうだな。カラオケってのもありだが、

家だと飾り付けも自由だし色々出きる幅が増えるぞ」

「ふむ。そう来たか。確かにそうだが、

カラオケであんだけ出来たんだから、あれぐらいじゃね？」

「ふふ。1つさらに新要素を付け加えよう」

「新要素？」

「その名も、バルーンサプライズだ」

「なんじゃそりゃ？前も風船あったじゃん」

「今回は、風船の中に何かメッセージを入れておいて、
割ってもらう事で1つずつ確認出きるというものはどう？」

「ほう。割るの怖いって言われたら終わりじゃね？」

「・・・そうとも言う」

「だめじゃんー！」

「何かないものかねえ」

うーん。

まったく決まりそうにない。

俺は空を見上げ、ぼーっと考える。

空か。

・・・

・・・

「そうだ」

久しぶりにひらめいた。

ピカーってきた。

「お？成瀬ひらめいたか？」

「うむ。完璧だ」

「そうか。言ってみろ」

「エレベータがある屋上にいける場所に行くんだ。

そして、屋上には何らかの仕掛けをしとく」

「ふむ。それで？」

「エレベータって大体階段の側にあるだろ？」

「どうかな。まあ、あるかもな」

「それでだな、千里と美恵はエレベータに乗ってもらうんだ。

それで、全ての階にボタンを押す。

1つずつ扉が開く度に、福岡と俺はエレベータ前に行って
画用紙を1枚ずつみせる。

そこには、段々続いていくメッセージが書かれてるんだ」

「ほうほう。体力勝負だな」

「俺達がぜえぜえいいながら最後までたどり着ければ、
感動するぜ？」

「そうだな。意味不明な行動に感動するな」

「おう。どうだ？」

「まあ、ノーコメントでよろしく（笑）」

「なんじゃそりゃ。千里はどう思うよ？」

「んー。記憶に残るという意味ではありかなー」

「何だその何処か引っかかるような言い方は」

「人が途中で乗ってきたりとかすると、すごく迷惑になっちゃうし、

色々と問題がありそうだけど。。。」

「まあそれはあるな。しかし、1Fで遭遇しない限りは上に上る住民はいないんじゃないか？」

「それはそうだけど。。。降りようと待ってる人がいたら、なかなか降りてこないって所で大迷惑かも」

「当たり前のようなサプライズより、想像つかないサプライズの方が印象に残るだろ？」

「たとえそうなった場合でも美恵には気持ちは伝わるさ」

「そう考えるなら、ありはありかな」

「よし、じゃあこれで行こう。俺と千里は寄せ書き集めるから、福岡場所探しよろしく」

「げ。まじかよ！じゃあ、何書くかお前ら二人で考えろよな」

「おっけ。千里と俺で考えるわ。マンション探しよろしくな」

「かなりめんどくさそう」

「まあまあ。行動範囲広い福岡だから出きる技だろ？期待してるぜ」

「へいへい」

福岡はめんどくさそうに返事をする。

だが、こういう場所探しは必ず期待に答える福岡だから、結構信用しているのだ。

俺達は役割分担を決め、当日までに出きる限りの事をやるようにした。

.....

6月27日、土曜日。

時間が立つのはあっという間で。

俺達は各自、自分達のすべきノルマを達成し、予行練習も行って、準備は整った。

千里と俺は、寄せ書き集めと伝えたいメッセージを画用紙に書いた。

福岡は最適なマンションの確認と、以前のカラオケ屋を手配してくれた。

マンションは8階建てで、最上階には屋上にも出る事が出来、景色も良い。

エレベータに追いつくことができるか何回か練習し、思ったより何とかなるレベルだと思った。

そして今日、実行される事になる。

俺は美恵にお別れ会をすと言い、呼び出す事に成功。

美恵の最寄り駅で13時に待ち合わせとした。

福岡、俺、千里は早めに集合場所へ向かい、

美恵を出迎える形をとる。

15分前には俺達3人は合流し、美恵が来るのを待った。

．．．

約束の5分前位に、美恵は姿を現した。

俺達3人は手を振りながら美恵を出迎える。

美恵もこちらに気付き、小走りで近寄ってきた。

そんな美恵に、俺は声をかける。

「よっ。今日は来てくれてサンキューな」

「ううん。こちらこそ誘ってくれてありがとう」

「おう。じゃあ、早速行こうぜ」

「何処行くの？」

「カラオケだよ。まあ、ついてきて」

「うん」

美恵をつれ、以前俺が誕生日に祝ってくれたカラオケ屋に向かう。

ここには、福岡のコネで事前に俺の誕生日にやってくれた様な、お祝いルームを用意したのだ。

部屋の中は紙帯や風船の綺麗な飾り付けがされており、昨日学校の帰り、俺達3人で必死に準備した。

福岡を先頭にカラオケ屋に入り、ルームに案内される。

ルームのドアの前で、福岡は定員を止める。

そして、美恵の方を向き。

「美恵ちゃん。扉、開けてみて」

「え？はい」

美恵は言われるがまま、ルームのドアを開く。

開くと同時に、美恵は口に手の平をあて、驚く様子を見せた。

「わあー．．．すごい．．．」

「ささ、中に入って」

美恵を中に誘導し、一番奥に座らせる。

その後続き、俺達も中に入って隣に座った。

美恵は部屋をぐるりと見渡ししながら、すごーいすごーいと言っている。

「美恵、何飲む？」

メニューを広げ、美恵に見せる。

「えっと。ジンジャエールで」

「OK」

定員に俺達のワンオーダーを注文し、定員は部屋を出て行った。

「美恵。今日はたっぷり遊んで楽しもうぜ」

「うん。みんな、ありがとう。嬉しい」

俺は事前に決めておいた局を選曲表を見ずにリモコンでセットする。

ケツ○イシのトモダチという曲を。

「美恵、俺達にぴったりの曲だ。聞いてくれ」

「え？うん・・・」

TVに映像が流れ、美恵もその歌詞を聞くかのように

テンポにあわせて軽く顔を縦にふる。

俺は一生懸命、歌いきった。

・・・

歌い終わり、美恵の方を向くと、

涙ぐんでいる美恵の姿があった。

「光一君、ありがとう」

「おう。俺達は離れても、ずっとトモダチだ」

「うん・・・」

ドアがノックされ、店員が中に入ってくる。

タイミングばっちりだ。

実は、最初からこのタイミングになるように計算しており、

この後に千里が作ったケーキが運び込まれる予定となっていた。

予定通りに千里が作ったケーキを定員がテーブルに置く。

千里はキャンドルに火をつけ、チョコで書いたメッセージプレート
を美恵の方へをみせた。

『ずっと、トモダチだよ』

そのケーキを見た美恵は、うるうるとしていた目から涙が溢れる。

「みんな、ありがとう。本当にありがとう・・・」

美恵は感謝の気持ちを俺達に伝えた。

俺は美恵へ話しかける。

「このキャンドルにともった火は、美恵の辛い思い出をあらわしている。

これを消せば美恵は幸せになれる第一歩となるんだよ。

ささ、一気に消しちゃってくれ」

「・・・うん」

美恵はいっきに息を吹きかけ、火を消した。

そして、チョコで書いたメッセージプレートの下に、

暗い場所でしか見えない蓄光塗料で書かれた、

第2のサプライズメッセージが浮かび上がる。

『美恵は今、幸せになったよ』

美恵はそれを見て、涙を流しながら、顔を縦に何度もふった。

「うん・・・幸せ・・・みんな、ありがとう」

俺達3人は美恵に大きな拍手を贈る。

「さあ！今日は最高の思い出として楽しもうぜ！美恵！」

「うん・・・ありがとう」

俺達はその後、ケーキを頬張りながら、カラオケで盛り上がった。
相変わらず、千里の作ったケーキはうまかった。

.....

やがて、6時間歌いきった俺達は、そのカラオケ屋を後にした。

「いやー、楽しかったな！美恵」

「うん。みんな本当にありがとう」

「美恵に、見せたいものがあるんだよ。ついてきて」

「え？うん」

美恵をそのまま福岡が見つめてくれたマンションへ連れて行った。

...

マンションに到着し、住民が降りてこなさそうか確認後、

エレベータを呼ぶボタンを押し、降りてくるのを待つ。

美恵は不思議そうに周りをキョロキョロし、質問してくる。

「誰かの家に行くの？」

「いや、見せたいものを見せに、ね」

「??」

美恵は状況を把握出来ていないうちに、エレベータが下りてきた。

「それじゃ、千里よろしく」

「うん」

千里はエレベータの中に入り、美恵を誘導する。

二人が入った事を確認後、俺は鞆から画用紙ブックを取り出し、

1枚目を開いて美恵達に見えるように持った。

『これを見てね』

千里は美恵が見た事を確認し、全階のボタンを押して閉じるを押す。

扉がしまり、エレベータはゆっくりと上がり始めた事を確認後、

福岡と俺はダッシュで階段を駆け上がり、2枚目の画用紙を広げた頃に、

エレベータが来て扉が開く。

『今日は楽しかった？』

美恵は顔を縦に降る。

そのまま千里は閉じるを押す、再びエレベータは上昇した。

俺達二人もダッシュで駆け上がり、3枚目、4枚目と

上昇する度にめくっていった。

『短い期間だったけど』

『俺達はずっと友達だよ。』

『これからはお父さんと二人で頑張るよ』

『楽しい生活を送ってね。』

『俺達が大きくなった時、また一緒に遊ぼう。』

美恵は階が上がる程、涙ぐむ。

そして、最上階にへろへろになりながら、俺達二人は駆け上がり、最後の1枚を広げて待った。

エレベータも屋上へ到着し、最後の1枚を美恵は見届ける。

『光一、福岡、千里、美恵の4人だけの約束だよ。』

俺は、息を切らしながらこういった。

「俺達は、ずっと友達だ。これからもずっとな」

「うん・・・ありがとう・・・」

美恵は溢れる涙をぬぐいながら、何度も顔を縦にふった。

俺達もやりきった事に満足し、みんなでピースする。

そのまま屋上の屋根のない所へ移動し、美恵に星を見せる。

「綺麗な星・・・」

「ああ」

千里は鞆からクラスのみんなが書いた、寄せ書きを取り出し。

「美恵ちゃん。これ、みんなからのプレゼント」

美恵に寄せ書きを見せる。

「こんなものまで・・・」

「元気でね、美恵ちゃん」

「うん・・・ありがとう」

美恵は寄せ書きを受け取り、ぎゅっと胸に抱き締めた。

新しく刻まれた、俺達との思い出も一緒に。

18 最終話「未来日記 また会う日まで」

6月29日、月曜日。

今日は美恵が引っ越し日だ。

17時10分発の飛行機に乗るらしい。

もう、美恵の席には誰も座っていない。

ぽつんと、机だけが残っている。

先週の金曜日に、学校で軽いお別れ会があった。

寄せ書きをみんなにお願いしただけあって、

みんな、美恵の事を明るく見送った。

俺達は、学校が終わったら直ぐに飛行場へ向かう予定だ。

キーンコーンカーンコーン・・・

最後の6時間目が終わるチャイムがなり、

ホームルームが始まる。

耳が腐りそうな寒いオヤジギャグを担当から強制的に聞かされ、

みんなしらける頃に担当は満足したのか、ホームルームは終わった。

俺は鞆に荷物を入れ、福岡の席へ向かう。

福岡はマイペースで帰る準備をしていた。

「準備出来たら行こうぜ」

「おう。ちょっと待ってくれ」

鞆を閉め、席を立つ。

「OK。行こうか」

俺達二人は、千里の席へ向かい、福岡と俺とで千里を囲む。

「千里、行くぜ」

「うん。これ、今日のね」

「サンキュー」

千里から今日の分のノートを受け取り、鞆へしまう。

そうしている間に、千里も帰る準備が整い、席を立った。

「んじゃ、行こうか」

「うん」

俺達は学校を後にし、駅へ向かっている途中で、俺のベルが鳴った。

ポケットから取り出し、内容を確認する。

『イマカライエデマス ミエ』

美恵からのベルだった。

「美恵ちゃんから？」

千里が尋ねてくる。

「ああ。今家出るってさ」

「そっか。ちょうど良い位だね」

「そうだな。所で、伊丹って何で行くのが早いんだ？」

福岡が、は？っていう顔をしながら答える。

「え・・・成瀬、行き方チェックせずに今日ここにいるのか？」

「もちろん」

「お前なあ。ちゃんと事前に調べて来いよな」

「そういう福岡は調べて来たんだろ？どう行けば良い？」

「電車だと乗り換えが面倒だから、天王寺でバス乗った方が楽だな」

「そっか。じゃあ、天王寺向かうか」

「おう」

俺達はそのまま天王寺へ向かい、バスで乗り換えて伊丹空港へ向かった。

.....

バスには30分ほど乗っただろうか。

ようやく、伊丹空港へ到着する。

「美恵は南ターミナルの出発ロビーで待ってるって言ってたな」

「うん。そう言ってたね」

俺達はそのまま2階にある出発ロビーへ向かう。

あたりをキョロキョロ見回していると、美恵の姿を見つけた。

「おーい！美恵～！」

大きな声で美恵を呼ぶ。

その声に気付いたようで、美恵は振りかえり、手をふった。

俺達は美恵のもとへ歩いていく。

「よっ。見送りに来たぜ」

「みんな、来てくれてありがとう」

美恵は軽く、会釈した。

「昨日はすごく楽しかった。いっぱい思い出出来たよ。

光一君、福岡君、千里ちゃん。

どうもありがとう」

「いえいえ、美恵ちゃんと思い出が出来て良かったよ」

千里も美恵に会釈する。

「そうだそうだ。また遊ぼうな」

福岡は親指を立て、軽くグッドサインをする。

「うん。またみんなで遊びたい」

「向こうについても、俺達連絡取れるように、

連絡先書いといたんだ。これ、受け取ってくれ」

俺は美恵に俺達全員の連絡先が書かれた紙を渡した。

「ありがとう。向こうについたら、また連絡するね」

「おう。待ってるぜ」

「うん」

美恵は小さなポーチに渡した紙を入れた。

そして、そのまま封筒のようなものを取り出す。

「これ、みんなに渡したかった手紙」

「手紙？」

俺達は一人ずつ、美恵から封筒を受け取った。

「何の手紙？」

「私を乗せた飛行機が飛んだ後で見てね」

「ん？ああ。わかった」

搭乗する準備が出来たのか、父親が俺達に近寄ってくる。

「みんな、今日は美恵の見送りに来てくれてどうもありがとう。」

美恵も、良い友達を持ったな」

「うん。みんな友達だよ」

「成瀬くん」

「はい」

「キミには本当に迷惑をかけた。だが、これからは私が

美恵を幸せにしてみせるから、心配しないで見守っていてくれ」

「もちろんです。向こうに行っても、お元気で」

「ありがとう」

父親は俺達に深く、お辞儀した。

俺達も程ほどに深くお辞儀をする。

父親の頭があがり。

「さあ、美恵。行こうか」

「・・・うん」

少し寂しそうな美恵の声。

そんな美恵を励ますかのように俺は元気に振舞う。

「元気でな。俺達も元気にやってるから！

年賀状も、送るからな！」

「うん。私も送るね」

「美恵ちゃん。元気でね」

「うん。千里さんもありがとう」

「また、みんなでカラオケ行こうぜ。その時は、

また千里がケーキ作ってくれるだろうからよ」

「うん。福岡君も、ありがとう」

「じゃあ、元気でな」

俺達は美恵に大きく手を振った。

「うん。またね」

美恵も胸の高さで手を振り、しだいにゆっくりとなる。

「お父さん。いこっか」

「うん。それではみなさん、また遊んでやってください」

「はい。もちろんです」

もう一度父親は深く頭を下げた後、美恵を連れて
手荷物検査の方へ向かった。

俺達は、美恵が見えなくなるまでずっと見届けた。

「さあ、展望デッキ行こうぜ」

「うん」

俺達はそのまま、展望デッキへ向かう。

美恵が乗った飛行機を見届ける為に。

・・・

展望デッキに到着する。

この展望デッキには庭園があり、ワスレナ草等が植えられている。

そんな光景を目にし、俺はぼそっとつぶやいた。

「ワスレナ草か。俺達は、美恵の事は忘れない。ずっとな」

「うん」

「そうだな。また、遊べると良いな」

千里と福岡もその声が聞こえたのか、反応して来る。

俺達は策のぎりぎりまで近づき、美恵が乗る飛行機を確認する。

「あれかな？」

「多分、あれだね」

飛行機に乗り込む人を確認するが、美恵らしき人は見つからない。

もう、乗ってしまったのかもしれない。

やがて、乗る人がどんどん少なくなって行き、

乗車口の扉が閉まった。

「いよいよ、出発か」

「そうだね。美恵ちゃん、見つけられなかったね」

「んむ。俺達がデッキに着くまでに乗り込んだんだろうな」

「そうだろうね」

飛行機はゆっくりと動き出し、滑走路へ向かう。

大きなカーブを曲がった所で、一時停止した後、

一気に加速を始めた。

滑走路のギリギリで飛行機は浮き始め、

大きな空へと、上っていった。

俺達は小さくなっていく飛行機を。

見えなくなるまで目で追いつけた。

．．．

「行っちゃったね」

「ああ」

俺と千里は少しシンミリしていた。

それに引き換え、福岡は。

「別れというのは、辛いもんよのお」

以外と普通だった。

「そういえば、美恵からもらった手紙、見てみようぜ」

「うん」

美恵からもらった封筒を各自取り出し、中に入っている便箋を取り出す。

俺の手紙には、こう書かれていた。

『To 光一君。

今までありがとう。

短い間だったけど、いっぱい迷惑をかけてごめんなさい。

でも、今こうして元気でいれるのは、光一君が私の為に

色々考えて行動してくれたからと今でも思ってるよ。

光一君のおかげで、私は今お父さんと仲良くなれて、

すごく幸せです。

光一君も、ずっと千里さんと仲良くしてね。

私達が高校になった時、私にも彼氏が出来ていて、

光一君達と一緒にダブルデートしようね。

そんな未来に向かって、新しい一歩を私は踏み出すよ。

未来の光一君。

どんな風に変わってるかな。

そんな姿を楽しみにしてます。

また、連絡するね。

From 美恵』

俺は手紙を封筒に戻す。

「高校になった時ダブルデートしようだってさ」

「あ、それ私の手紙にも書いてたよ」

「なんじゃそりゃ。福岡のは？」

「俺のは高校になったらまたみんなでカラオケに行こうだってさ。

まあ、みんな共通したような内容は書いてるみたいだな」

「そのようだな」

「さて、俺はこれからデートがあるんで、ここでおいとましますわ。

後はここで成瀬と千里二人で花でも見て楽しんで行ってくれ」

「なんじゃそりゃ。もう帰るんかい」

「俺も忙しいんでな。んじゃ、お二人さんまたな」

「ああ。またな」

「福岡くん、またね～」

福岡は手を振り、小走りに展望デッキから出て行った。

「時間ギリギリだったんかいの」

「かもね。デートの約束してたんだね」

「それにしても、ダブルデートしようとか何か恥ずかしいな」

「そう？」

「あんまり仲良く話してたら相手も嫉妬するだろうし、
配分が難しくね？」

「まあ、それはあるかもね～」

「だよな。卒業まであと2年後か。」

「2年後の俺はどうなってんだろ？」

「どうなってるってどういう意味？私にとってこと？」

「まあそれもあるし、俺もちゃんと大学か就職決まってるんだらうか」

「今の調子で瞑想してたら危ないかもねー」

「かもしれんな。まあ、千里が重要ポイントはちゃんとチェック
してくれてるから、そう心配してないがな」

「そう？でも、ちゃんと勉強はしてね」

「ああ。適当にな」

「ねね、私達も2年後の事ちゃんと書いところよ」

「ん？」

千里は自分の鞆から手帳を取り出し、ある1ページを開く。

「はい、ここに私達が美恵ちゃんとダブルデートして
楽しかったって、書いところね」

「なんだそりゃ。未来日記かよ」

「そういえば、私達付き合ってるの？」

「は？何を今更？」

「だって、私付き合ってるって言われてないよ？」

「俺も言われてないのにキスされたぞ？」

「・・・言われたいな～？」

「なんだ、告白してほしいのか？」

「うんうん」

「手帳貸してみ」

「ん？うん」

千里は俺に手帳を渡す。

千里が書いた下に、こう書いた。

『付き合ってくださいと言った2周年記念日、

俺達は二人でこのワスレナ草を再び見た』

ペンと手帳を千里に返す。

千里は俺が書いた内容に目を通し。

「言われてないよ？」

「今から言うのさ」

「・・・そうなの？」

「千里」

俺は千里の両肩に手を置き、じっと千里を見詰める。

「はい」

千里も緊張した顔で俺を見詰める。

「好きだよ。付き合ってください」

「・・・うん」

俺は千里を引き寄せ、強く抱き締める。

千里は優しく俺を抱き締めた。

そして、二人の瞳に相互が写った時。

そっと。

優しく。

重なった。

『これからも、ずっと一緒だよ』

『うん』

*** Fin ***

.....

2年前のブログを読み終える。

俺はあんな恥ずかしい事してたんだな。

そんな日記を振り返っていた。

なつかしい。

明日、美恵と2年ぶりに会う日が訪れた。

今の俺は無事、千里と仲良くやってるかって？

福岡は元気かって？

それは、このブログに記録されている。

この2年間、今思えば色々なことがあった。

まさかあんな事に巻き込まれるなんて。

まあ、それはまた別のお話で。

今までご愛読頂き、ありがとうございました。

ご感想等ございましたら、コメント頂けると幸いです。